

儀式に對する喜びと聯關して、日本人の厚葬の風もまた彼らの注意に上つた。信者たちは神父と相談して、宣教師に與へられた廣い地所の一部にキリシタン墓地をつくり、死者のために非常に美しい墓を立てたのである。さうして葬儀の際には最も身分の高いものも熱心に參列した。トルレスはこれを見て葬儀にも力を入れ始めたのであらう。二年後の一五五四年十月に彼が豊後に送つた書簡(一五五五年九月二十日豊後發シルヴァの書簡に收録)によると、山口の領主の重臣フェイスメの義兄弟であるアンブロシヨの葬儀には、トルレスが男女の信者二百餘人をひきゐて參加した。トルレスは白法衣と袈裟をつけ、ポルトガル語の出来る青年ベルシヨールは白法衣をつけて十字架上のキリストの像を捧げた。墓地は宣教師館から遠いので、高い棺や明るい提燈を列ねた莊嚴な行列は、山口の町中を練つて行つた。死者の親族も山口の町の大衆もこれを見て非常に感激した。未亡人は四日間貧民に食物を施與し、會堂にも多額の寄附をした。

がこのやうな儀式に對する喜びのほかに、もう一つ目立つたのは、日本の信者たちが貧民救済のやうな愛の行に非常に熱心なことであつた。當時佛教の僧侶たちは、キリシタン攻撃の一つの論點として、彼らは寺への布施が惜しいからキリシタンとなつたのであらうと言つた。それを聞いた信者たちは、トルレスの許へ來て、あなた方が寄捨を受けないからかういふことを言はれる

のである、だからこの非難を避ける方法として、會堂の門に箱を備へ、信者らの自由な寄捨を受けて、それをこの町の貧民に施與することにしてはどうか、と提議した。これには勿論トルレスは同意したであらう。やがて信者たちは、月に一回貧民に給食することに定め、米の寄捨を受ける箱を會堂に備へつけた。給食の日になると、いつもその箱は溢れるほどに充たされた。給食をはじめる前にトルレスは十誠の話をした。ダルカセヴァも數回その場に列席して、給食をやる信者たちの強い愛のこゝろに驚いたのであつた。「私は彼らと交はつて、自分が恥かしくなつた」とダルカセヴァはいつてゐる(一五五四年ゴア發)。この信者たちの活動は山口の教會に多數の貧民をひきつけた。その中には信者となるものも少くなかつた。二年後のトルレスの書簡によると、信者たちは毎月三四回の給食をやつて居り、貧民の家を建てる計畫も出來たといふ。

かういふ信者たちの熱心は、早くから山口に治病の奇蹟を産み出してゐた。洗禮の水を飲むことによつていろ／＼な病氣が癒るのである。これはトルレスが飲ませたのではなく、熱心な信者が自分の信仰から出て飲ませたのである。かういふ治病の事績はこの時代のヨーロッパにも少ないであらうが、特に日本の地においては起り易かつたであらうと思はれる。これもまたキリシタンの信仰の傳播には役立つたのである。

このやうに、トルレスの下にある山口の教會では、信者たちが活潑に動いてゐた。そこに新來のガゴは一月餘り滞在し、再びフェルナンデスをつれて豊後にひき返した。この時シルヴァは山口に留まり、インドへ歸る筈のダルカセヴァはガゴに従つた。彼らは一五五三年の二月四日に山口を出發し、十日に府内へ着いたのである。

二 豊後における教會の建設

豊後では領主の大友義鎮が、ダルカセヴァに託するために、インド總督への書簡を作らせた。その書簡には、總督の贈物に對する謝意や神父たちの好遇と保護との約束などに次いで、神父ガゴの在留によりインド總督との通信の道が開けたことの喜びを述べた。自分はこの通信を前から望んでゐたが、それを媒介する人がなく、これまでには實行出来なかつた。今はその人を得たから、ポルトガル王のために盡さうとする自分の意志を形に現はすことができる。自分の領内の人々をキリシタンにするために、もつと多くの神父を派遣して貰ひたい、といふのである。この書簡が出来上ると、ダルカセヴァは直ぐにそれを携へて平戸へ向つた。多分二月の十四日であらう。通譯の人をつれないので、手眞似で意を通じながら、平戸まで十八日かゝつたといふ。平戸ではも

うシナ行の便船はなかつたらしく、彼がダ・ガマの船で出發したのはその年の十月十九日である。

ところで丁度右の書簡が作られてゐた頃に、三人の重臣が領主を殺さうとするといふ事件が起つた。それがこの書簡と關係のある事件であるかどうかは解らない。四年前に父の義鑑がやはり家臣に殺されたのであるから、さういふ家中のもつれの續きであつたかも知れない。とにかくダルカセヴァが出發してから二日の後、二月十六日に、その騷擾は激化し、府内の町は焼かれるであらう、掠奪が行はれるであらう、神父は所有品を匿さなくてはならぬと信者が告げに來た。ガゴは領主の身の上を心配してフェルナンデスを見舞にやつた。フェルナンデスが館やぶたに行つて見ると、武士が溢れるほど詰めかけてゐて、どれが敵、どれが味方とも解らなかつた。たゞ謀叛人を討伐する軍隊の統率者数人だけが識別された。領主と話すことなどは到底出来ない、自分の首さへも危ない、と彼は心配してゐたが、偶然領主が彼の側の戸を開けたので、彼は領主に會つてガゴの祝福と祈りの言葉を傳へた。領主の義鎮は非常に喜んで、謙遜な態度で、彼のための祈りを頼むと言つた。

ガゴとフェルナンデスとの運命もまた領主の運命にかゝつてゐた。領主が倒れば彼らもまた

倒れなくてはならぬ。で彼らは一切を神の手に委ねて待った。町には驚くべく多数の武装した人が動いて行つた。ガゴたちは戸を閉ぢ家の中に籠つて、劍を喉に當てられたやうな氣持で、たゞ祈つてゐた。

領主を殺さうと企てた重臣たちは、その家族や親族と共に、短時間の間に亡ぼされた。しかしその家に火を放つたので、町の被害は大きく、商家や武士の家が三百戸ほども焼けた。ガゴたちの持ち物の置いてあつた家も、周圍を火に包まれたのであるが、不思議に助かつた。夜になつて領主の使が來た。今日は大分心配したが、戦争は幸ひに止んだから安心して貰ひたい。貴下らの持ち物は焼けたことと思ふが、その損失は償ふから、これも放念を願ふ、といふ傳言であつた。

この騒ぎの後、ガゴたちは暫く或る寺院に住んでゐたが、その内山口のと同様な傳道許可狀を貰ひ、會堂のための敷地をも給せられた。ガゴたちの住む宣教師館の建築も早速開始され、同一五五三年七月二十二日マグダレナの祭日の頃にはすでに出來上つてゐた。その建築のためには信者たちが車を以て石を運ぶといふやうな勞働に服し、勞働をなし得ない身分のある信者たちは、風爐を携へて來て湯を沸し茶を立てて勞働者たちをねぎらつた。また熱心な信者である一人の鍛冶屋は、他の人々が仕事を休んでゐる祭の日に、ふいごや炭を携へて來て宣教師館のために釘を

作つた。さういふ風にしてこの會堂は、信者たちの熱心の上に建てられたのである。

領主がキリシタンを保護してゐるのであるから、宣教師たちに公然害を加へるものはなかつたが、しかし佛教の僧侶たちの迫害は執拗に行はれた。ガゴたちが寺院にゐた時には、度々議論を吹きかけ、嘲笑や罵詈を浴びせた。宣教師館に移つてからも、夜宣教師館に石を投げ込むとか、路上で石を投げつけるとか、といふ風なことをやつた。領主は投石のことを聞いて、その附近に住んでゐる武士たちに護衛を命じ、或は夜中使を出してガゴたちを見舞はせたので、それきり投石は止まつたが、佛僧たちの敵意は止まなかつた。しかしさういふ敵意にもかゝはらず、日本人の信者たちは、自分はキリシタンであるといふことを街頭に立つて公言し、熱心にキリスト教の神のことを説いた。或る信者は、その住んでゐる町に信者のない家は一軒もない、といふやうな情勢をつくり出した。また或る身分の高い信者は、町から一里のところにあるおのれの家にガゴを招き、家族たち三十人を信者にして貰つた。盲目の少年の目が開き、重病の娘が忽ちに全快するといふやうな現象も起つた。かうしてこの一五五三年の秋までには府内とその附近に六七百人の信者が出來たのである。

三 シャビエルの死と日本への關心の高揚

以上のやうな日本の情勢をインドに報告しようとするダルカセヴァは、歸途廣東附近の上川島において、一年前の一五五二年十二月二日にシャビエルが死んだことを聞いた。遺骸はすでにマラッカに移され、そこでダルカセヴァの到着を待つてゐた。マラッカからはダルカセヴァが遺骸と共にインドに向ひ、一五五四年の復活祭の頃にゴアに着いたのである。ゴアでの感激は大變なものであつた。シャビエルが讚美せられると共に、日本への關心も高まつた。ヤソ會のインド管區長ベルシヨール・ヌネスは復活祭の後にはもう日本行を決意してゐた。その許可を得るために總督を訪ねると、總督はちやうどダルカセヴァのもたらした大友義鎮の書簡を讀んでゐたが、ヌネスの來意を聞く前に、何をしてゐるのだ、何故早く日本へ行かないのか、と切り出した。そこで早速事はきまり、ヌネスは神父カスバル・ビレラと、イルマン五人、少年生徒五人を同伴することにした。そのイルマンのなかには後に日本史を書き残したルイス・フロイスもまじつてゐたのである。これらの人々はこの後日本傳道を力強く推進した傑物であるが、五月にはもう日本に向けてゴアを出發した。その航海が豫定通りに運んだならば、一五五四年の八月には日本に着き、

山口の教會を見ることも出來たであらう。しかるにインド洋では風が逆になり、暴風が起つたため、マラッカに着くのが非常に遅れた。マラッカでの彼らの非常な努力にもかゝらず、結局日本に向ふ季節風の時期を逸することになつてしまつた。マラッカの長官はこれに同情して、翌一五五五年の四月には、ポルトガル國王のカラベラ船を以て彼らを豊後まで届けようと云つてくれた。がこの航海も途中でうまくは行かなくなり、ヌネスやビレラが豊後についたのは一五五六年七月である。フロイスはさらに八年ほど遅れて日本へ來た。

四 山口の教會の活動とその受難

かうしてマラッカやシナ沿岸に日本へ向ふ新らしい傳道的情熱が停滯してゐた間にも、日本における教會は着々として進展しつゝあつた。

山口の教會では、トルレスの許にあつて新來のシルヴァが熱心に日本語を學び、もとの琵琶法師のロレンソは服従・貧困・清淨のヤソ會士の生活を身につけ、青年のベルシヨールはポルトガル語の理解をすゝめた。こゝではミサも説教も日本語の本によつて行はれた。トルレスは日本の風俗に適應することを心掛け、生れて以來の肉食の習慣を廢して日本人と同じ食物におのれを慣

らしたほどの人であつて、日本人の氣持を好く理解し、それをどういふ風に扱へばよいかをも心得てゐた。従つて信者たちの信賴を得ることも非常であつた。

山口の教會の傳道の仕事は山口の町のみには限らなかつた。多分シルヴァが山口に来てから最初の冬のことであらうと思はれるが、山口から一里ほど距たつた村で五六十人の農夫が信者になつた。皆讀み書きの出來ない人たちであつたが、その語るところを聞くと、學問あるものも口を出す餘地がないほどであつた。この信者らは絶えず集會を催はしてゐたので、トルレスは嚴寒の頃にもとの琵琶法師のロレンソを説教にやつた。ロレンソは洗禮を受けようとする人十二人を連れて歸つて來た。その中に齒のない老婆が數人ゐたが、さういふ人たちでもラテン語の主の祈りを暗記してゐて、まるで子供の時から知つてゐるかのやうであつた。さういふ調子で、その村の信者には主の祈りを知らないものはなく、その發音もポルトガル人に劣らなかつた。二年後の一五五五年にはこの村の信者は三百人になつたといはれてゐる。

シルヴァが來た次の年一五五三年のクリスマス前夜には、前年と同じやうに、氣高い男女の信者たちが會堂に詰めかけて來た。夜の一時からシルヴァと日本の青年ベルシヨールとが、代る代るに日本語で、アダムより世の終りに至るまでの六つの時期の歴史を讀んだ。初めの五期は舊約

の物語の摘要のやうなものである。(一)は人間の創造、エデンの園の生活、アダムの墮罪など、

(二)はノアの洪水、言語の分裂、偶像崇拜の始、ソドムの滅亡、ニネベのこと、ヤコブの子ヨセフのことなど、(三)はイスラエルの子らのエヂプトにおける奴隸化、モーゼによる解放、律法の確立など、(四)はエリシヤやユヂスのこと、ネブカドネザルのことなど、(五)はダニエルのことなど。そこまで讀んだあとでトルレスが曉のミサを行ひ、いろいろと歌つた。さうして晝のミサのあとで、シルヴァは、第六期の初め、即ちイエス・キリストがこの世に來たことを讀んだ。かうしてミサや説教が終つた後に、信者一同は宣教師館でトルレスたちと食事を共にした。この日と翌日には信者たちは貧民への食物施與を盛大に行つた。

キリストの誕生を祝ふ祭に對應して重要なのはキリストの受難と復活とを記念する復活祭であるが、この祭はそれに先立つ四十日間の斷食期を以てすでに二月の中頃に先觸されるのである。その開始期は灰の水曜日であるが、シルヴァが山口に來てからの最初の灰の日は、一五五三年の二月十五日で、ガゴはフェルナンデスと共にすでに豊後に去つて居らず、トルレスが灰を祝福してその意味を説明した。信者たちは、この四旬節の間に絶えず斷食を行つた。毎朝食事をする習慣のある日本人には、このことは非常に苦痛であつた。いよいよ復活祭の週に入り、キリストが

十字架についた金曜日になると、トルレスは十字架の祈禱を行ひ、信者らに十字架を拜せしめた。そのあとでシルヴァが受難の説教をした。これは恐らくロレンソか誰かが通譯したのであらう。その翌々日四月二日の復活祭の日にはミサの後に信者たちが盛大な食物施與をやつた。そのため會堂に青い布を張つて墓所のやうにしつらへ、祭壇の前には二本の蠟燭を立てた。トルレスは祈禱をし信者らはそれに應唱した。それと同じやうに翌一五五四年の四旬節にも信者たちは熱心に告解を行ひ、またしばしば斷食した。特に復活祭の週には多數の信者が斷食を行ひ、宣教師館に來て泊つた。夜は信者たちの間で互に體驗を語り合ひ、信仰を鼓舞した。金曜日には多數の信者が會堂に集まつて、十字架の儀式に列し、キリスト受難の説教を聞いた。この時にはシルヴァはもう日本語で説教したらしい。

信者たちが貧民施食の仕事を熱心に進めるに従つて、貧民の中から信者となるものが多數に現はれた。一五五四年の夏の頃には毎日十人、十二人の貧民が信者となつたといはれる。さういふ貧民の信者たちは、いろいろの祈禱の文句を覚え、毎日會堂の門に來て祈禱を捧げた上、満足して立ち去つた。多分さういふ現象や信者たちの熱心な慈悲の行を見た結果であらう。都から來てゐた二人の學僧がキリスト教に關心を持ちはじめ、トルレスの許へ教へを受けに來て、遂に信者

となつた。キョーゼン（パウロ）とその友センニョ（バルナベ）がそれである。二人はトルレスの助けを得て宣教師館の側に一軒の家を作り、何處からも何物をも受けずに、たゞおのれの手を以て獲たもののみによつて生きるといふ生活をはじめた。彼らの求めるのはたゞ徳のみであつた。二人は新らしい植物の如く日々に伸びて行き、その謙遜な態度によつてトルレスを感服せしめた。キョーゼンは宗學に精通した學者であつたから、やがて佛教の誤りとキリスト教の優れた點とを非常に明晰に把握し、それを人々に説くやうになつた。ロレンソがすでにさういふ仕事を始めてゐたのであるが、佛教學者としてキョーゼンは一層突き込んだ説教を始めたのであらう。

ほかにもう一人パウロと名づけられた信者が、この頃新らしく出來た。五十を越えた相當に有名な人で、文章を書くのが上手であつた。この人も、その妻が信者となつて以來非常に善くなつたのを見てキリスト教に關心を持ちはじめ、遂に信者となつたのである。さうして日本語の教義書をすべて書寫し、熱心に讀み、トルレスにいろいろと聞きに來た。自分でも數種の書物を書いた。徳の高い謙遜な人であつたから、親戚・友人その他多くの人が彼に導かれて信者となつた。

かういふ情勢の下に山口の信者たちは、一五五四年の末には、貧民施食を毎月三四回行ひ、貧民の家の建築を企てて募金をはじめた。信者の數はほゞ二千に達してゐた。トルレスの宣教師館

も著しく腐朽して来たので、新らしい建築が企てられた。半年餘りの後、一五五五年七月半ばには、幅九間餘、長さ六間半の新會堂が完成し、ミサが行はれた。その秋にはシルヴァが豊後に移り、フェルナンデスが山口に歸つて来たらしい。

これらの経過を通じて、山口の教會における信者たちの活動は非常に顯著である。トルレス自身も、「神の言葉は弘まり、キリスト信者は増加し、告解・説教、その他精神的な修練が盛んに行はれた。」と言つてゐるが(一五五七年十一月七日府内發)、恐らくこの時が山口の教會の最盛期で、それを作り出したのは、信者たちの盛り上る力であつた。後年トルレスはヌネスに向つて、「自分の全生涯中、山口の六七年間のやうに大きい歡喜と満足とを以て生きたことはなかつた」と述懐してゐる(一五五八年一月十日コチン發ヌネス書簡)。その歡喜と満足とは、結局において信者たちの活動にもとづいてゐるのである。

しかし新會堂のミサが行はれて後、僅か三ヶ月にして、陶晴賢が嚴島において毛利元就に慘敗した。山口の領主の權威は地に墜ち、町の平和は失はれた。翌一五五六年に入ると、毛利氏の壓力が追々加はつて来て、毛利勢がなほ尼子氏と戦つてゐる間に、すでに山口の町は内訌の兵亂によつて焼かれた。「日本の戦争は火を以てする。家屋は木造で壁がないから、火は風に煽られて猛烈となり、リスボンと同じ大きさだといはれる山口の町全部が、一軒ものこらずに焼けた。國

王の宮殿も、神父が非常に骨折つて一年前に建築を完成した會堂も、火を免れることは出来なかつた。(同上ヌネス書簡)トルレスやフェルナンデスが多年の艱難を忍びつゝ、築き上げたものは、三四時間の間悉く失はれた。領主や大身などの家臣であつた信者たちも、諸方へ散りつゝになつてしまつた。

やがて敵兵が來襲するだらうとの知らせに、信者が數人集まつて、トルレスやフェルナンデスの身の上を相談したが、その結果は騒ぎが靜まるまで山口にはゐない方がよい、といふことであつた。火災後二三十日を経て、敵はいよいよ山口の町へ一里ほどの所まで迫つて來た。信者たちは頻りにトルレスたちの退去をすゝめた。トルレスも遂に、亂後には歸つてくるといふつもりで、退去を決意した。信者たちは集まつて別れを悲しみ、出發の日にも町から二三里のところまで送つて來たが、まるで死別れでもあるかのやうに、男も女も少年も皆泣いた。トルレスも涙を抑へることが出来ず、激しい悲痛と愛情とを表はして別れた。かうして豊後へついたのは五月であつたが、悲しみと愛情とのために遂に病氣になり、七月にヌネスたちが到着した時にはまだ癒つてゐなかつた。

トルレスはこの時フェルナンデス、元琵琶法師のロレンソ、青年ベルシヨールなど、山口の教

會の幹部をすべて同伴した。信者を守る人はあとに残らなかつた。トルレスは間もなく山口へ引き返すつもりでゐたのである。半年の後、十二月には、大内義長やその他の大身から山口に歸るやうにとの書簡が來た。トルレスは早速領主大友義鎮の許可を求めたが、義鎮はまだその時期でないと言つて許さなかつた。翌一五五七年にはいよいよ毛利元就が山口を占領し、大内義長は自殺した。あとには毛利大友兩氏の直接の對抗がはじまり、大友義鎮自身が幾度かの戦争の試煉を経なくてはならなかつた。山口の教會を回復すべき機運は中々廻つて來なかつたのである。

五 豊後の教會の成長、慈善病院の經營

豊後の教會では、一五五三年以來、日本語の巧みなフェルナンデスがガゴを助けて、佛僧に對抗しつゝ傳道をすゝめた。ところでこゝでは、領主の保護があるとはいつても、身分ある人、事理を解する人の歸依は少なく、僧侶・富者・武士などは、頑固に舊信を守り、現在に執着してゐた。信者となる善良な人たちは多く貧民であつた。そこでガゴは知識ある人々、身分ある人々の教化に力を入れようとしたのであらう。自ら教義書を編纂して日本語に譯させ、領主大友義鎮に獻じた。義鎮はそれを重臣たちの臨席してゐる前で讀ませ、大に満足してその書に署名した。別

に寫本を作つて置き署名本は重臣たちに讀ませるといふのである。

かういふ教義書を作る際に、ガゴは、シヤビエルの教義書翻譯以來その仕事にたづさはつて來たフェルナンデスのほかに、パウロといふ日本人の信者の助けを藉りた。このパウロは、山口で改宗したパウロ・キョーゼンと同じやうに、佛敎の敎理に精通した人であつた。改宗して以來は、佛敎とキリスト敎との相違點を明かに指摘し、佛の敎へが偽りでありキリスト敎の神の敎へが眞であることを主張して止まなかつた。その説敎は非常に巧みで、佛敎を非難しても聽衆は怒らず、福音を説けば聽衆はその眞理なることを納得した。惜しいことに三年後の一五五七年に病死してしまつたが、ガゴはこの人を非常に高く評價し、ヤソ會士たらしめようとしてゐたやうである。多分このパウロとの接觸の結果であらう。彼は早くからキリスト敎の用語の問題に注意を向けた。シヤビエルの殘して行つた教義書は佛敎の用語を使ひ過ぎてゐる。それは虚偽の言葉を以て眞理を説くにほかならない。従つて誤解を生ずる。さういふ有害な言葉は捨て去り、新しい事物は新しい言葉を以て現はさなくてはならぬ。かういふ見地の下に彼は有害な言葉五十以上を見つけ出したのである。

身分あるものを教化しようといふガゴの希望は、一五五四年には幾分かづつ充たされたやうに

見える。府内に近い或る村を治めてゐた人が信者となり、ガゴをその村に招いて、妻子その他村人を受洗せしめた如き、その一例である。中でも目ぼしいのは、府内から九里か十里ほど離れた朽網郷の「大家族を有する一老人」の歸依であつた。府内の一信者アントニオが朽網に行つて、信仰の力で病氣を癒したのが機縁となり、この「身分ある老人」を改宗せしめるに至つたのである。老人はルカスといふ洗禮名を受け、その地方の多數の人々を教化したが、翌一五五五年の初めには、ガゴを朽網へ招いた。ガゴは、その頃豊後にゐたフェルナンデス、説教のうまい日本人パウロ、及び右のアントニオを伴つて、四旬節の頃に朽網に赴いた。ルカスの妻、二人の息子、その他家族のみで六十人、家族の外のものを入れると二百六十人の人々が洗禮を受けた。この地方一帯の領主はケイミドノで、豊後の最も有力な大身二人の内の一人であつたが、この人も説教を聞いて非常に喜び、豊後の國主の許しを得たらば信者にならうと言つた。彼は信者の保護を約し、出来るだけ多くの人の改宗を希望したので、彼自身の家來で洗禮を受けたものも少なくなつた。かうして朽網には、ガゴの希望するやうな、身分あるもの事理を解するものの歸依が實現されたのである。

しかし府内で信者となるものは依然として貧民や病人であつた。薬は洗禮の水だけであつたが、それが好く利き、十里二十里の遠方からさへも求めに來た。さういふ信者の間に「外形の行事」がいかに強い印象を與へるかを知つてゐたガゴは、いろ／＼の儀式を盛大に行ふと共に、信者の葬儀に特に力を入れた。先づ一般的に來世のことを理解させるために、毎年十一月の一ヶ月間は、毎日ミサを行ひ、死者の連禱を歌ひながら、棺を運び出す。その棺は會堂の中央に常置し、四隅に四本の大蠟燭を立てて置くのである。この行事には勿論、死についての説教が伴つてゐる。さうして實際に誰か信者が死ねば、多數の信者が集まつて嚴肅な儀式を行ふ。棺を造ることも出来ないやうな貧しい信者の場合でも、人々の寄附によつて棺を造り、それを絹布で覆ひ、富める人を葬る場合と全然同じやうな鄭重な儀式を以て葬るのである。會堂を出る前に主の祈りを三唱し、信者らも合唱する。棺は四人で運び、十字架のキリスト像を携へた白い法衣のイルマンと、聖水や聖書を携へた青年とが、ラダイニヤの音頭をとり、信者たちがこれに伴唱する。兩側には高い燈籠に火を點じたものを多數立てて行く。かういふ葬儀の行進は日本人に非常な感激を與へ、最初の時には三千人の見物が集まつた。特に、貧しい人をもこの様に嚴肅に葬るといふことが、人を感動せしめたのであつた。

が貧民と病人とを相手にする府内の教會は、遂にそれに適應した特殊な活動を始めるに至つた。

それは病院の經營である。その機縁を作つたのは、一五五五年にガゴの許へ告解のため、またそれ以上に魂を救ふ道の修業のため、やつて來たルイス・ダルメイダであつた。彼はリスボンの富裕な貴族の子で、その頃三十歳であつたが、マラッカ、シナ、日本を往來する航海者貿易商人たちの間ではすでに知名の人となつてゐた。このダルメイダが、この年にはダ・ガマの船で平戸へ來たのであつたが、ガゴの許に滞留してゐる間に、豊後の信者の状態を見、特に日本における産兒制限（間引き）の風習のことを聞いて非常に心を動かし、その救済のために病院設立の費用として千クルサドを提供しようと言ひ出したのである。その病院には、貧しい信者の乳母や二頭の牝牛などを用意し、貧民の嬰兒をどし／＼引き取つて哺育する。その嬰兒は入院と同時にキリシタンにしてさふ。そのため領主に請願して、嬰兒を殺さずに病院へ連れて行くやうにといふ命令を發布して貰はなくはならぬ。さういふ計畫であつた。この計畫は早速領主の前に持ち出されたが、領主の大友義鎮も非常に賛成してそれを許可した。これは多分この一五五五年の九月頃のことであつたらうと思はれる。間もなくダルメイダは、ガゴやフェルナンデスに伴つて一度平戸まで行つたが、その秋に出帆するダ・ガマの船には乗らず、そのまゝ日本に留まつて病院の仕事を始めたのである。

ダルメイダはこの時すべての所有をヤソ會に捧げようと思つたらしく、まだ日本へ到着しない管區長ヌネスの一行のために、船を買ふ資金二千クルサドを贈るとか、日本傳道に必要な畫像數種をリスボンへ注文するために、麝香に投資して百クルサドを贈るとか、いろいろヤソ會のために肩を入ればじめてゐる。

ダルメイダの最初の計畫は、恐らく一五五五年の末か翌年の初めには、緒についたのであらう。しかしそれが本式の病院として大仕掛けに建設されるに至つたのは、まる一年後のことである。その間にトルレス以下山口の教會の連中が豊後へ逃げて來た。管區長ヌネスの一行も豊後についてた。府内の教會の形勢は急激に變つて來た。これまで府内の教會に貧民の信者の多いのを嘆いてゐたガゴは、平戸に移つてそこで新しく傳道の仕事をはじめることになり、府内の教會は山口で信者たちの愛の行を指導してゐたトルレスが引受けることになつた。新來の神父ビレラ——このうち日本で非常に多くの仕事をするビレラは、老いたるトルレスを助けつゝ、日本の習慣や信者の取扱ひ方についてのトルレスの貴重な體驗を學び取るために、府内に留まつた。かうして府内の教會がトルレスのもとに一五五六年のクリスマスを盛大に祝ひ、この地方の多數の信者がこの愛の行の導者のまはりに集まつたとき、そこに新らしい機運の生じて來たことは察するに難くない。

い。多くの財産をなげうつて愛の行に没頭しようとしてゐたダルメイダがそこにある。過去の學識をなげうつてキリスト教的な愛の實踐に浸り込んだパウロ・キョーゼンも山口から來てゐる。さうして貧民や病人は會堂にあふれてゐる。だからこの時、何かが急に燃え上つて來たのである。その證據に、トルレスは、クリスマス後にビレラにつけて朽爛に派遣したフェルナンデスを、數日後に急に呼び返して、領主義鎮と病院についての交渉をはじめてゐる。義鎮は病院の仕事の善いことを知つて居り、前にその建設の決心をしたのであつたが、貧民と接することを賤しむ氣持から、その時まで躊躇してゐたのであつた。そこでトルレスは早速實行に着手し、會堂の隣りの地所に大きい病院を建てた。その病院は二つの部に分れ、一は普通の外科と内科、他は癩病院であつた。治療にはダルメイダとパウロ・キョーゼンとが當つた。ダルメイダは特に外科の手術がうまく、そのやり方を他の人にも教へた。イルマンのシルヴァなどもその一人である。パウロは漢方醫で、内科をひきうけ、遠く數里の山の中まで往診した。漢方藥の效能はトルレスたちにも認められた。

かうして豊後の慈善病院は、豊後の教會の著しい特徴になつた。

六 トルレスとビレラ、平戸の教會

シャビエルの死に刺戟され強い感激を以て一五五四年の五月に日本に向けインドを出發した管區長ヌネスの一行は、運悪く途中で二年餘の年月を空費し、一五五六年七月の初めに漸く豊後に到着した。この遅延はヌネスには好い影響を與へなかつたであらうが、さらにその到着の當時、豊後は内亂で騒いでゐた。ヌネスらは日出の港に着く前に豊後の國主が殺されたといふ噂をさへ聞いたのである。着いてから確かめて見ると、十五日前に國主は謀叛の嫌疑のある大身十三人の家を焼きその一族を滅したとのことであつた。その謀叛人らは三年前ガゴが府内に落ちついた時の謀叛の殘黨であつたらしい。一夜のうちに雙方で七千人の人が死に、國主は府内から七里の島か山かに通れてゐた。國內にはまだ戰爭の懼れが充ちてゐた。その不安のなかで宣教師たちが少しも死を怖れず傳道に熱中してゐる姿を見て、ヌネスは「自分を恥ぢた」と云つてゐる。がこのやうな現前の不安状態のみでなく、彼はまたトルレスから山口の戰亂やその教會の没落の話を聞かねばならなかつた。この「善き老人」トルレス、日本人に適應するために肉食を捨てて乏しい菜食に甘んじてゐるトルレス、迫害と戰亂とに堪へ忍んで漸く築き上げた教會を今や悉く失ひ

去つたトルレス、この徳と克己とに於て完全な、模範的なトルレスを見て、インド管區長ヌネスは、その堪へぬいた試煉の大いさに驚嘆したのであつた。そのほかに彼は、シャビエルの通辯をして歩いたフェルナンデスから、シャビエルが日本において如何に多くの苦難に堪へ忍んだかをも聞いた。しかしさういふ苦難や戦亂の不安などは、この管區長には不向きであつた。フェルナンデスに案内されて豊後の内地を旅行したとき、木を枕にして蓆の上に寝ね、何の調味もなしに米の飯を食ふといふ日本の生活が、すでに彼を病氣にしたのである。漸く動けるやうになると馬に乗つて府内へ歸つては來たが、三ヶ月の間日々悪寒と發熱とに苦しみ、死ぬかと思ふほどであつた。そこで彼は、目下の日本が戦亂のために傳道に適しないこと、インド管區長としての職責が他にあることなどを考慮し、日本に來たと同じ年の秋に、豊後にゐたポルトガル船へ病中の身を託して日本を去つたのである。

しかしそれでもインド管區長が日本を視察したといふことは無駄ではなかつたであらう。その上神父ビレラとイルマン二人とが加勢に來たことは、教勢の擴張に非常に役立つた。まづ第一は平戸に日本で三番目の教會が出来たことである。平戸にはすでにトルレスが一年ほど滞在して、かなりの數の信者を作つて置いたのであるが、その後は手が足りなくて、ポルトガル船の入港し

た折にガゴが出張するといふ程度に止まつてゐた。そこへヌネスの着後間もなくガゴが派遣されたのである。平戸の領主松浦隆信は、日本への渡來の途中シナで停滯してゐたヌネスに宛てて招請の書簡を發した。ヌネスは平戸へは向はず眞直に豊後へ來たのであるが、右の領主の招請を無視する氣はなかつたのであらう。ガゴは通譯のイルマン一人、信者一人をつれて平戸に移り、領主の許可を得て、地所を買ひ聖母の會堂を建てた。やがてこの後にはこの地の教會の重要性がだんだん増して行くのである。

第二はトルレスがビレラに日本傳道の特殊のやり方、特殊の喜びを教へ込んだことである。一五五六年の降誕祭後に、トルレスはビレラにフェルナンデスをつけて朽網に送つた。ビレラは山奥の農村の人々の純眞な信仰や愛情にふれて、初代の教會における新鮮な信者を見るやうな思ひをした。ついで一五五七年には貧民病院の建設があり、愛の行にいそしむ信者たちと共に働らいた。この年の四旬節の頃には、領主が五里ほど離れた城にあつて彼らを直接保護することが出来ず、キリシタンの宣教師らは殺され宣教師館は焼かれるであらうとの噂が頻りであつた。宣教師らは死を覺悟し、夜も服装を解かずに寝た。信者が數人、警護のために宣教師館に泊つたが、宣教師たちも順番に徹夜して警備に加はつた。しかしさういふ不安のなかでも、毎日の説教は缺か

さす、金曜日と日曜日との鞭打の苦行を續けた。さういふ膽の据つた態度をもトルレスはビレラに仕込んだのであつた。やがて復活祭の週が來ると、戦亂の不安にもかゝらず、極めて盛大にさまじい行事が行はれた。教會の人々のほかにこの冬を豊後で過ごした數人のポルトガル人もそれに參加した。そのお蔭で二つの合唱隊には五人づつのポルトガル人が加はることが出來た。オルガンの演奏やこの合唱隊の歌は多くの信者を熱狂せしめた。木曜日にはポルトガル人たちと共に日本人の男女約三十人が聖餐を受けた。これは初めての聖餐であつて、日本人の信者に與へた印象は非常に深かつた。希望者はもつと多數にあつたのであるが、トルレスは時機の熟したもつただけを選び出したのである。聖餐の時には、それを受ける者も受けられない者も涙を流して泣いた。さういふ強い感激は宣教師たちにとつても「生れて以來初めての」経験であつた。その他いろいろの行進や鞭打の苦行や儀式などが一々信者を感動せしめた。復活祭の前夜には、トルレスは非常に舞臺効果の大きい方法を用ゐた。繪布その他のものを以て莊嚴に飾り立てた祭壇、復活したキリストの像、火を點じた多數の蠟燭などを、初めは黒布で隠して置く。さうして會堂の中央の小祭壇で、合唱隊の一部に唱はせながらミサを行ふ。それが終るとトルレスは引き込んでそつと服を變へる。合唱隊がミサを唱ひはじめると、「主よ、憐れみ給へ」の章が終ると、トルレスが高

らかに「高きにある神に榮光あれ」を唱ひ出し、合唱隊がそれに和する。その途端に黒布が切つて落され、莊嚴な祭壇が會衆の前に現出するのである。信者たちはまるで失神したやうに打たれた。翌日の朝には、日本で作つた立派な天蓋の下に聖體を奉じて、美しい廣い庭園の中を行進して廻つた。天蓋は四人のポルトガル人が持ち、トルレスは晴れの服装に薔薇を飾つた緑の冠をつけてあとに従つた。次には香爐を持ち花冠を戴いたイルマン一人、その次にはいろ／＼な色の薔薇の花環を戴いたイルマン四人がオルガンにつれて歌ひながら續いた。天蓋のそばには、ポルトガル人二人が松明を持ち、最古參の日本人二人が燭臺に蠟燭を立てて持ち、さらに二人の白法衣を着たものが蠟燭を持つてついてゐた。この行列は庭を三度廻つたが、銃を持つたポルトガル人が十三四人ゐて、その度毎に聖體に對して祝砲を放つた。この行進もまた信者たちには非常な感動を與へたが、しかしそれによつて強い印象をうけたのは信者たちのみではない。一般の見物人も會堂の敷地内に充滿し、その騒ぎのために説教が出來ないほどであつた。ビレラはかういふ祭儀の日本人に對する影響力をもはつきりと認識することが出來たのである。

かうしてビレラが日本での最初の一年を送つた頃、一五五七年の夏に、大友義鎮は毛利氏に通じた秋月文種を破つて、博多の町を手に入れた。この戦勝に氣をよくした義鎮は、九月に宣教師

館を訪ねて晚餐を共にした。その時彼は宣教師たちに俸祿を與へようと言ひ出したが、トルレスはそれを病院の費用にまはしてくれと頼み、その通りにしてもらつた。義鎮はまた博多に宣教師館と會堂のための地所を與へようと言つた。これはトルレスが喜んで受け、早速その準備に取りかゝつた點である。それだけ宣教師の手がふえてゐたことは、メネス來朝の結果の第三の點として擧げてよい。トルレスは平戸にゐるガゴに博多の教會建設の仕事をやらせ、平戸には日本にことに慣れて來たビレラを置かうと考へた。ちやうどその九月にポルトガル船が二隻平戸に入港したので、トルレスは早速ビレラを手傳ひにやつた。この時から平戸におけるビレラの一年間の活動がはじまるのである。初めには船のポルトガル人たちを激勵して、日本人の信者に好き模範を示すために、いろ／＼の儀式を行つた。特にミサを歌ひながら小山の上の十字架に向つて行進する聖行列が人々の注意をひいた。行列の先頭には四十人のポルトガル人の銃手が加はつて、時齊射をやる。船は旗を飾り、祝砲を打つ。笛とチャメラとの樂隊、蠟燭や炬火、高く捧げられた十字架、美しい法服をつけた神父たち。さういふ行列が、日本の諸地方から貿易のために集まつて來てゐた人々に強い印象を與へたのである。

さういふ行事のあとでガゴは博多の地所を受取るために出發したが、あとに残つたビレラは、大友義鎮の軍が平戸を襲撃するであらうとの噂に嚇かされた。戦争が起れば日本人の信者の女子供たちは多數死ぬであらうし、貧しいものさへも掠奪を受けて安靜を失ふであらう。信者のある者は夜ビレラを訪ねてさういふ不安を語り、もしビレラが平戸に留まるならば、さういふ際には會堂に來てビレラと共に死ぬであらうと言つた。さういふ状況のなかにビレラは敢て留まり、平戸及びその附近の島々に傳道をはじめたのである。

戦争は幸ひにして起らなかつた。一五五八年の初めにはビレラの傳道も非常に調子よく進んで、二ヶ月間に千三百人の信者を作り佛寺三ヶ所を會堂に改造した位であつた。それには領主松浦氏の一族たる籠手田左衛門(ドン・アントニオ)の協力があつた。籠手田氏は生月島、度島その他の小島の領主であつて、前から信者となつてゐたが、ビレラの勧めに従ひ、ビレラと共に村々を説教して廻つたのである。しかし佛寺から佛像を運び出して焼き拂ひ、あとをキリスト教の會堂とするといふやうな過激なやり方は、佛僧や佛教信者の反動を呼び起さずにはゐなかつた。その先頭には一人の佛僧が立つた。彼はキリスト教を攻撃し宣教師と討論などもやつた。かうしてキリスト教徒と佛教徒との對抗がはじまり、右の佛僧は宣教師の國外追放を叫び出したのである。身分のある武士で、小山の上の十字架を切り倒したのもあつた。それに對抗して島のキリスト

教徒は、更に多くの佛像を焼いたり海に投げ捨てたりした。遂に佛教徒の武士たちは領主に宣教師の追放を請願するに至つた。それがきかれなければ内亂が起りさうであつた。領主は遂に屈して、インド管區長ヌネスに對する約束にもかゝらず、ビレラを平戸から追放したのである。

かうして平戸の教會は挫折したが、しかし信者がなくなつたのではなかつた。籠手田氏のたくしま生月島、その他平戸島の村々には依然として信者が多く、美しい會堂もあり、改宗した僧侶や熱心な信者による説教禮拜も續けられた。平戸の町では公然たる説教は禁せられてゐたが、信者のあることは右の村々と同様であつた。二三年後にルイス・ダルメイダが出張して來たときには、度島は「天使の島」のやうであつたし、生月島も住民の三分の一は信者となり、六百人を容れる會堂を持つてゐた。ダルメイダは最大級の感激の言葉を以てこれらの信者の状況を報道してゐる。この地方は倭寇の活動以來海外交通の尖端に立つてゐたのであるから、さういふ現象が起るのも不思議はないのである。

がさういふ民衆の氣分と、武力によつて決せられる當時の政情とは、全然別のものであつた。新興の毛利氏の武力は、丁度この頃に北九州を不安と動搖に陥れた。ビレラが平戸を追はれて間もなく、ガゴもまた博多を逃げ出さざるを得なかつたのである。

ガゴが大友義鎮から博多の地所を實際に受取ることが出來たのは、一五五八年の復活祭の後であつた。彼はフェルナンデスと共に博多に赴いて宣教師館と會堂とを建築し、布教活動をはじめた。博多には山口から來てゐる信者もあつたが、中でも山口から移住して來たアンドレーといふ武士は、非常に熱心で、遂にエルサレムのエステバンのやうに殉教するに至つた。その子がヤソ會に入つてイルマンとなつたジョアン・デ・トルレスである。土地の人は嚴選して信者としたので、數は少なかつたが、富裕な貿易商も數人信者となつた。ところが一五五九年の復活祭の後に、大友氏に背いた筑紫氏の二千人ほどの兵が博多に來襲した。市民はその日防禦するにはしたが、夜のうちに敵と折衝して町を引き渡した。大友氏の代官は殺された。フェルナンデスは信者の子供數人をつれ、會堂の所有品を携へて、平戸の船に乗つて逃げた。ガゴはイルマンのギリエルメ、一人の日本人信者、一人のポルトガル人と共に、海上二里ほどの所にゐた日本船に乗せてもらったが、その船の船頭は、翌朝博多の町が筑紫氏に占領せられたのを見て、急に態度を變へた。宣教師たちの所持品は掠奪され、その生命も危険に瀕した。しかし四日ほどの後に船頭は彼らのことを占領軍に告げ、三艘の舟に乗つて來た武装兵に彼らを引渡した。兵士たちは船頭から掠奪品を取り上げ、更にその上に彼らの衣服をも剥ぎ取つた。が一里ほどの沖合まで歸つてくると、ガ

ゴと識り合ひの有力者が来て、下着などを呉れた。博多の海岸へ上るとまた多くの兵士に取巻かれ、再び殺されさうになつた。その間に、一緒にゐた日本人の信者が、博多の町のジョアンといふ富裕な信者にこの事を知らせたので、ジョアンは占領軍の當局と連絡をとりつゝ、ガゴたちの救出に努めた。大抵のことは贈物や金で埒があいた。かくてガゴたちは、十日間ジョアンの家に隠れ、ついで他の信者の家に五十日間隠れてゐた。さうして數人の信者の奔走によつて、亂後三ヶ月、一五五九年の夏に博多を逃げ出すことが出来たのである。

豊後の信者たちはガゴの生還を見て非常に喜んだ。ガゴはこの強い愛と喜びとに接して、恰も「樂園にあるかのやうな」喜びを感じたといふ。この時にはガゴは、博多の會堂や宣教師館は焼き拂はれ、井戸までも埋めつくされたと思つてゐた。しかし會堂はたゞ壊されただけであつた。やがて博多の信者たちは自發的にこれを修繕して立派な會堂に仕上げた。信者たちが富裕なので、かういふ點は目立つて行き届いてゐた。二年後には教師の派遣を懇請して來たが、先づダルメイダが行き、ついでダミヤン、フェルナンデスなども行くやうになつた。

が一五五九年の夏には、平戸の教會も博多の教會も壊滅し、宣教師たちは全部豊後に集まつてゐたのである。この時トルレスは、布教の活動を萎縮させるどころか、逆に劃期的な飛躍を試み

ようとした。それは十年前のシャビエルの計畫に従つて日本の精神的中樞を突くことであつた。彼はピレラを起用して京都に派遣することにした。目標はさしづめ叡山であつた。元琵琶法師のロレンソが通譯として付き添ふほかに、府内の教會で養成せられた日本人青年ダミヤン、近江坂本の出身である信者デヨゴなどが同行した。インド管區長ヌネスが起草し、ロレンソ自身が日本語に譯した教義書を、彼らは携へて行つた。

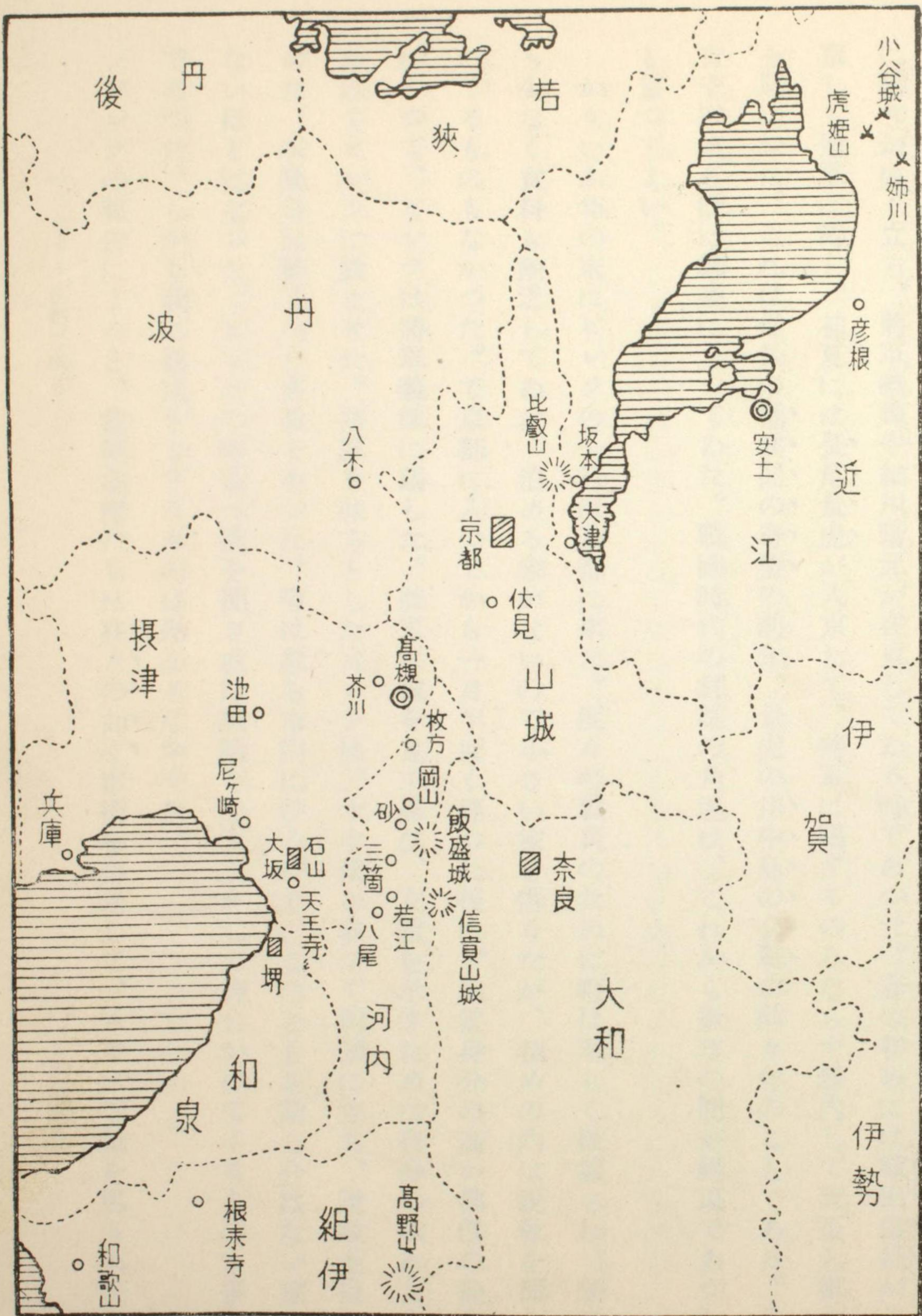
この一行が盛大なミサに送られて豊後を出發したのは、一五五九年の八月末か或は九月初めであつた。

第四章 ビレラの畿内開拓

一 ビレラ京都に来る

ビレラの一行の瀬戸内航海は、同船者からかなり苛められたやうであるが、しかし四十餘日を費して無事に一五五九年の十月十八日に堺についた。「堺の町は甚だ廣大であつて、大きい商人が多數にある。この町はヴェニス市のやうに執政官によつて治められてゐる」とビレラは報告してゐる。が彼らは數日間こゝで疲れを休めただけで、眞直に叡山をさして進んで行つた。先づ坂本のデヨゴの家に行き、前に豊後に連絡のあつたダイゼンボー（大泉坊か）を訪ねたが、その僧は既に死し、後継者は無力であつた。叡山の座主に會はうと努めて見たが、これも成功しなかつた。そこで彼らは叡山をあきらめて京都へ入つたのである。

その頃の京都は、既に無力となつた將軍足利義輝や細川晴元と、下からのし上つて來た三好長慶やその家臣松永久秀との間に、争奪を繰り返してゐる場所であつたが、一五五九年は兩者の間



に講和が成り立ち、將軍義輝や細川晴元が在京してゐる時であつた。春の初めには織田信長が入京して將軍に謁し、初夏には長尾景虎が入京して、將軍に謁するのみならず參内して天盃と御劍を賜はつた。これは信長の桶狭間の奇襲の前年、景虎の川中島の合戦の前々年のことである。秀吉や家康も既に舞臺に上つてゐた。戦國時代の群雄の角逐は、これから數年の間が絶頂であつたと言つてよい。

かういふ年の末にビレラの一行は京都に來た。度々の戦災のために町は著しく破壊され、薪炭も少なく食料も缺乏してゐた。泊める家がないので小さい家を借りたが、初めの内は説教を聞きにくるものもなかつた。で京都に入つてから一月半近く経つた後に、相當身分の高い佛僧の仲介によつて、ビレラは將軍義輝に謁した。將軍は彼を見て喜び、友誼を示すために自分の飲んだ盃を以てビレラに飲ませた。將軍を味方としたビレラは、十字架を取つて街頭に立ち、説教をはじめた。來集者は驚くべく多數であつた。噂は忽ち市内にひろがり、このことを話し合はない家はないほどになつた。ビレラの借家へ教を聞き或は議論をしようとして押しかけてくるものも多數であつた。しかし教に従はうとするものは殆んどなかつた。

ビレラの報告によると、當時佛僧たちは狂人の如く市街を奔走して、キリスト教を罵り人民を

煽動したといふ。それがどの程度に眞實であるかは解らぬが、とにかく京都の町の民衆が、この異様な新來者の教を容易に受けつけなかつたことは事實であらう。ビレラの住んでゐた町の住民は、煽動されたか否かはとにかくとして、ビレラがそこに住むことを好まなかつた。人々は家主に對してビレラを追ひ出すやうに迫り、家主もビレラに即刻立ち退きを乞うた。しかしビレラたちは行く先がなく、ぐづ／＼してゐた。すると家主は拔身の劍を携へて迫つて來た。人を殺せばおのれも死ななくてはならないといふ日本の習慣の下においては、この家主はおのれの死の危険を冒してまでもビレラの立退きを欲したのである。ビレラは白刃の下において少しく恐怖を感じた、と言つてゐる。

かくてビレラは一五六〇年一月二十五日、太陰曆正月の二日前に、「壁なくまた何ら寒氣を防ぐべきものもない」家に移つた。時は極寒で雪が多く、このあばら家での生活はかなり苦しかつたが、しかし信者となるものは追々ふえて來た。彼らはキリスト教を嫌つてゐる兩親や友人や隣人などに隠れてやつて來た。附近の村々や山の中からも來るものが多かつた。この間にも迫害は續き、多數の子供が石や土を投げつけるとか、嘲罵の言葉を言ひはやすとか、といふことは絶えなかつた。家主は酒屋であつたが、ビレラたちのために町の人々からポイコットを食ひ、止むなく

再三ビレラの立退きを要求したが、ビレラたちは懇請して猶豫を乞ひ、やつと三ヶ月間そこに留まることが出來たのである。

この苦しい三ヶ月の間に信者となつたものはほゞ百人であつた。その中にはケンシウといふ禪宗の師家などもあつた。この人は初めは傲慢な態度で、自分は悟りを開いてゐる、救ひを求めに來たのではない、たゞ暇つぶしに珍らしいことを聞きに來た、と言つてゐたが、改宗して非常によい信者になつた。この人によつて信者となつたものも少くない。なほほかに改宗した佛僧は十人ほどあつた。公家の家來で信者となるものもあつた。しかし改宗しないまでもキリスト教の眞理であることを承認した佛僧もかなり多かつた。眞言宗の人は、キリスト教の神も結局大日如來と同じだといふ。禪宗の人は本分と同じだといふ。淨土宗の人は阿彌陀と同じだといふ。神道の人はコキヤウ（古教か）と同じだといふ。皆もう一步の所まで來てゐるのである。かういふ傳道の仕事には元琵琶法師ロレンソの力が相當強く働いてゐるやうに見える（一五六〇年六月二日、京都發ロレンソ書簡）。

丁度その頃、一五六〇年の二月の末（永祿三年正月廿七日）に、正親町天皇即位の大典が行はれた。攝津芥川城にゐた三好長慶はその月の半ばに淀の城に移り、翌日軍隊をひきゐて京都に入つた。即位式の日には管領代として御門警固の役をつとめた。これは實權を握つてゐるといふことの表示であ

らう。家臣の松永久秀は京都の市政を掌握してゐた。多分この大典のあとのことであらうと思はれるが、ビレラは三好長慶の庇護を求めたために、その家臣に伴はれて長慶を訪ねた。それを見たものは、三好殿がビレラを捕縛させたと噂したが、そのあとで松永久秀からビレラたちに害を加へてはならないといふ布告が出た。異人追放の聲が高かつたにかゝはらず、ビレラたちに害を加へるものがなかつたのは、右の庇護があつたからである。

織田信長の桶狭間の戦の行はれた一五六〇年の夏、ビレラは再び將軍を訪ねて京都居住の許可を請うた。許可は口上のみならず書面を以て與へられた。さうして、宣教師に對し危害や妨害を加へる者は死刑に處する、といふことが公布された。その後は迫害も止み、信者の數が追々にふえて、會堂が必要となつて來た。そこで一軒の大きい家を買ひ、京都で最初の會堂を作つたのである。

この會堂には信者のみならず一般の日本人も説教を聞きに來た。改宗する勇氣がなくてもキリスト教を善しと認める日本人は少くなかつた。京都における最初のクリスマスも、信者たちの歡喜の下に行はれた。かういふ状態で一年ほど布教を續けてゐた間に、ビレラは京都における祭禮や佛教諸宗の狀況を靜かに觀察してヤソ會の同僚たちに報告してゐる。祭禮では祇園祭・盂蘭盆

會・端午の節句、佛教では時宗・眞言宗・一向宗・日蓮宗など。その狀況は明治時代以後に残存してゐたものほとんど同じである。さういふ雑多な信仰や習俗、千年の間に堆積し並在してゐた多種多様なものが、今や一律に「異教的なもの」として敵視せられる。そこで一年の後には再び激しい迫害が盛り返して來た。京都を支配する松永久秀やその家臣らは、佛僧その他キリスト教を排斥する人々に買収され、將軍の知らない間に、宣教師たちの追放を決定したのである。しかるにそれを知つた一人の大名が、將軍と謀つて、追放の實行に先立ち、一夜使を寄越して、宣教師たちは京都を立ち退き自分の城に入つて佛僧たちの怒の鎮まるのを待つがよい、と言つてくれた。その夜は信者たちが宣教師のもとに集まつてゐたが、相談の結果この提案に従ふこととし、多數の信者たちが同伴して同夜直ちに宣教師たちを四里離れた城に送り込んだ。ビレラたちはそこに三四日の間潜伏した。しかしビレラはそのまゝそこに留まることを不可とし、京都に引き返して、信者たちと密かに協議の上、京都に留まるか去るかを決定するために四ヶ月の猶豫を請ひ、許された。そこでビレラたちは公然會堂に歸つた。それと共に迫害の形勢は緩和された。

丁度その頃に豊後のトルレスからビレラに對して堺の町に行くやうにとの指令が來た。堺の町からトルレスに對して教師の派遣を求めた結果である。ビレラはこの指令に従ひ、一五六一年の

八月に、ロレンソたちを連れて堺に移つた。初めビレラは、クリスマスには京都へ歸つて信者と共に祝ふつもりであつたが、僅か一ヶ月後の九月に六角氏と三好氏との戦争が再燃し、京都はまた戦亂の巷となつてしまつたので、時々ロレンソを派遣することはしたが、自分はそのまゝ、一年間堺の町に留まつてしまつた。

二 堺における一年間

堺は非常に富裕な町で、「ヴェニス」のやうな政治を行つてゐた。西は海、他の三方は深い堀で圍み、外との通路には門を設けて嚴重に監視してゐた。防衛力も十分であつて、どの大名にも對抗することが出来た。従つて當時の日本においては堺ほど安全な所はなく、他の國々が戦亂に悩んでゐる時にも、この町は平和であつた。敵對してゐる武士たちも、この町に入つてくれば、敵對をやめて仲よく禮儀正しく付き合はなくてはならない。もし紛擾を起して町の秩序を破ると、當局は直ちに町の周圍の門を閉ぢて犯人を檢舉し、嚴重に處罰する。だから彼らはこの町の中では紛擾を起さないのである。しかし町の中で穩かに付き合つてゐる敵同士は、町の外に半町も出たところで出會へば、直ぐに劍を抜いて立ち合ふのである。

堺の町での布教は、ビレラが期待したほどうまくは行かなかつた。キリスト教信者は賤しい貧民に多いといふ先入見がこの町にひろまつてゐて、富裕な市民たちはその體面のために容易に改宗しないのである。最初説教をきいてキリスト教の眞理を認めた數人の學者もさうであつた。しかしそれでも半年の間に洗禮を受けたものは四十人位あつた。貿易のために堺の町に集まつてくる異郷人のうちで洗禮を受けたものはそれよりも多かつた。ビレラはさういふ信者たちと共に一五六一年のクリスマスを祝つたが、祭具がないためにミサは行はなかつた。その祭具が豊後から着いたのは翌一五六二年の四旬節の始まる頃であつた。ビレラはミサの祕義を説き、聖餐のことを話して信者を感動させた。信者たちの多くは金曜日毎に鞭打を行ひ、告解をする。資格のあるものは非常に熱心に、涙を流して聖餐を受けた。やがて復活祭になると、出来るだけ盛大にこれを祝ひ、京都からも數人の信者が參加した。

かうして堺にも教會が出来た。それは他の地方においてのやうに急激に盛んにはならなかつたが、しかしまた浮沈の激しい運命にも逢はず、畿内における安全な根據地となつた。京都が危なくなると、宣教師たちは堺に退き、こゝから畿内の諸地方に働らきかける。さういふ點から見れば堺の教會の意義は決して輕くないのである。

ビレラは堺にゐる間に、根來の僧兵や高野山の勢力を認識した。根來の僧兵は河内高屋城に據つてゐた高山高政と共に近江の六角氏に呼應して三好長慶と戦つたのである。阿波から來た三好の援軍は堺に上陸して南方の敵に對抗したが、大小の戦争において常に勝利を得たのは僧兵であつた。一五六二年の四月には、遂に僧兵たちが三好の援軍の將である長慶の叔父を打ち取り、援軍を崩壊せしめた。長慶は河内飯盛城で包圍せられた。それを救つたのは山城の方から來た三好の軍勢、特に松永久秀なのである。結局戦争は六月の末に三好、松永の側の勝利に歸したが、しかしその間に根來の僧兵の示した實力はビレラの關心を刺戟したらしい。彼はその後にある高野山や弘法大師のことに注意を向けた。こゝにも悪魔の權化が見出された。

日本の強力な宗派が戦争に従事してゐるのに對して、ビレラの指導する微力な教會は、その戦災に苦しむものの救助に努力した。京都の會堂は幸にして掠奪や火災を脱れたが、そこに集まる信者らは、毎月三人の當番を選出して寄附金の募集や貧民の救助を續けたのである。ビレラの代りに京都へ出張したロレンソは、すでに山口でかういふ経験を積んで來た人であるから、實地の指導は恐らく彼によつたのであらう。身分の高い富んだ婦人で、その財産をこの仕事のために投げ出した人もあつた。これは京都中の評判になつた。

三 結城山城守の招請

その京都へビレラは一五六二年の九月にひき返したのである。

聖母マリアに捧げられた京都の會堂で、九月八日の聖母誕生の祭日に、彼は京都で最初のミサを行つた。これはビレラが三年來望んでゐたところであつた。そのために彼は信者たちにミサの意義を説明してその熱心を湧き立たせた。ついで彼はクリスマス準備にとりかゝつた。告解や斷食が熱心に行はれた。クリスマスには告解を行つた人々が非常な歡喜を以て參加した。聖餐を受ける資格のある數人の信者は、聖餐の祕義を説き聞かされて、感動のあまり涙を流しながらこれを受けた。ミサも盛大に行はれ、信者たちを恍惚たらしめた。さういふ信者たちの態度には實際に素朴な誠實さがあつた。ビレラはこゝでも、新鮮な信仰に充たされてゐた教會の初期を、人が皆愛と信仰とにおいて一つになつてゐたあの幸福な時代を、想ひ起したのである。

クリスマス後、一五六三年になつてからは、ビレラは福音書のことを説教して、信者たちの信仰を進めて行つた。それはイエス・キリストの生涯を説いて復活祭の準備をすることでもあつた。かうして信者たちの信仰はますます固められて行つたが、新らしい改宗者はあまりなかつた。

外から説教を聞きにくるものも初めのやうに多くなかつた。京都で最初の四旬節が営まれる頃には、それが全然なくなつた。ビレラは近郊の村々を説教して廻り、漸く數人の改宗者を得たといふ程度であつた。しかし信者たちは熱心に聖餐を受けることを望み、復活祭の週の木曜日即ち主の晩餐の日には三十餘人の信者が聖餐を受けた。復活祭の當日には九人の受洗者があつた。その中には一人の高僧も混つてゐた。

京都の教會はかうして地味に育つて行つたが、復活祭のあとでまた戦争が起り、僧兵の動きが激しくなつたので、ビレラは信者たちと協議の上、また堺の町に移つた。丁度そこへ奈良から結城山城守の招請が來たのである。ビレラはこの「キリスト教の敵」の招請に幾分の疑を抱いたが、しかし死を賭してもそこに行かうと決心した。それは一五六三年の四月の末であつた。こゝに畿内傳道の一つの大きい轉機がある。

結城山城守は清原外記と共に當時の京都で著名な人物であつたが、それは武力を握つたものとしてでなく、不思議に深い智慧を持つたものとしてであつた。彼は佛教の諸宗に通じてゐたのみならず、文藝・武略・占星などのことにも明るく、將軍、三好長慶、松永久秀などの「頭腦」と

して活躍してゐた。従つてビレラの教會の取扱ひなども主として彼の判断によつて定まつたのである。丁度この頃には叡山の衆徒が京都の治安を司る松永久秀に對して三ヶ條の要求を提出してゐたが、その内の二ヶ條はキリスト教宣教師の追放に關するものであつた。インドから來た神父は日本の神佛を攻撃する。それによつて民衆が信仰を失ひ秩序の破壊に向ふ怖れがある。また彼らの滞在した地は、山口でも博多でも、戦争によつて破壊された。京都を同じ運命から救ふためには、この神父を追放しなくてはならぬ。これがその要求の趣旨であつた。松永久秀はこれに對して、神父は外國人であり、將軍、三好、松永などの庇護を求めたものである、十分調査した上でなくては追放するわけには行かない、と答へた。さうしてその調査を結城山城守と清原外記とに委任した。京都の教會の信者たちはこの調査が彼らに不利であるべきことを覺悟してゐたのである。従つて堺に移つたビレラも、結城山城守をキリスト教の敵と見てゐたのであつた。

しかるに事情は逆であつた。京都の信者の一人デヨゴといふ人が、訴訟の用務で、當時松永久秀に従ひ奈良に來てゐた結城山城守に會つたとき、山城守はいろ／＼とキリスト教のことを聞き、それに同情の態度を示した。さうして更に詳しく神父からその教を聞きたいと言ひ出した。自分はキリスト教の弘布を支持する。事によれば自分も信者になるかも知れない。清原外記も同意見

である。さういふ意味のことをも彼は言つた。事の意外なのに驚喜したデヨゴは、他の一人の信者と共に使者の役をひき受け、山城守の招請状を携へて堺へ來たのである。

堺の信者たちにとつてもこの招請は意外であつた。彼らはデヨゴよりも用心深く、謀殺のたくらみではないかとさへも疑つた。だから彼らはビレラの奈良行を止めた。ビレラはロレンソを偵察に送ることにした。ロレンソは死の危険などを問題とせず喜んで出掛けて行つた。こゝにこの元琵琶法師の目ざましい活躍がはじまるのである。堺の信者たちが彼の生命の安否を氣づかつてゐた間に、彼は當時の最高の知能といはれてゐた山城守と外記とを説き伏せ、遂に回心せしめるに至つた。二人に導かれて松永久秀にも會ひ、説教を試みた。山城守の招請は嘘ではなかつたのである。今はビレラが奈良に來て彼らに洗禮を授けなくてはならぬ。神父が松永久秀と近づきになり、その保護を得る望みもある。そのためにビレラを奈良へ招く再度の書簡を携へて、ロレンソは堺へ歸つて來た。

ビレラはロレンソと共に奈良へ行つて、彼を招いた結城山城守や清原外記に洗禮を授けたが、その際山城守の子左衛門尉、澤の城主高山圖書（右近の父）など數人の武士にも洗禮を授けた。さうして堺へ引返さず京都へ歸り、そこで聖靈降臨節を迎へた。

四 河内飯盛地方の開拓

この事件は畿内における急激な教勢擴張の皮切りであつて、この後矢つぎ早にいろ／＼な事件が起つたせるか、當時の最も近い報告書にも記憶の曖昧さを示すものがある。第一ビレラの奈良へ行つた時期が精確に記されてゐない。一五六三年四月二十七日附堺發のビレラの書簡の末尾には、すでに奈良からの招請と死の危険を冒してそこへ行かうとする決意とが記されてゐるから、この招請がほゞその頃であることは疑ひがない。しかしその後幾日にして奈良に向つたのであらうか。この事件を比較的詳しく書いたフェルナデスの書簡（一五六四年十月九日平戸發）によると、初めに派遣されたロレンソは、四日以内に歸らなければ殺されたものと思つて貰ひたいと言つて出掛けたが、四日過ぎても歸らなかつた。人々が心配して一人の信者を偵察に出すと、途中で、ビレラを奈良へ迎へるための馬と人とを伴つたロレンソに出逢つた。ビレラはその人々と共に京都に歸つて、山城守、外記、及び三好長慶の親戚で教學に通じたシカイといふ武士に洗禮を授けた、といふことになつてゐる。これは奈良をさへ眼中に置いてゐないのである。フロイスの日本史では、ロレンソが堺に歸つてから四十日を経て迎への人馬が來たといふ。復活祭後一週間を経て京都を去り、

聖靈降臨節には京都にゐたとすると、ビレラが京都を留守にしたのは全部で四十日位である。フロイスの記述の通りでは復活祭後五十日の降臨節に京都にゐることは出来ないであらう。

がビレラ自身の書簡から考へると、この奈良行は一五六三年の五月中のことと言つてよい。それから三好長慶が歿するまでは一年と二ヶ月ほどであるが、その間に長慶の根據地、河内の飯盛城を中心とした地方が急激に開拓されたのである。當時の日本には既に信長、秀吉、家康たちも舞臺に登場して居り、西方では毛利元就が尼子氏に止めを刺しかけてゐたが、しかしそれらはまだ地方的現象で、中央の畿内を掌握する力は、今の大阪の東方、四條畷に近い飯盛城にあつた。従つてビレラは、いはば當時の日本の中樞に跳りかゝつたのであつた。

その過程がどうであつたかも知精確にいふことは出来ない。ビレラに伴つて奈良に行つたロレンソが、その足で飯盛の地に赴き、三箇の伯耆殿、池田丹後殿、三木半太夫など七十三人の武士を教化したのであつたか、或は前記のシカイ殿が飯盛城に歸つてキリスト教を宣傳し、同僚や友人の間に歸教の氣運を醸した上でビレラ或はロレンソを招いたのであつたか、はつきりしたことは解らない。がビレラ自身の報告するところによると、暑熱の頃になつて彼はロレンソを飯盛城に派遣した。そこでは多數の身分ある武士が洗禮を受け、會堂を建設した。ビレラもそこへ行つた。

その後もしばしば訪れた(一五六四年七月十七日都發)。この暑熱の頃は一五六三年の夏を指すと見るほかはない。

しかるにその同じビレラは同じ頃に書いた他の書簡(一五六四年七月十五日都發)で、一五六四年に京都の異教徒

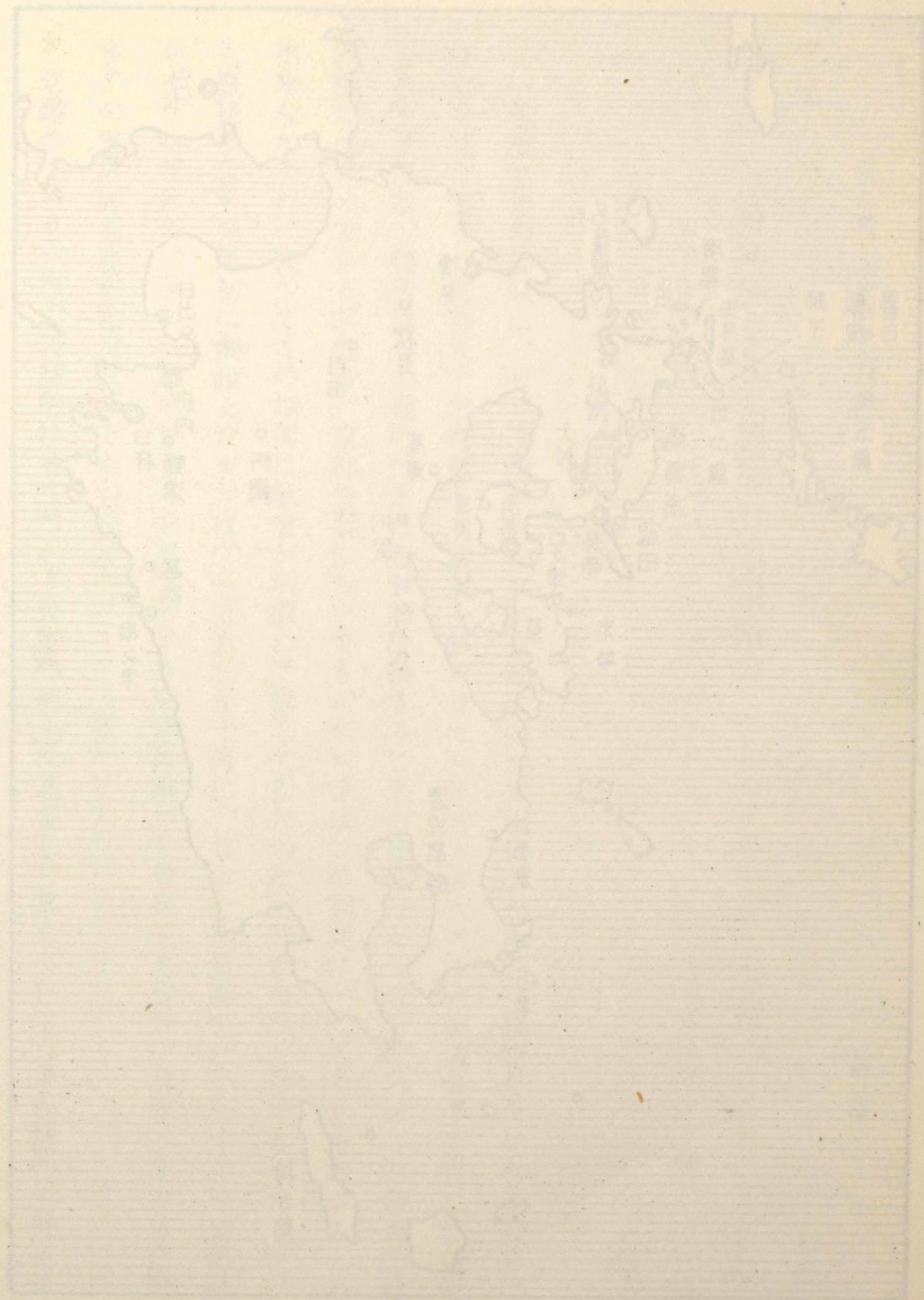
たちのキリスト教に對する關心が薄らいだので、一人のイルマンを飯盛に派遣したと語つてゐる。このイルマンはロレンソに相違ないが、ロレンソは第一回の時に七十餘人、第二回の時にもまた同數の武士を信者たらしめた。ビレラはこの形勢を見て飯盛の地に赴き、多數の人に洗禮を受け、相當な會堂をそこに建設した。これを書いてゐるのは一五六四年の七月で、また新らしく飯盛附近の岡山から招かれ、そこへ行つて會堂の如きものを設けようと心づもりしてゐた時である。従つて前の暑熱の頃がこの年の夏でないことは明かだといはねばならぬ。して見るとビレラは、ロレンソの第一回の飯盛布教をも一五六四年のこととして記述するほどに、記憶が曖昧なのである。しかしこれはこの一年間に起つたことがあまりに多かつたといふことの證據であらう。飯盛附近の砂や三箇はこの間に信者の大きい群を持つやうになつた。砂は結城山城守の子の左衛門尉がゐたところ、三箇は伯耆守の居城で、當時は河に圍まれた中島であつた。右にあげた岡山は結城山城守の甥の彌平次がゐたところで、こゝもやがて信者の村になつた。これらの場所は、京都と堺との間の有力な根據地として、この後大きい役目をつとめるやうになる。

この新らしい形勢を作り出したおもな役者は、片眼の僅かに見えるびつこのロレンソであつた。がロレンソが如何にその琵琶法師としての話術を巧みに使つたとしても、かうして急激に武士たちの間に改宗の機運が起つたことには、何か別のわけがあつたであらう。三好長慶の部下のこの武士たちは、前年根來の僧兵と戦つて手を焼いたのである。キリスト教の正面の敵である佛僧たちが、今や彼らにとつても敵となつた。この形勢の持つ意義は決して軽くはないであらう。しかし、それだからと言つて、武士たちが悉くさういふ氣分を持つたといふのではない。フェルナンデスの報告によると、飯盛城の佛僧や佛教徒たちは、ロレンソの大きい收穫を見て、或は議論により、或は侮辱や迫害によつて、改宗者たちを引き戻さうと努力した。その點はこれまでの京都の情勢と同じなのである。たゞ新らしい機運が在來と異なつてゐるのは、改宗したのが武士たちだといふことであつた。彼らは一日、迫害者たちに對して武器を取つて立ち上つた。さうなると信仰が新鮮である者の側に出るのである。この形勢を聞いた結城山城守は、ビレラに勧めて、城の彼方一日程のところに居住してゐた三好長慶を訪ね、キリスト教の眞理を説かした。長慶はビレラを厚遇し、キリスト教にも同情を示した。さうして會堂や信者の保護を約した。それによつて飯盛の信者たちは安全になつた。ビレラはそこへ行つて新らしく十三人の武士に洗禮を授

けた。これは多分飯盛布教の初期のことであらうと思はれるが、それによつて見ると、霸權を握つてゐた三好長慶自身が、新らしい機運のなかに立つてゐたと言へるのである。彼の「頭腦」の役をつとめてゐた結城山城守や清原外記の眞先の改宗は、三好長慶の態度と無關係ではないであらう。

山城守や外記は、改宗後、イエス・キリストの光榮のために大著述をやつた。日本の各宗派の起原・根柢・基礎、及び内容を説明してその虚偽を明かにし、終りにキリスト教を説いて、これこそ眞實の救ひの教であることを示したものであつた。これは武士たちの間に相當に影響があつたといはれる。一五六四年の夏には、京都の附近十六里以内のところ、五ヶ所の城内に會堂が建設されてゐた。或は、京都の周圍十二乃至十四里の間に會堂七ヶ所を建ててゐた。

この結果は九州のトルレスを動かして、一五六四年の初秋に、神父ルイス・フロイスや、イルマンのルイス・ダルメイダの京都派遣を、決意せしめるに至つた。ところで、この新來のフロイスも、豊後で病院をはじめたダルメイダも、同じ期間に九州で新らしい形勢を作り出してゐたのである。



量しつゝ、日々のミサや日曜日、の告解などに精勵してゐた。日曜日の午後を告解の時間に宛てたのは、信者たちの勞働を妨げず、また日曜日を守る習慣を養ふためであつた。かういふ努力の間にも彼の日本人に對する信頼はますます高まつて行つた。自分はこれまで信者の國や不信者の國を多く見て來たが、しかしかほどまで道理に従順な國民、かほどまで強く信心や苦行を好む國民を見たことはない。日本には大いなるキリスト教會の起りさうな徴候がある。ただ足りないのは宣教師の數である。かう彼はインド管區長に訴へてゐる。

豊後の教會の狀況も前とは少しづつ變つて來た。まづ第一は、一五六〇年のクリスマスに、トルレスが信者たちに勸めて演劇をやらせたことである。信者たちの選んだ劇は、「アダムの墮罪と、贖罪の希望」「ソロモンの裁判」「天使羊飼に救主の誕生を告ぐ」「最後の審判」などであつた。これらの劇は非常に巧妙に演ぜられ、看衆が喜んだといふ。翌一五六一年の復活祭の時にも、いろ／＼な儀式が盛大に行はれたほかに、復活の日の朝マリヤ・マグダレナが墓所において天使に逢ひ、主の復活を使徒ペテロに報告する場面が演ぜられた。さういふ演劇を演ずる側にも、またそれを見て感激する看衆の側にも、舊約や新約の物語が相當詳しく浸み込んでゐたことは、推測するに難くないであらう。

第二は豊後の教會における兒童教育の仕事である。兒童の教育に主として當つてゐたのは、ピレラと共に渡來したイルマンのギリエルメであつた。彼はラテン語で主の祈り、アベ・マリア、使徒信經、サルヴェ・レギーナ（處女マリアへの祈禱歌）などを教へ、日本語で神の十誡、教會の制令、重大な罪、これに對する徳、慈善の事業などを教へた。集まる兒童は四五人で、ミサを聞いた後、その日の當番の子が右のいづれかを唱へると、他の一同がそれに應唱する。正午には一同會堂に集まつて、毎日右の内の三分の一を唱へ、その内の一條の説明をきく。それが終つて、丁度トルレスの手があいてゐる時には、二人づつ側へ行つて手に接吻する。そのあとで燒米か何かを少しづつ貰つて歸つて行くのである。夕方にもアベ・マリアの時刻に三十四五人集まつて來て、十字架の前に跪いて、一時間位かゝつて教はつたものを皆歌ふ。日本人は記憶がよく、スペイン人よりも理解力がすぐれてゐる、とフェルナンデスが報告してゐる（一五六一年十月八日豊後發）。これらのことのほかに、日本の文字についての教育は、京都から歸つて來た青年ダミヤンが當つた。兒童らは十ヶ月の間に、寺小屋で二三年かゝつて教へるよりも多くを覺えた。

第三はキリスト教信者の葬式が制度的に確立されて來たことである。その係りはイルマンのシルヴァであつた。信者の間にミセリコルデア（慈善の組）をつくり、貧しい信者の葬式の場合には、この組から助けを出す。信者たちはこの慈善の組の仕事を非常に喜び、死者の家が町から一里も一里半もある場合にさへ、男女ともに熱心に會葬する。かうして貧しい者をも富める者と同じやうに立派に葬ることが、日本人には強い印象を與へた。

第四は慈善病院の仕事がすっかり整ひ、日々の外來患者のほか、百人以上の入院患者を收容し得るやうになつたこと、従つて病院の建設者ダルメイダが傳道の仕事に専心し得るやうになつたことである。ダルメイダは日本で發心してヤソ會に入つた人であるが、その積極的な仕事の才能を認めたトルレスは、博多や平戸の教會再建の仕事にダルメイダを抜擢するに至つたのである。

二 平戸附近諸島の開拓

平戸の教會の再建のことは絶えずトルレスの心の中にあつたのであるが、いよいよ誰かを派遣しようと思へてゐた矢先、一五六一年の五月下旬に、博多から信者である三人の富める商人が訪ねて來た。その中の一人は妻子その他家族をつれて來てトルレスに洗禮を乞うた。彼らの主な用事は宣教師の派遣を求めることであつた。そこでトルレスは、平戸訪問を兼ねて博多へダルメイダを派遣することに決したのである。

ダルメイダは六月初に日本人青年ベルシヨールをつれて府内を出發した。博多では信者の熱心な歓迎を受け、十八日の間に七十人ほどの信者を作つた。その中には山口の領主の説教師であつた老僧も加はつてゐた。ダルメイダに病氣の治療を受けた者も少くなかつたが、奇蹟的に癒つた重病人が二人あつた。博多の信者のうち重立つた者二人は、ダルメイダの旅行に同伴すると云つて、止めてもきかなかつたので、一緒に博多を立つて度島たくしまに向つた。

度島は籠手田氏の領であつて、約三百五十人の信者があつた。ダルメイダはこゝで八人の人に洗禮を授けたが、それによつて全島に信者でないものは一人もなくなつた。信者たちは會堂に行くことを非常に楽しみにしてゐる。會堂は美しい建物で、綺麗に掃除してある。そこには曾て佛僧であつた好き信者がゐて、神父の代りにキリスト教の教義を島の信者たちに教へ込んでゐる。従つて信者の大多數は、十分教義に通じてゐる。會堂には、もと佛寺であつた時と同じ収入があり、また貧民救助の同情金も集まるので、會堂の經營、貧民への施與、順拜者の接待などには缺くるところがない。ダルメイダは同伴者四五人と共に約半月の間そこに留まつたが、王者をも饗し得るやうな食物を供せられた。その間に、平戸から數人のポルトガル人がこの島を見に來た。彼らは信者たちの敬虔な態度やダルメイダに對する服従と愛、その他いろ／＼なことを見て非常

に感心し、この島の信者は自分たちよりも遙かにすぐれた信者である、もしヤソ會の神父たちがこれらのことの五分の一をでも知つたならば、皆こゝに來ることを望むであらうと云つた。ダルメイダもこれに同感したが、特に彼を動かしたのはこの島の兒童であつた。約百人の兒童が教へを受けるために會堂に集まつてくる。會堂に入つて聖水を取り、跪いて祈る様子は、まるで宣教師のやうであるが、唯一回教へただけでさうなつたのである。中でも二人の兒童は、教義を高唱する度毎に、初めから終りまで身じろぎもせず、全く入神恍惚の境に浸つてゐるやうであつた。のみならず彼らは教義と共にその解説をも共に覚え込んでゐる。兒童たちさへさうであるから、その親たち、多くの男女の信仰の厚いことはいふまでもない。ダルメイダはこの信者たちに非常に同情し、神の前で涙を流して、もつと多くの宣教師の來ることを祈つた。さうして毎日二回づつ説教し、二回づつ教義を授けた。

その内に度島西方四里ほどの生月島いきつきから迎ひの船が來た。ダルメイダの一行が島につくと、大勢の人々が岸に待ち受けてゐた。生月島の人口は二千五百ほどであつたが、その内の八百人が信者であつた。美しい樹木に取り巻かれた會堂は非常に大きく立派で、六百人以上を容れることができた。こゝでダルメイダは、人々の晝間の仕事の邪魔をしないやうに、早朝と夜との二回説教

をし、子供たちには午餐後に教へることにした。説教には多教の人が集まり、婦人だけで會堂が殆んど一杯になつたので、男子は庭に蓆をしいて坐つた。到着の翌日ダルメイダは島内數ヶ所の小堂を見て廻つたが、いづれも元は佛寺で、景勝の地を占めてゐた。それらには度島の場合と同じく元の住僧がキリスト教徒となつて住んでゐた。ところでこの島には、信者の多い土地で會堂から遠く子供らが教義を學びにくることの出来ないところがあつた。ダルメイダはそこに會堂を建てることを計畫したが、人々は非常に喜んで工事に加はり、數日の間に作り上げた。丁度平戸には五隻のポルトガル船が來てゐたので、そこから額に入つた畫像とか帷帳とかその他教會用品を取り寄せた。ダルメイダはこゝで數日間説教し、教義を教へた。

生月島の次にダルメイダは平戸島西側の獅子、飯良、春日などの諸村を訪れた。獅子村では新築の會堂に祭壇を造つた。この工事のために生月から大工七人をつれ、他の信者たちと共に大きい船に乗つて行つたが、村では王を迎へるやうに道路を掃除して迎へた。こゝでも日中は勞働し夜と朝説教をするといふ仕方だ、ミサを行ひ得るやうな祭壇を造り上げ、この會堂を管理してゐる元佛僧に信者や兒童を導く方法を教へた。飯良村は全村こぞつて信者となつてゐたが、まだ會堂がなかつたので、信者たちにすゝめて會堂を建てさせることにした。春日村でも同様で、海陸

の眺望のよい清淨な場所を選んで直ちに會堂建築に着手した。これらの會堂の裝飾用品は皆ダルメイダが平戸から送つたのである。

これらの村々を巡回した後、ダルメイダは一度生月島に歸つた。そこへ籠手田氏から平戸の様子を知らせてくる筈であつた。籠手田氏の意見では、領主松浦隆信に謁することなく、全然秘密に平戸で用を果すがよいとのことであつた。でダルメイダは、船で平戸に着くと、先づポルトガル船の船長を訪問し、ついでひそかに籠手田氏の邸に行つて、全家の款待を受け、夜半まで神のことを語り合つた。その夜はポルトガル船へ歸つて寝たが、翌朝船長と相談して船の甲板を飾りつけ、聖像の額を掲げて臨時の會堂を設けた。これらの畫像はやがて他の地方へ持つて行かれるのであるが、その前に平戸の信者たちに見せて置かうと思つたのである。この知らせによつて、籠手田左衛門、その弟、その家臣を初めとし、多くの信者が畫像を拜みに來た。ダルメイダはまた島々の信者にも日曜日に畫像を見に來るやうにと傳へた。その日には島々その他から多數の人が船でやつて來た。船長は帆布を張り、旗を吊し、數發の祝砲を發した。ダルメイダは船に充満した信者たちに向つて説教をした。そのあとで船長は遠くから來た人々を親切に饗應した。その日の後にも、聖像が掲げてあつた間は、信者を滿載した船が諸方からやつて來て、ポルトガル船

の中は復活祭の週の金曜日のやうであつた。平戸の町ですることの出来ない活動を、ポルトガル船の上でやつたのである。

しかしダルメイダは平戸の町に手をのばさないのではなかつた。着いて二日目の夜は町の信者の家に泊り、集まつて来た信者たちに祕密に説教をした。また信者の戸別訪問をやつて神のことを説き聞かせた。従つて信者たちの近親で改宗するものもあり、約二十日の間に五十人が洗禮を受けた。その間にダルメイダは會堂再建の方法として、ポルトガル船の船長から、ポルトガル人の會堂の建設を願ひ出させた。領主はそれに對して、相談して見ようと答へた。この答が拒絶に等しいことを知つてゐたダルメイダは、直ちに教會の所有地にある一信者の家に祭壇を設けることを決意した。この信者は親切に隣り合つた二軒の家を提供して、その内の美しい方を會堂として、自分は會堂の番人にならうと云つた。そこでその家を改造し、必要なものを備へつけ、そこで毎夜祈禱文を唱へ説教をやつたが、集まるのはポルトガル人が多かつたので、領主の禁を破つたとの印象は與へなかつた。かうしてダルメイダは平戸の會堂を再建し、信者たちを喜ばせたのである。

八月下旬平戸を去るに際して、ダルメイダは生月島と度島とへ別れを告げに行つた。そのため

には、土曜日午後訪ねて行つて日曜日午後歸つてくるといふ豫定を知らせてだけで、島の船は土曜日晝食の時刻にちやんと迎へに来て居り、島々では歓迎の手筈がちやんと整つてゐた。島の信者の様子を見ようとするポルトガル人たちも同行した。夕方生月島につくと、大きい炬火を持つた出迎へが出て居り、直ちに會堂へ案内した。そこには多數の信者が待ち受けてゐた。ダルメイダは暫らく説教した後、兒童たちに教義を唱へさせて見學のポルトガル人を驚かせた。翌日曜日には早朝の説教や授洗のあとで九時頃から新築の會堂を見舞ひに行き、正午にそこから船に乗つた。その時信者たちが別れを惜しむ有様は、石の心を持つてゐる者をも感動させるほどであつた。信者を牧する者の手が足りない、といふことの最も具體的な姿がそこにある。度島には二時間であつた。兒童たちは晴着をつけて濱邊に出迎へ、ダルメイダやポルトガル人たちを十字架の方へ案内しながら高らかに教義を歌ひ唱へた。十字架の前で祈りをした後、また教義の高唱につれて會堂に行くと、そこには信者が充滿してゐた。ダルメイダは説教をして、暫らく経つてから別れの挨拶をしたが、信者らは是非一晚位泊つてくれと云ひ、それを斷わるところ、でも非常に別れを惜しんだ。いよいよ船に乗る時になると島中の者が殆んど皆濱邊に出て来て、船着場までのかなり長い途を見送りながら、悲しみと涙の中に別れを述べた。この有様を見てポルトガル人たち

は非常に感動し、世界を廻つていろ／＼珍らしいことを見たが、今日見たことほど話し甲斐のあるものはない、と云つた。ダルメイダはそれに續けて、もしヤソ會の神父がこれを見たならば、このやうな良い信者と共にこの島で死にたいと祈るであらう、と書いてゐる。二年後に日本に來たルイス・フロイスが、一年間をこの島に送り、フェルナンデスが側で日本文法書を編纂するのを眺めながら、日本についての基礎的なことを學び取つたのは、決して偶然ではないのである。

博多へは風の都合が悪く、陸路を取つて非常に難澁した。そのためダルメイダは途中で病氣になり、博多へやつと辿りついた後にも癒らなかつた。博多の富める信者は馬二頭と附添ひの人や必要な物資を出して彼を豊後へ送り届けた。そこで彼は一ヶ月以上寝ついてしまつた。

三 ダルメイダの薩摩訪問

しかし一五六一年におけるダルメイダの活動はそれに終らなかつた。十月に病氣がなほると、トルレスは彼を府内附近の村々に派遣して會堂五ヶ所を建てさせた。十一月には薩摩の坊の津で冬越しをするマヌエル・デ・メンドサの一行が告解のためにやつて來て、ダルメイダの薩摩派遣をトルレスにすすめた。島津氏からもトルレスにそれを求めた。トルレスは薩摩に歸るメンドサ

たちにダルメイダを同行させることにした。日本人青年ベルシヨールも同伴したのであらう。出發は十二月であつた。

ダルメイダの鹿兒島訪問は、シャビエル以來十三年目のことである。そこには到るところシャビエルの息のかゝつたものが残つてゐた。彼がメンドサたちと共に訪ねて行つた市來の鶴丸城がさうであつた。そこには城主の夫人・子・老臣ミゲルその他シャビエルが洗禮を受けた信者が十人ほどゐて、豊後や京都における布教事業のことを熱心に聞いた。翌朝出發の前に城主の二子を初め九人の少年に洗禮を授けた。鹿兒島でもポルトガル人たちと共に領主を訪ね、トルレスの書簡を渡した後、日本人ベルシヨールと共に説教した。それから更にメンドサたちを薩摩西南端の坊の津まで見送り、船の乗組員たちの病氣の治療に努めた。さうしてその船の出帆の頃鹿兒島にひき返し、こゝに約四ヶ月滞在したのである。

ダルメイダの受けた印象では、鹿兒島は決してキリスト教にとつて不毛の地ではなかつた。なるほどこゝは佛敎の勢力が強く、説教を聞きにくるものは少い。しかしその佛僧のなかでシャビエルと親しくした人に接近している／＼話して見ると、話はよく解つた。シャビエルのときは通譯がなくて詳しいことが聞けなかつたが、今度はどんな問題でも解答を得ることができたのであ

る。彼は領主に對してもキリスト教のことを説明したが、その時領主は、殊勝な(Xuxona)ことだと云つた。領主のこの言葉と、ダルメイダの佛僧との親しい交際とは、人々を動かしてキリスト教にひきつけた。領主の側近である二人の身分の高い武士が歸依したのをきっかけとして、その夫人・家臣など、約三十六人が信者となつた。續いて他にも改宗する人が出て來た。ダルメイダはこれらの信者の助けによつて、遂に鹿兒島に會堂を建設するに至つた。

鹿兒島滞在中に市來の城へも行つた。十日ほどの間毎日二回説教し、そのほかに教義を教へた。信者でないものためには仕事のない夜を選んで説教した。城中の重立つた武士四五人が改宗した。その中の一人はキリスト教の要旨を巧みに記述した。ダルメイダはその才能と熱心とを認め、自分の持つてゐた日本語の教義書を寫させ、日曜日の集會の時にその書の一章を讀んで、それについて一時間ほど話させた。城主の長子も非常に俊敏で、短期間に教義・祈禱・信仰問答などを覚えてしまつたので、これにも同じやうに他の信者たちに教へさせた。これは宣教師のゐないところで信仰生活を持続するための準備である。かうしてダルメイダは城内に新しく七十人の信者を作つた。信者らは城内に立派な會堂を建て、聖母の肖像を祀つた。城主自身は改宗しなかつたが、キリスト教に對して極めて同情的であつた。

かういふ仕事をした後に、ダルメイダはトルレスに呼ばれて豊後に歸つた。薩摩の信者たちは心から別れを惜しみ、親切をつくした。ダルメイダが痛感したのは宣教師の手の足りないことである。この地に駐在する宣教師さへあればもつともつと信者がふえる。それが彼の確信であつた。

四 横瀬浦の建設

豊後に歸つて一月ばかり經つと、トルレスはダルメイダにダミヤンをつれて平戸や横瀬浦へ行くことを命じた。

ダミヤンは日本人の青年で、ビレラに附いて京都へ行つてゐたが、一五六一年に豊後に歸り、一五六二年に一人の老人と共に博多に派遣されて非常な働きをした。年は二十一歳であるが、非常に謙遜で、諸人に愛せられ、強い感化を周圍に及ぼしたのである。博多では二ヶ月の間に約百人の身分ある人たちが信者になつた。ダルメイダはこのダミヤンとベルシヨールと一老人信者をつれ、博多駐在を命ぜられたフェルナンデスと共に、一五六二年七月五日に豊後を出發した。

一行は博多の四里手前でダミヤンの改宗させた貴人の家に泊つた。この人はこの地方でこれまで信者となつた者のうちの最も有力な、最も身分の高い者で、博多の町でも非常に尊敬されてゐ

た。家族は皆信者となつて居り、玄關前の庭には美しい十字架が立ててあつた。こゝで一行は申分のない款待を受けたが、ダミヤンの人氣は大變なもので、博多に駐在する筈のフェルナンデスを遙かに凌駕してゐた。翌日着いた博多においても事情は同じであつた。こゝの信者は皆商人で裕福であつたから、破壊された會堂や倉庫はすでに彼らによつて再建修理されて居り、また一行を待遇することも非常に厚かつたが、しかしダミヤンが平戸に行くことを聞くと、熱心にひき止めにかゝつた。ダミヤンは新しく信者となつた人々の個性を見て、各人に向くやうに導いてくれた、皆が彼を愛してゐる、これから新しく信者を作つて行く上にも彼は是非必要である、などがその理由であつた。フェルナンデスはトルレスの命令に背くことの出来ない所以を説いて漸くそれをなだめることが出来た。

ダルメイダの一行は七月十二日博多を船で出發した。途中平戸でダミヤンとその伴の老人とをおろし、ダルメイダたちはそのまま、南方十里、大村灣口の横瀨浦に向つた。

こゝで急に横瀨浦が布教活動の舞臺になつて來るが、それにはトルレスのいろ／＼な苦心があつたらしい。平戸はトルレスが最初一年ほどゐて開拓したところである。しかるに平戸の領主は一五五八年に至つて宣教師を追放してしまつた。平戸に入港するポルトガル船と豊後の宣教師た

ちとの間の聯絡も不自由になつた。そこでトルレスは平戸に代るべき港やキリスト教を保護すべき領主などを物色して、大村領に着目した。京都で信者となつた近衛家關係のバルトロメオや、山口で信者となつたトメ内田などは、その意を受けて大村氏に働きかけたらしい。他方トルレスはポルトガルの船長たちと聯絡をとり、平戸附近に良港を探させて、大村灣を西から抱いてゐる西彼岸半島の突端、佐世保へ入る入口のところの横瀨浦に見當をつけた。一五六一年の夏、ダルメイダが平戸やその附近の信者を訪ねた頃には、トルレスのさういふ計畫は相當に進んでゐたのであらう。ダルメイダが平戸の領主の禁教政策にもかゝはらず、ポルトガル人の會堂を作るといふ形式で平戸の會堂の再建を強行したことは、この形勢と照し合せて見ると、よく理解することが出来る。果してその後平戸では、ポルトガル人に反感を起させるやうな事件が起つた。その機會にポルトガルの商船は一齊に碇をあげて平戸を去り、横瀨浦に移つた。領主の大村純忠は、豊後のトルレスのところへ、布教のために非常に有利な申込をして來た。それは一人のイルマンを横瀨浦に派遣してキリスト教を説かせること、數ヶ所に會堂を建て横瀨浦港をその周圍約二里の地の農民と共に教會に附すること、神父もしそれを欲するならばその地に非キリスト教徒を居住せしめざること、貿易のために來る商人には十年間一切の税を免することなどであつた。

この重大な申込が来たのはダルメイダの薩摩旅行の留守中であつたが、これを實現するには一五六二年度に日本へ来るポルトガル船を平戸へ入れず横瀬浦へ集中しなくてはならぬ。トルレスはダルメイダを呼び返してこの時期に間に會ふやうに、横瀬浦に派遣したのである。しかしダルメイダが平戸を通つた時には、すでにそこに一隻のポルトガル船が碇泊してゐた。

ダルメイダは横瀬浦に着いた翌日、すぐに數人のポルトガル人と共に大村灣の奥に領主大村純忠を訪ね、トルレスの名において右の申込に就ての協議をはじめようとした。純忠はダルメイダの一行を非常に款待した後、家老たちをして協議の衝に當らせた。その結果、前の申込の通りに種々の特権を與へることを承諾したが、しかし横瀬浦の所領關係は、領主と教會とが半分づつを領するのであると云つた。ダルメイダはこの點についてトルレスに回訓を求める必要があると云つて、二日滞在の後横瀬浦に歸つた。しかし回訓が来るまでも宣教師館は建てはじめて貰ふことになつたので、早速一軒の家が出来、そこに祭壇を造つて、ダルメイダは宣教師としての活動を開始した。そこへ不意に、豊後からトルレスがやつて来たのである。

トルレスはひどく老衰してゐるので、誰もこの困難な旅行が出来るとは思つてゐなかつた。そのトルレスをこゝまで引き出して来たのは、豊後に行つてゐたポルトガル人たちである。平戸の

領主はポルトガル船を平戸へひきつけようとして、この年にはキリスト教信者を苦しめず、會堂の建立を許可した。その數日後にポルトガル人のジャンクと帆船とが入港した。これでは平戸をボイコットしようとする計畫は破れる怖れがある。その時豊後にゐたポルトガル人のうちに、二年前まで船長をしてゐた一人の貴族がゐて、その帆船は自分の叔父のものである、トルレスが一緒に行つてくれるならば、それを平戸港から外へ出すことが出来ると申出た。トルレスも、他のポルトガル人や信者たちも、この考に賛成した。大友義鎮は少し躊躇したが、結局許可を與へた。かくしてトルレスは困難な旅途に上つたのである。彼が横瀬浦開港をいかに重大視してゐたかはこれによつても察することが出来る。

トルレスが近くまで来たとの意外の報に接したダルメイダは、十數人のポルトガル人と共に出迎へ、港外一里ほどの海上でその乗船に逢つた。トルレスの船が横瀬浦に入ると、ポルトガル船は旗をかゝげ祝砲を放つて歓迎した。陸上でも、早速儀式を行ひ得るやうな家の建築にとりかゝつた。ダルメイダは大村侯との交渉の結果をトルレスに報告したが、トルレスは、大村側の條件を認めて交渉の妥結を命じた。ダルメイダは直ちに大村に行き、五日間滞在して、領主からの書類を受取つて歸つて来た。領主はまた會堂建築のために材木を取る森を寄進し、多數の人を送つ

て寄越した。

トルレスが横瀬浦に來たことを知ると、平戸の信者たちは、二十人位づつ次から次へと告解のためにやつて來た。だからこの新しい港には平戸の信者の船がいつも三四隻づつ滞在してゐた。それと共に平戸に碇泊してゐた帆船とジャンク船とのポルトガル人たちも告解にやつて來たので、トルレスは容易に、また穩やかに、ポルトガル船の平戸退去を要求する事が出來たのであつた。

トルレスは豊後を出發する時にも、また横瀬浦へ來てからも、この新しい港に留まるつもりではなかつた。九月に豊後で恒例の通り領主の宣教師館訪問を受けるため代理にダルメイダを派遣したりなどしたが、しかし十月の末頃ポルトガル船が出帆してしまへば、あとは平戸諸島を巡回し、博多に寄つて豊後へ歸るつもりであつた。だから九月中にダルメイダが豊後へ往復した機會に平戸のダミヤンを博多に移し、博多のフェルナンデスを横瀬浦へ連れ歸らせて、横瀬浦の教會の基礎固めに力を集中してゐる。がトルレスの仕事は横瀬浦に限るわけには行かなかつた。神父がゐないため告解や聖餐の機會を惠まれてゐなかつた平戸の島々の信者は、今やその機會を得るために二三十人づつの群になつてあとからあとから波状的にトルレスの許に集まつてくる。横瀬浦は一時この地方の信者の中心地になつた。この熱心はやがてトルレスを引きつけた。先づフェ

ルナンデスやダルメイダを派遣して準備させて置いて、一五六二年の十二月の初めに彼は平戸に移つた。こゝでクリスマスを祝ひ、島々を廻つてから、博多へ出るつもりであつた。平戸は十三年前にトルレスが種を蒔いた土地であるから、彼にとつても特別の親しみがあつたであらう。ここでは籠手田氏やその家族が心から款待してくれたが、領主もまたポルトガル人との交際の回復を考へてトルレスを厚遇した。クリスマスは非常に盛大であつた。そこから生月島へ廻つたのは一五六三年の初めで、こゝでも愛と信仰とに浸りながら一ヶ月滞在し、度島を廻つて平戸へ引上げたが、さて博多へ向つて出發しようとする、その道は塞がつてゐた。博多地方を領してゐた大友配下の武士がまた大友氏に叛いたのである。そこでトルレスは止むを得ず二月二十日に横瀬浦へ引返した。しかしその時にも、まだ、他の路によつて豊後へ歸るつもりだつたのである。それを不可能にしたのは、先づ第一には彼が庭で足を挫き、歩けなくなつたことであつた。がそれに加へて彼をこの地に釘づけにするやうな事件が、この四旬節の間に、次から次へと起つて來たのである。

横瀬浦は、歸つて來ない筈のトルレスが歸つて來たのを見て、主の愛を以て燃えはじめた」とダルメイダは書いてゐる。一五六三年の四旬節は、こゝでの最初の（後になつて見れば唯一度

の) 四旬節であつたが、そのために豊後で人々を感動させた少年アゴスチニョや、博多にゐたダミアンもやつて来た。説教のうまいパウロはもう前の年からダルメイダを助けてこゝで働いてゐた。信者の側でも、平戸諸島はいふに及ばず、遠く博多や豊後からさへ集まつて来た。さうして熱心な説教や告解や鞭打苦行が續いてゐた。

その間に事件は外から起つて来たのである。まづ第一は、四旬節の初めに、島原の領主から宣教師の派遣を求める使者が来たことであつた。これが島原半島への布教の端緒である。前の年にトルレスはダルメイダをして有馬の領主有馬義直(義貞)を訪問せしめた。この領主は横瀬浦を領してゐる大村純忠の實家の兄で、純忠もその下に附いてゐたし、また教を聴かうとする意志のあることも聞えて来たからである。その時、有馬侯は戦陣にあつたので、ダルメイダはたゞ逢つただけであつたが、その家臣の一人で、また姻戚でもある島原の領主が、領地に歸つてから宣教師の派遣を求めるであらうと云つた。ダルメイダはそれをたゞ挨拶の言葉として聞いたのであつたが、それが本當になつて来たのである。トルレスは、直ぐには出せないが、七八日中には派遣しようと思つた。さうして四旬節の中頃に、ダルメイダと日本人ベルシヨールとを、復活祭までの豫定で島原に派遣した。領主はダルメイダを非常に厚遇し、有馬侯の夫人の姉妹であるその妻と

共に、熱心に説教を聞いた。家臣たちで洗禮を受けるものは五十人位あつた。その間に有馬義直が出陣の途中島原に寄つたので、ダルメイダが訪ねて行くと、有馬侯は、有馬から二里餘の口の津に會堂を建てるため、トルレスの許にイルマンの派遣を求めるつもりだと語つた。有馬侯の態度は島原の信者たちを一層活氣づけた。島原の領主も、ダルメイダが復活祭に間に合ふやうに歸らうとする前日、その一人娘である四五歳の少女に洗禮を授けて貰つた。「この女は今日まで日本で信者となつたものうち、最も高貴な血統の最初の人である」とダルメイダは誇らしげに報告してゐる。

有馬義直の使者は實際に復活祭前にトルレスの許に来た。前年のダルメイダの訪問を謝し、おのれの領内に横瀬浦以上の大きい會堂を建てて布教をやつて貰ひたい、自分もそれを助けようと思入れたのである。使者の一人は口の津の領主で、その港に宣教師館を建てることを頻りに勧めた。さうすれば自分や領民は直ぐに信者になる。それを見て有馬でも會堂を建てるやうになるであらう。さう彼は云つた。

第二に、島原の使者よりも少し遅れて、領主大村純忠が、筆頭家老の弟ですでに信者となつてゐるドン・ルイス新助その他多くの重臣を連れて、トルレスを訪ねて来た。酒樽六つ・鮮魚・猪

一頭・錢三千などが手土産であつた。トルレスは領主を午餐に招き、七八人の武士と共に洋食を饗應した。身分あるポルトガル人五人が鄭重に給仕の役をつとめた。午餐後トルレスは別席で純忠に教をすゝめ、聖母の像を飾つた祭壇を見せたりなどした。純忠は直ぐに説教を聞くことを望んだので、フェルナンデスがそれを始めたが、しかし深く理解するためには長い説教を聞く必要があると云はれて、翌日は晚餐後から夜半の二時まで熱心に聞いた。さうして氣持の上ではもう信者になつてゐた。翌日ドン・ルイスを使に寄越して、十字架を携へることやキリストに祈ることの許可を求めて來たほどである。

かういふ二つの出來事のあとで、横瀬浦での最初の復活祭の週が來た。各地の日本人信者のみならず船のポルトガル人たちも加はつて、これまで日本で見られなかつたほど盛大に復活祭が行はれた。ところでその復活祭の週に、大村純忠は、再びドン・ルイスなどを連れて横瀬浦を訪ねて來たのである。その目的はトルレスの同意を得て會堂附近におのれの住宅を建てることであつた。ポルトガル人と親しく交はり、またこの港を發展させるためには、なるべく多くの日をこの地で送らなくてはならないからである。この時彼はトルレスの請ひにまかせて、この新開の港の秩序と平和とのための掟七八ヶ條を立札に書いて與へた。その第一條は、この港に住まうとする

者は皆天主の教を聞かなくてはならぬ、聽くことを欲しないならばこの地を去るがよい、といふ意味の規定であつた。しかし彼には改宗の覺悟はまだ出來てゐなかつた。

五 島原半島の開拓

丁度復活祭の頃に大村では高い地位にある二人の武士の間に争が起り、領内が沸き立つた。それに對する見舞を兼ねて、復活祭後間もなくダルメイダは大村に行き、そこに數日留まつた後、三人の「イルマンの如き」日本人(ダミヤン、パウロ、ジョアン)をつれて、當時有馬義直が出陣のため部下の集合を待ち受けてゐた所へ行つた。それは島原から二三里のところであつた。有馬侯はダルメイダを厚遇し、晚餐を共にした後説教を聞いたが、翌日口の津港宛の説教聽聞を命ずる書簡や、トルレス宛の領内布教許可の書簡などを與へた。ダルメイダは島原に數日留まり、海路口の津へ行つたが、こゝは日本全國から人々の集まつてくる港で、人口も非常に多く、住民の物解りも好かつた。ダルメイダはこの地の領主の家に迎へられ、その主君たる有馬侯の書簡を渡して、早速布教活動にとりかゝつた。十五日間教へた後洗禮を授けたものは二百五十人であつた。その中にはこの地の領主、その妻、子女などもはいつてゐた。これらの様子を見てダルメイダは

この地を重視しようと考へ、島原の信者を見舞つた後またこの地に歸る豫定で、留守を日本人バウロにあづけて、再び島原に行つた。

しかるに島原では、丁度この時佛僧たちの指揮する反抗運動が起つてゐた。島原の舊城址を會堂用地として宣教師に與へたのはよろしくない、ポルトガル人が來てそこに城を造り、この國を奪ふおそれがある、といふのがその主要な主張であつた。佛僧たちは諸地方の領主と親縁があり、相當の政治的勢力があつたので、島原の領主の態度は微温的であつた。ダルメイダは他の諸地方において宣教師を求めてゐるにかゝらず、特にこの地の領主の招きに應じて來てゐるのである、佛僧の妨害で布教が出來なければこの地を去るほかはない、と抗議したが、領主は暫らく隱忍することを請うた。さうして領主の支配權内にある家臣や民衆に對しては、説教を聽くやうにとの命令を發した。それで聽衆は非常に多く集まり、受洗希望者は三百人に達した。この形勢を見た佛僧たちは、ダルメイダが着いてから十六日後に、説教の場に入して机上の十字架を破壊するといふやうな示威運動をやつた。次の日も信者たちの戸口の十字架を畫いた貼り紙をはぎ取つて廻るといふやうなことをやつた。それらに對しては信者たちは、領主の指示に従ひ、無抵抗の態度を取つた。しかし更にその次の日、即ち聖靈降臨節の前々日に至つて、遂に事が起つた。島

原から一里の他領に屬する二人の青年武士が説教を聞きに來たのであつたが、その一人が酒に酔つてゐて不穩當な質問をするので、他の一人がこれを制し連れ去らうとした。それに侮辱を感じた武士は、百人ほどの信者の集まつてゐる中で劍を抜かうとした。信者たちはこの酔どれから劍を奪つた。これがもとになつて、その武士の親戚友人が集まり島原に來て復讐しようとしたのである。目標はダルメイダが滞在し説教してゐた信者の家であつた。しかしこの争の理非曲直は明白である。島原側ではたゞに信者のみならず信者でないものも武器を取つてダルメイダのゐる家を護つた。聖靈降臨節の前夜はその襲撃を待ち受けて物々しい有様であつた。もし襲撃があれば少くとも五百人は死ぬであらう。キリシタンの到るところ必ず戦争があるといふ佛僧の宣傳は、それによつて實證されることになる。ダルメイダはそれを非常に悲しんだが、幸にして襲撃はなかつた。さうしてこの事件が逆に翌日の聖靈降臨節を盛大ならしめた。すでに受洗の準備の出來たものが、この日約二百人洗禮を受けた。

ダルメイダは次の日に領主が會堂用地として與へた舊城趾に移る許可を求めた。そこは海へ突き出た突角の上にあつて村より離れて居り、佛寺からも遠いからである。領主はこれに賛成し、右の地所のそばの信者の持家へ移轉させた。ダルメイダはそこにダミヤンを残し、再びこゝに歸

り來ることを約して口の津に向つた。かうして彼の口の津に重點を移さうとする計畫は破れ、島原と口の津とをかけ持ちするはかなくなつたのである。

口の津に歸つて見ると、日本人パウロは説教を聴きにくる者が非常に少數になつたと報告した。ダルメイダがその原因を探究して見ると、領主の家へ出入するのが窮屈であるからだと解つた。そこで彼は領主に交渉して、人々が氣樂に出入し得る家を求めた。領主はダルメイダに選擇をまかせた。ダルメイダの選んだのは、有馬侯が會堂用地として與へた地所にある大きい廢寺であつた。これを掃除し、縁を造り、蓆をしくと會堂になる。翌日早朝百人ほどの人夫が集まり、佛像を運び出して、一日中に立派な會堂に造りかへた。この會堂でダルメイダはパウロと共に再び活潑な活動をはじめ、二十日ほどの間に百七十人の信者を作つた。

六月の初めにダルメイダはまた島原に行つた。こゝでも舊城趾に會堂を造る活動がはじめられた。領主は地所附近の七十戸を住民と共に教會に寄進し、會堂建築用の材木を寄附した。また敷地の地均らしのために二十日間毎日二百人の人夫を寄越してくれた。ダルメイダは地所内の大石を運び出して會堂の門前に埠頭を造らせ、相當の船がそこへ直接に着けるやうにした。

六 大村純忠の受洗

かうしてダルメイダが島原半島で活潑に開拓をやつてゐた間に、横瀬浦でも著しい事件が起つた。

トルレスは復活祭の後四十餘日、昇天祭の過ぎた頃に、大村に領主純忠を訪ねて、その地に會堂を造るやうにすゝめた。純忠は、自分もその希望を持つてゐる、會堂を造れば領内のものは皆信者になると確信する、しかしそのためには佛寺を破壊する必要があるが、佛僧の勢力は中々侮り難いから、未だその時期ではない、と答へた。その時には受洗の話は出なかつた。しかるにその後一週間ほど経つて、純忠は、洗禮を受けようといふ決意を以て二三十人の武士と共に横瀬浦にやつて來たのである。先づ彼はおのれの心事をトルレスに打ちあけ、その意見をきくために、日本語のよく解る人を寄越してくれと云つて來た。トルレスは一人の日本人を送つたが、純忠はそれと夜半まで語つた。彼のこだはつてゐたのは佛教排撃の問題なのである。彼はその兄である有馬の領主の配下についてゐる。その兄はまだ佛教徒である。従つて彼は佛像を焼き佛寺を破壊することが出来ない。しかし彼は、佛僧と關係せず補助をも與へない、といふことを約束する。

さうすれば佛教はおのづから崩壊する筈である。その程度でも洗禮は授けて貰へるであらうか。これが彼の知りたところであつた。トルレスはそれに對して、彼が時機の熟した時その権力内の異教を破壊するといふ約束をするならば、またさういふ決意を持つならば、洗禮を授けようと答へさせた。純忠は喜んで、同夜直ちに家臣一同と共に説教を聞きはじめ、夜明に及んだ。トルレスは洗禮の準備が十分であることを認め、領主の身分にふさはしく盛大に式を挙げようとしたが、純忠は非常に謙遜な態度で、簡素に洗禮を受け、ドン・ベルトラメウとなつた。伴の家臣たちも洗禮を受けた。

これは一五六三年五月下旬、ダルメイダが口の津に會堂を造つた頃のことである。丁度同じ頃に東の方では奈良で結城山城守と清原外記とが洗禮を受け、新らしい機運を醸成してゐた。どうしてこのやうに大村や島原のみならず畿内地方までが時を同じうして動き出したのかは、よくは解らない。しかし恐らくこの頃に、日本全國を通じて、戦亂時代の心理的な峠があつたのであらう。同じ年に少しく遅れて三河の國に一向宗一揆が起り、それが徳川家康の一生の運の岐れ目となつてゐることも、決して偶然ではないであらう。

七 横瀬浦の没落

大村純忠が受洗に際して佛寺破壊の問題にこだはつたのは、決して軽い意味のことではない。一國の政治的權力を握るものの改宗には、この問題がつきまとふのである。こゝに布教事業と政治的な争ひとの絡まつて來る機縁がある。純忠はこの點に用心したやうに見えるが、しかし「妬みの神」はその不徹底を許さなかつた。

純忠が洗禮を受けたのは、その實家の有馬氏と龍造寺隆信との戦争の前夜であつた。龍造寺隆信は肥前の少貳氏の部下であつたが、今やその主家に代つて肥筑地方に勃興し、有馬氏に壓迫を加へたのである。純忠もその兄の下について出陣したのであるが、その途中で、恐らく戦争気分の結果であらう、摩利支天像やその堂を焼き拂ひ、そのあとに十字架を建ててこれを禮拜するといふやうな思ひ切つたことを敢行したのである。これを口火として領内の多くの佛寺佛像が焼かれた。この急進的な態度は、彼の心配した通り、領内に不穏な空氣をまき起した。謀叛が企てられたのはその頃からであつた。

横瀬浦では領主が受洗の時の約束以上に果敢に振舞ふのを見て非常に喜んだ。丁度そこへ、六

月の末に、シナからドン・ペドロ・ダルメイダの船が數人の神父やイルマンを運んで來た。神父ルイス・フロイスもその一人である。トルレスは歡喜の餘り涙を流し、「もう死んでもよい」と云つたといふ。フロイスが早速着手した仕事は、純忠が送つて寄越すその家臣たちに日々洗禮を授けることであつた。

丁度そこへ、七月の初めに、島原半島の大きい收穫の報を携へて、ダルメイダが新來の宣教師に會ひに來た。トルレスは早速この有能な働き手を、自分と船長ドン・ペドロ・ダルメイダとの代理として、陣中の大村純忠の所へ使にやつた。純忠は陣羽織にエズスと十字架の紋所をつけ、頸に十字架や數珠をかけて、熱心に教のことをきいた。その情景は陣中といふよりもむしろ宗教家の會合のやうであつた。そこから彼が七月半ばに歸つてくると、トルレスは新來の神父ジョアン・パウテイスタを豊後に派遣することとして、ダルメイダに同伴を命じた。一行は翌日すぐに出發し、途中からダルメイダだけは島原と口の津とを廻つて、豊後に赴いた。

七月の末になつて、大村純忠は神父たちやポルトガル人に會ふために横瀬浦を訪ねて來た。ルイス・フロイスや船長ドン・ペドロ・ダルメイダは非常にこれを款待し、鍍金の寢臺、絹の敷布團、掛布團、天鵞絨の枕、ボルネオの精巧な蓆、その他織物類を贈つた。純忠は熱心にミサを聽

き、聖餐のことを學び、數日にして大村へ歸つたが、夫人に對して改宗を迫り、また次の出陣の前に壯麗な會堂を建てようとして、場所の選定のためにトルレスを大村へ招いた。また丁度その頃に孟蘭盆會の廢棄を考へてゐた彼は、大村の先代の像（位牌か）の前に香をたく代りに、その像を燒却するといふことをやつたらしい。それらのことが謀叛の陰謀を熟せしめたのである。

大村の先代は庶子後藤貴明^{たかあき}を残してゐたが、先代の夫人はそれをさし措いて養子純忠を夫人の實家の有馬家から迎へた。その養子が、先祖の祀りをしないばかりか、先代の位牌を燒いたのであるから、大村の家臣たちにとつては、庶子を擁して養子を誅すべき十分な理由があると考へられたのである。そこで謀叛人たちは、逆手を使つて、會堂の建設、夫人の受洗、トルレスの招請などを家臣らの希望として進言した。トルレスが大村に來たときに、クーデターによつて一舉に害惡の根源を絶たうといふ計畫であつた。さういふ計畫に全然氣づかないドン・ルイス新助は、横瀬浦へトルレスを迎ひに來た。そのまゝトルレスが大村に赴き得たならば、計畫は成功したかも知れない。しかしトルレスは、側にヤソ會の神父がゐないため五年間行ふことの出來なかつた宣誓を、八月五日の聖母の祭日に、新來の神父フロイスの前で行ふ筈であつた。そのためにならずにわざと豊後から、日本でヤソ會に入つたイルマンのアイレス・サンチェズが、ヴィオーラを弾く少

年たちをつれてやつて来たほどであつた。従つて大村行はその後にするほかはなかつた。祭の當日ドン・ルイスは二度目の迎ひに来たが、生憎フロイスもトルレスも病氣で、式を辛うじて擧げた程度なので、大村行はまた二三日延ばした。この間に有馬の領主が改宗の意志を表明したとの報があり、三度目に迎ひに来たドン・ルイスも大村純忠が兄の改宗のことを相談したいと云つてゐると傳へたので、トルレスは「日本全国の門戸が開かれるであらう」といふやうな大きい希望を抱いて、いよいよ翌八日早朝出發しようと約束した。ドン・ルイスはその約束を携へて勇んで歸つて行つた。ところが翌日早朝、トルレスがミサを行ひポルトガル人に別れを告げて、さていよいよ出發しようとしてゐた七八時頃に、様子が變になつて来たのである。トルレスは一日本人を偵察に出した。ドン・ルイスは前日歸途を横瀬浦對岸の針尾の武士たちに襲撃せられ、殺害されたのであつた。大村でも前夜暴動が起り、大村純忠はドン・ルイスの兄の家老たちと共に近くの城に逃げ込んだのであつた。

この時の事情はよくは解らない。トルレスが大村行を幾度も延ばしたので、陰謀が洩れたと感して急に事を起したのか、或はドン・ルイスの船にトルレスも同船してゐると見て襲撃したのか、當時の人にもよくは解らなかつた。がいづれにしても暴動の手際は悪く、トルレスも純忠も暗殺

をまぬがれた。同日夕方、トルレスは碇泊中のゴンサロ・バスのジャンクに移り、フロイスはフェルナンデスと共にドン・ペドロの帆船に乗つた。他の人々も、信者らも、それら財物を携へてこれらの船に遁れた。純忠も約四十日の後にはともかくも領主權を回復し大村に歸つた。さうして彼に叛いた地方の領主たちと對峙し得るに至つた。

しかしトルレスが大きい望をかけてゐた横瀬浦——アジュダの聖母の港——の運命は、この内亂を以て終つた。横瀬浦は騒ぎの當座直ちに焼かれたのではない。そこは抵抗せずに謀叛人に服従したし、また謀叛人たちもポルトガル船に留まることを求めた。純忠が大村を回復したとの報に接したときには、ポルトガル船は旗をあげ大砲を發射してこれを祝したし、横瀬浦を占領してゐた謀叛人も逃げ去つてゐた。フロイスも陸上で働らいてゐた。しかし商船がシナに向つて出帆しようとしてゐた頃に、横瀬浦に最も近い所にゐた謀叛人の一味が、横瀬浦を奇襲して町や會堂や宣教師館を悉く焼き拂つたのである。丁度その時には有馬の武士（島原の信者であらう）が二艘の船を率ゐて救援に来てゐた。トルレスは敵が近づいたのを見てその船に乗り、大きい望をかけてゐた會堂や純真な信者の家が焼かれるのを見てゐたのである。これは宣教師たちにとつて非常な打撃であつた。急激に擴大しさうに見えてゐた布教事業はこゝで一時頓挫したのである。

大村の内亂が世間に與へた印象もさうであつた。ダルメイダが八月下旬に豊後で報告に接した時には、大村純忠は殺され、有馬の領主は逃げ、ポルトガル船は横瀬浦を去り、會堂も町も焼失し、信者らは皆殺しにされた、といふことであつた。さうしてそれらは純忠が佛像を焼いた結果であり、有馬の領主もキリスト教の同情者として同様の運命に瀕してゐる、と噂された。これはほとんど皆事實に合はない誇大な噂であるが、しかしそれがキリスト教に對する反感を煽るやうに見えた。急いで横瀬浦にかけつけようとしたダルメイダは、途中でこれまでにない侮辱を受けた。また人々は満足さうに、「何處へ行かれるか、會堂は焼けたし神父は横瀬浦にゐない」と挨拶した。島原の對岸の高瀬まで来て、彼はやつと、純忠の死も、横瀬浦の焼失も、商船の退去も、すべて嘘であることを知つたのである。島原でも信者たちの態度は少しも變つてゐなかつたが、しかし口の津まで來ると、政治的情勢が變つてゐた。有馬の領主の父仙岩（晴純）は、この様な内亂の原因となつたキリスト教を、斷然禁止したのであつた。信者たちの信仰は崩れてゐなかつたが、しかしダルメイダは上陸することが出来なかつた。そののみか、仙岩の領内を通る間中、あひだちゆう死の危険を感じなくてはならなかつた。緒についたばかりのダルメイダの島原半島布教も、一頓挫を來たしたやうに見えた。

こゝに政治的意義を帯びた大仕掛けなキリスト教排撃の最初の現はれがある。それは一國の領主が改宗して佛敎排撃をはじめめるや否や、即座に起つた。この現象は非常に示唆するところが多い。ポルトガル人と貿易を營みヨーロッパの文明を取り入れようとする關心は、必ずしもキリスト教への關心ではなかつた。前者は當時の日本人にはほとんど共通のものであり、従つて政争を捲き起すことなく實現し得られるが、後者は忽ち政争に火をつけるのである。この事情が平戸の領主に曖昧な態度をとらせ、豊後や有馬の領主に長い間改宗を躊躇させた。しかるに宣教師たちは、前者を後者のために利用し、前者のみの獨立な實現を阻まうとしたのである。この態度はいはば開國と改宗とを結びつけるものであつて、鎖國の情勢を呼び起す上に關係するところが多い。日本民族が國際的な交際の場面に入り込み、世界的な視圈の下におのれの民族的文化の形成に努めることと、在來の佛敎を捨ててキリスト教に轉ずることとは、別の問題である。前者は倫理的、後者は宗教的な課題であつた。ヤソ會士がたゞ宗教の問題をしか見ず、異教徒をキリスト教に化することのみその關心事としたことは、ヤソ會士としては當然であつたかも知れぬ。しかしそのために倫理的な課題が遮斷されたことは、實に大きい弊害であつたといはなくてはならない。その一半の罪は、ヤソ會士を介してでなくては視圈擴大の動きが出来なかつた日本の政治家や知

識人の方にある。無限探求の精神や公共的な企業の本質の缺如が、こゝにもうその重大な結果を現はしはじめてゐるのである。

八 口の津と平戸

横瀬浦を焼かれたトルレスはダルメイダや新來のイルマン、ジャコメ・ゴンサルベスを伴つて、有馬の武士の船で、島原の對岸高瀬に向つた。そこは豊後の大友の領地で、豊後への往復の要衝とされてゐたところである。ルイス・フロイスは籠手田氏が迎ひに寄越した船で、既に一月前からフェルナンデスの行つてゐる「天使の島」度島たくしまに向つた。かうしてこの後の一年間、トルレスは島原半島の回復をねらひ、フロイスは日本布教者としての能力の獲得に努めたのである。

トルレスは一五六四年の夏まで高瀬に留まつてゐた。先づ初めにダルメイダを豊後に派遣して大友義鎮（この頃に宗麟と名を變へたらしい）に高瀬滞在の許可を乞ひ、地所、家屋、布教の許可などを與へられた。更に三ヶ月後には、領内のあらゆる人への改宗の許可、宣教師の保護、全領内の布教許可の三ヶ條を記した立札二枚を送られた。一枚は高瀬に立てるため、他の一枚は熊本の南の川尻に立てるためである。川尻へは豊後にゐたドワルテ・ダ・シルバが派遣された。ダ

ルメイダはクリスマスから復活祭まで豊後に留まつて、自分のはじめた病院の仕事や思ひ出の深いこの地の教會の仕事に久しぶりで没頭することが出来た。しかし復活祭の後には川尻で病んでゐるシルバを見舞はなくてはならなかつた。シルバは熱心に布教につとめる傍、日本語の文法や辭書を編纂してゐたが、過勞に倒れたのである。ダルメイダはもう手のつくしやうのないこの重病人を、その希望に委せて高瀬のトルレスの許に運んだ。病人は十日ほどの後に満足して死んで行つた。

有馬の領主がその領内へ来るやうにトルレスを招いたのはその頃である。トルレスはさういふ機運の熟してくることを島原の對岸で待つてゐたのであつた。しかし彼は直ぐには動かなかつた。二度目の招請の手紙が來たとき、彼は、その保護者である豊後の領主の許可を得るまでの代理として、ダルメイダを有馬の領主のもとに派遣した。ダルメイダは島原で非常な歓迎を受けた後、有馬へ行つて領主義貞に會つた。義貞は前年の騒ぎの時よりはよほど權力を回復してゐた。彼はトルレスが口の津へ來てよいこと、敵に對して勝利を得るまでそこに留まつてゐて貰ひたいこと、地所家屋はトルレスが來るまでもなく直ちにダルメイダに與へることなどを云つた。かうして口の津が回復されたので、トルレスは大友宗麟の諒解を得て口の津に移り、地所家屋の處理をはじ

めた。この地の信者たちは、十ヶ月に亙る禁教の間にも、少しも退轉してゐなかつた。トルレスはそれを見て非常に喜んだ。さういふ状態になつたところへ、一五六四年八月半ばに、ポルトガル船サンタ・クルス號が三人の新らしい神父、ベルシヨール・デ・フィゲイレド、バルタサル・ダ・コスタ、ジョアン・カブラルを運んで來たのである。

この年のポルトガル船は、トルレスの意に反して平戸へ入港した。その時の折衝をやつたのは、度島たくしまにゐたフロイスである。フロイスは度島に移つて以來、島の外へは出ず、過失によつて會堂を焼失するといふ不幸に逢つたほかは、純眞な信者に取り巻かれて平和な生活を送り、説教や祭式を營む傍、六七ヶ月を費してフェルナンデスが日本文法書や語彙を編纂するのを眺めつゝ、靜かに日本語や日本人の氣質を學び取つてゐた。かうして一五六四年の四旬節も過ぎ、復活祭も終つたのであるが、その頃から平戸の情勢が少しづつ變つて來たのである。前にビレラが平戸から追放せられた時、背後の主動力であつた佛僧は、籠手田氏との争に負けて平戸から追放された。平戸の信者らも漸く動き出した。丁度その頃、七月の半ばに、帆船サンタ・カタリナと、ベルトラメウ・デ・ゴベヤのジャンク船とが、平戸附近へ來た。松浦侯はこれを平戸へ迎ひ入れようとしたが、船長らは神父の許可なしには入港しないと答へたので、松浦侯は止むなくフロイスの許

に使者を寄越して入港の許可を求めた。その時の條件は、神父の平戸來住を船長らと協議しようといふことであつた。フロイスは必要を認めて許可を與へた。そこで平戸に入港した船長たちは、神父の平戸來住と新會堂の建築との許可を松浦侯に求めたが、松浦侯はいゝ加減なことを云つて許可をひきのばしてゐた。そこへ、二十七日遅れて、神父三人を乗せた司令官（カピタン・モール）の乗船サンタ・クルス號が着いたのである。フロイスは度島でこの報を聞くと、その平戸入港を阻止するため、直ぐに小船に乗つて出掛けた。トルレスが前からこのことをフロイスに命じてゐたのである。サンタ・クルスはもう帆をあげて平戸に向ひつゝ、あつたが、司令官・船長ドゥン・ペドロ・ダルメイダはフロイスの申入れをきいて直ぐに引還さうとした。しかるに同船の商人たちはそれに反對した。サンタ・クルスはサンタ・カタリナよりも僅か二日後にシナを出帆したのであるが、途中暴風のために非常に難航して、一ヶ月近くも遅れてしまつたのである。だから一刻も早く馴染の港に着きたかつた。彼らの平戸入港が、キリスト教徒となつた大村純忠の敵に力を與へることになるといふ説得も、商人たちを動かすことが出来なかつた。でフロイスは、ともかくも船を平戸から二里ほどの所に停めさせ、三人の神父たちを伴つて島へ歸つた。さうして再び司令官を船に訪ね、神父を平戸に入れるのでなければ、平戸へは入港しない、といふ旨を

松浦侯に傳へて貰つた。その結果、松浦侯は遂にフロイスに平戸の會堂再建を許可したのである。これはビレラの追放以來失はれてゐた平戸の教會を回復することであつた。だからフロイスの平戸入りは出来る限り壯大になされた。サンタ・カタリナやジャンク船は大小の國旗を掲げ砲を並べてゐる。船長以下ポルトガル人たちは盛裝して舷側に並ぶ。陸上に出迎へた人々も着飾つてゐる。フロイスとフェルナンデスとが船で着いて上陸すると、サンタ・カタリナは祝砲を發し、信者たちは歡呼の聲をあげる。それから人々は行進を起し、松浦侯の邸に向つた。フロイスは船長たちやその他の人々と共に松浦侯に會つて、入國許可に對する挨拶をした。さうしてその足で籠手田氏を訪ね、會堂の敷地に廻つて、早速再建の計畫にとりかゝつたのである。かうして横瀬浦壊滅の一年後に平戸が回復されたのであつた。

新來の神父の一人フ、イ、ゲ、イ、レ、ドは到着後七八日で口の津にトルレスを訪ねて行つた。カ、ブ、ラ、ルはフロイスと入れ代つて度島に赴いた。コ、ス、タは乗つて來たサンタ・クルスに留まり、ゴベヤのジャンクに泊つたフロイスと共に、ポルトガル人の告解を聞き、ミサを行つた。フェルナンデスは信者の家に泊つて會堂建築のことに當つた。かうして急に手がふえたので、トルレスは、ポルトガル船が日本を去つた後フロイスやダルメイダを京都地方へ派遣しようと考えたのである。

第六章 京都におけるフロイスの活動

一 フロイスとダルメイダの上京

ルイス・フロイスがトルレスの命令によつて京都のビレラに協力するため平戸を出發したのは、一五六四年の十一月十日であつた。

フロイスは日本へ來てから一年餘の間に、横瀬浦の没落や、度島での日本人の信仰生活や、ポルトガル船の貿易と布教事業との微妙な關係などを經驗し、日本における宣教師の仕事のおほよその見當はつけ得たのであつたが、しかし日本の諸地方への旅行はまだ少しもしてゐなかつた。そのためか、度島のフロイスの許へはダルメイダが迎ひに行つた。ダルメイダもフロイスと共に京都地方へ行き、その地方の事情を調査してトルレスに報告する筈になつてゐた。しかしトルレスがさういふ計畫を立てた後の僅かな時日の間にも、ダルメイダの活動はめざましいものであつた。彼はまづ口の津のトルレスの許から豊後に派遣された。毎年の例になつてゐる領主饗應のた

めである。だから十月の半ばにはまだ豊後にゐた。その彼が、高瀬まで引き返して、そこから平戸へ陸路四五十里を旅行してゐる。この道筋は多分初めてだと思はれるが、途中、博多から十一里の所にある信者の町を訪ねたり、また海岸へ出て姪の濱とか名護屋とか信者のゐる町に足を止めたりしつゝ、平戸へ行つたのである。そこには神父ユスタがゐた。度島にはフロイスと共に神父カブラルがゐた。そこで平戸に半月餘り滞在した後、フロイスと共に出發したのであつた。

風の都合がよく、船は翌日の夜口の津についた。トルレスとフロイスとは横瀬浦の没落の特別れたきりであつたから、再會の喜びは非常なものであつた。しかし口の津にもたゞ四日留まつただけで、フロイスとダルメイダとは旅程に上つた。この時にも風の都合がよくその日の内に島原についた。この島原、ダルメイダの開拓した島原が、度島で一年を送つて來たフロイスを實に喜ばせたのである。港へ突き出てゐる舊城址——會堂の地所が、比類なく優れた場所であつたばかりでなく、更に島原の街はこれまで見た最も美しい街であつたし、そこに住んでゐる信者たちは殆んど皆身分の高い人たち、富める商人たちであつて、一般に教養も高く、教義に對する理解能力も優れてゐたからである。フロイスはそれを見て、信者たちがこれまでミサを聞いたこともなく、たゞ日本人のベルシヨールやダミヤンに二三ヶ月説教を聞いただけであることを残念に思ひ、

「もし自分に委せられるならば、日本での最も良い仕事に代へて、この地に留まるであらう」と早速トルレスに書き送つてゐる。さうして熱心にトルレスの島原訪問をすゝめ、「もし貴下が入日間この地に留まられるならば、この町がこれまで滞在せられたどの地方よりも優つてゐることを認められるであらう」とさへも云つた。それほど島原での二日間はフロイスにとつて印象が深かつたのである。

それから二人は高瀬を経て豊後に行き、臼杵丹生島に大友宗麟を訪ねた。その後府内に歸り、船の談判をして出發しようとしたが、風の都合で一ヶ月待たされ、遂にクリスマスを府内で祝ふことになつた。いよいよ豊後を出發し得たのは一五六五年の一月一日で、堺に着いたのは一月二十七日であつた。途中の航海は相當苦しく、特に寒さが烈しかつたので、ダルメイダは病氣になり、堺の富豪日比屋の邸宅で寝ついてしまつた。

フロイスは五人の信者と共に翌日直ちに京都に向つて出發した。(五人の内の一人は多分ダミヤンであらう。) その夜は本願寺の門前町大坂に泊つたのであるが、當時大坂はすでにコチンの町よりは大きかつたといはれてゐる。フロイスはまだこの地の領主「妻帯せる坊主」が宣教師にとつての最大の敵であることを知らなかつたので、この夜はのんきにして、同船した異教徒の泊

つた家に行き、款待を受けてゐたのであるが、夜半過ぎに火事が起つて、本願寺を初め九百戸を焼き拂ふといふ大火になつた。フロイスの取つた宿は焼けはしなかつたが、避難者を收容するためにフロイスたちの退去を求めた。信者たちは警備の厳しくなつた町でフロイスたちをかくまふのに骨折つた。本願寺の町であるといふことがこの時ひし／＼と身にこたへたのである。が一日の目を見ない暗い二階にひそんでゐただけで、翌々日の早朝、氣づかれずに町の門から出るこゝとが出来た。「私はこの時ほど道を遠いと思つたこともなく、またこの時ほど早く歩いたこともない。人の本性が自己保存を欲することはこの通りである」と彼は書いてゐる。この日は稀有の大雪で三四尺も積つてゐた。で歩くことが出来ず、漸く淀の川船を捕へて、一月の末日に京都に入ることが出来た。ビレラに逢ふと、まだ四十歳でありながら苦勞して七十の老人のやうに白髪になつてゐるこの日本布教者は、フロイスが遙々インドから日本布教に来てくれたことよりも、大坂の危険を脱したことを一層悦んだのであつた。

フロイスの京都入りを何故このやうに重視するかといふと、一つにはこのフロイスが熱心な宣教師であると共にまた比類なく優れた記者であつたこと、もう一つにはフロイスが到着してから半年の間の京都が戦國時代の混亂の絶頂を具象的に展示して見せた舞臺であつたことによるのである。フロイスは日本に着いて間もなく横瀬浦の没落を自分の眼で見た。この事件は日本におけるキリスト教布教事業の運命をすでに象徴的に示してゐるといふことも出来る。その同じフロイスが、京都に入つて半年後に、最初の公然たる禁教政策に出會つたのである。いづれもキリスト教が権力と結びつくや否や間もなく起つたことであつた。

フロイスは京都に入つて、半年後には轉覆される運命にあつた古い傳統的なものを、相當詳しく見ることが出来た。彼が京都に着いた翌日は陰曆の元旦であつたが、ビレラは將軍への年賀を必要と認めてゐたので、彼もビレラに伴はれて正月の十二日に將軍に謁した。そのために出来るだけの盛装をも工夫した。十年前にヌネスの連れて來た少年の持つてゐた金襴の飾りのある古い長袍、船室で使ひ古した毛氈、さういふものをフロイスは豊後から携へて來たが、ビレラはその毛氈で廣袖の衣を作り、金襴の長袍と共にこれを着て、その上に更に美しい他の衣をつけた。フロイスはキモノの上にポルトガルの羅紗のマントを羽織つた。進物はガラスの大鏡・琥珀・麝香などであつた。かうして二人は輿に乗り、二十人ほどの信者に伴はれて、多分今の二條城のあたりにあつたと思はれる足利將軍の宮殿に赴いた。將軍義輝は神父を一人づつ接見したが、フロイ

スはその際の義輝の印象については何も語らず、たゞその室の美しかつたことを言葉を極めて讃めてゐる。自分はこれまで木造の家であれば美しいのを見たことがない。室は金地に花鳥の美しい繪で取巻かれ、疊は實に精巧なもので、書院の窓の障子も非常に好かつた、と彼は云つてゐる。次の間に下つたとき、神父の着てゐるカバは珍らしい、見せて貰ひたい、といふことであつた。次で將軍の夫人に謁する時には、間の襖ふすまを開いて、次の間から禮をした。義輝の母慶壽院尼も同じ構へのなかにゐたので、二人はそこへ行つて、大勢の婦人の侍坐してゐる前で盃を頂戴した。フロイスはこゝでも、その静かで、簡素で、きちんとしてゐる有様を、僧院のやうな感じだとほめてゐる。この人たちが半年後に悲惨な目に逢つたのである。

この年賀の翌日にビレラは、當時の實權を握つてゐた「三好殿」を河内の飯盛に訪ねて行つた。三好長慶は實は前年の夏、四十二歳で病死したのであるが、また喪を發してはゐなかつたのである。ビレラはそこから堺のダルメイダを呼んだ。

ダルメイダはフロイスと共に堺に着いた時直ぐ日比屋で寝込んだのであるが、その病中二十五日ほどの間は、父母の家にあつてもこれほど親切にされることはなからうと思はれるほどの愛情を以て看護された。日比屋の主人のみならず夫人も子女も晝夜心をつくした。や、快方に向つて

から少しづつ説教なども始めたが、日比屋の娘のモニカの結婚問題について相談相手になり、父のサンチョを説いて正しい結婚の實現に努力したりなどもした。ビレラは呼ばれていよ／＼飯盛に向つて出發しようとする前日には、日比屋の主人の茶の湯の饗應を受け、その珍藏する道具類を見せて貰つたのであるが、當時すでに高價なものとなつてゐた茶道具類はとにかくとして、茶の湯の作法そのものは相當に深い感銘をダルメイダに與へたやうに見える。客はダルメイダと日本人イルマン（これはダミヤンではないらしい）と事務一切の世話をしてゐる信者とであつた。朝の九時に日比屋の家の横の小さい戸口から入り、狭い廊下を通つて檜の階段を上つたが、その階段はこれまで何人も踏んだことがないほど清らかで、實に精巧を極めてゐた。そこから二間半四方位の庭に出、縁を通つて室に入つた。室の廣さは庭より少し廣く、「人の手で作つたといふよりもむしろ天使の手によつて作られた」と思ふほど美しかつた。室の一方には黒光りする爐があつて、白い灰の中に火を入れ、面白い形の釜がかゝつてゐた。この釜は高價なものだといふことであつたが、その爐や灰の清潔でキッチンとしてゐることがダルメイダを驚かせた。やがて席につくと食物が運ばれ始める。美味は驚くに足りないが、その給仕の仕方の秩序整然として清潔を極めてゐることは、實に世界に比類がない、と彼は讚嘆してゐる。食後主人サンチョの立てた濃

茶の味も、出して見せた名物の蓋置きも、大した印象は與へなかつたらしいが、會席の氣分そのものは彼を敬服せしめたのである。

さういふ仕方では日本の生活を瞥見したダルメイダは、信者たちに送られて堺を出發し、堺から三里餘のところまで飯盛からの迎ひの船に乗つた。當時は寢屋川が淀川の支流でもあつたらしく飯盛山下まで船で行けたのである。日没頃船を上り、約半里の山道を輿に擔がれて、夜半近くやつと城に着いた。ビレラや信者の武士たち、その家族たちが、非常な喜びを以て彼を迎へた。

この飯盛山上の堅固な城は、今や畿内を押へてゐる實力の所在地であつた。その城の内の身分ある武士たちが、ビレラやダルメイダに對して、恰かもその主君に對する如き尊敬の態度を示してゐるのである。こゝでビレラは一週間の間、武士たちの告解を受けた。その間にビレラやダルメイダは三好の殿を訪問し盃を受けたといふのであるが、長慶は既に半年前に歿してゐるのであるから、誰に會つたのか解らない。嗣子の重存（義重、義繼）は未だ非常に若く、それに會へば何か氣づく筈である。或は三好三人衆の内の誰かが會つたのかも知れない。その時三好の殿はビレラやダルメイダと同じく跪坐し、二人が辭去する時にも禮を盡した、とダルメイダは記してゐる。ビレラが飯盛山下の三箇を訪れた後、奈良へ出て松永久秀を訪ねてゐるのは、或は形勢の變

化に對する幾分の理解を示してゐるのかも知れない。

三箇は當時は大河に圍まれた半里位の島で、領主の伯耆守はダルメイダが日本で見た最も信仰の厚い信者の一人であつた。彼は日本全國のキリスト教化を希望してゐたし、また堺の町の會堂建築費として錢五萬を寄附しようとして申し出た。この領主の熱心が半年後には非常に役立つことになるのであるが、この時にもダルメイダの體の痛みを心配して、治療のために、輿を用意し十里の道を京都へ送りつけた。そこでダルメイダはまた二ヶ月ほど寝ついたのである。

二 日本文化の觀察

フロイスが京都に入つてから、日本文化に對するヤソ會士の考察が非常に精密になつたやうに思はれる。フロイス自身の報告のみならず、ダルメイダの報告などにもその傾向が顯著に現はれて來てゐる。ヤジロー、ロレンソ、その他九州の信者を通じて見てゐた日本を、自分たちの眼ではつきりと見直さうといふ要求が、強く働き出したのであらう。

フロイスが京都に着いてから二ヶ月足らずで書いた最初の書簡は、この地の風俗について報告するといふ書き出しではあるが、實際は日本文化の概観といふやうなものになつてゐる。先づ日

本の風土から説き起し、衣食住の細かい特徴を述べた後に、この日本文化の中樞地方においては男女が通例読み書きを知つてゐること、身分あるものは皆禮儀正しく、教養があり、外國人に會ふのを喜ぶこと、外國のことは些細な點まで知らうとすること、生來道理に明かであること、などを力説し、次で日本の政治組織に及んでゐる。日本は、首府京都に「公方様」と呼ばれる主権者がゐて全國を支配してゐたが、地方の諸侯の獨立のために今は六十六ヶ國に分れ、公方様はただ名目上尊ばれてゐるだけである。實力を持つた諸侯は互に他を征服しようとし、戰爭の絶える時がない。京都にはもう一人、日本人が日本の首長として殆んど神の如く尊崇してゐる神聖な君主がある。神聖であるから足を地に附けることが出来ない。しかし非常に貧しく、たゞ進物によつて己れを支へてゐる。それに仕へてゐるのが公家で、頗る貪欲である。諸侯の間の爭議の調停などをやると、多額の金を受ける。さういふ政治的支配者の衰微した状態に比べると、宗教的支配者の力は非常に強い。悪魔がいかに力をつくしてこの國民を欺いてゐるかがそれによつて察せられる。佛教は十三の宗派に分れてゐるが、その寺院は實に壯麗であつて巨額の収入を有してゐる。僧尼の數も非常に多い。殊に高野山の勢力、奈良の寺院の壯觀など、實に驚くべきものである。しかも悪魔の働きはそれだけに盡きない。山伏といふものがかなりの勢を持つてゐる。エン

キ(善鬼)とか鳩の飼とかといふものもある。悪魔は實に綿密に網を張つてゐるのである。さういふ網のなかで日本人は、死者を葬るために實に壯麗な行列や儀式をやつてゐる。山口や豊後でキリシタンのはじめた葬儀の比ではない。更に悪魔は日本人に、生きながら葬る方法をさへも教へ込んでゐる。葬られるものはそれによつて法悦を感じ、送るものはそれを羨望するのである。フロイスは京都への途次伊豫でそれを見聞した。それ位であるから、生けるものに對する説教も非常に發達して居り、説教師は通例極めて雄辯である。その上坊主は一般民に對する態度が眞面目で優しい。パリサイ人の偽善を悉く備へてゐる。だから一般人はそれらの宗旨を信じ、そこに救ひの望みをかけるのである。

このやうにフロイスは日本に行はれてゐた宗教をすべて悪魔の仕業として説いてゐるが、これは當時のキリスト教宣教師に通有の傾向であつてフロイスに限つたことではない。たゞフロイスがその「悪魔の仕業」を綿密に考察し始めたこと、それが著しく目立つのである。半月後に書いた二度目の書簡にも、京都の寺院見物について報告してゐる。三十三間堂と東福寺とを見たのである。三十三間堂は今と大差はなかつたであらうが、フロイスは千體の觀音像の金箔の光が堂内に横溢してゐる光景に感服したらしく、もしこれが異教のものでなかつたならば、「天使の集團を

想ひ浮べたであらう」と思はれるほどに、佛像の姿が美しかった、と言つてゐる。東福寺は今と異なり堂塔の揃つてゐた頃のこと、規模は非常に大きかつた。フロイスはこゝでも、坊主の家や庭の清潔で整頓してゐることは、注目すべきだと言つてゐる。

更に五十日ほど後に書いた三度目の書簡にも、ピレラやダルメイダと共に案内された見物の記事がある。この時には先づ將軍の宮殿を見た。その中で、休養のために設けられた家といふのが、精巧なこと、清淨なこと、優雅なこと、立派なことにおいて、ポルトガルにもインドにも比類のないものであつた。この家の外の庭も非常に美しく、杉・柏・蜜柑・その他の珍らしい樹木、百合・石竹・薔薇・野菊・その他さまざまの色や匂の草花が植ゑてあつた。そこを出て廣い街路を通り、内裏へ行つた。「日本全國の最も名譽ある君主、元は皇帝であつたが今は服従せられない君主」の宮殿である。この宮殿は入ることが出来ず、たゞ外から眺めただけであるが、庭は見物することが出来た。そこを出て西陣の繁華な街を通り、大徳寺へ行つたが、そこには大きい森のなかに、ゴアのコレジョの敷地ほどの廣さ、或はその二三倍もある僧院が、五十もあつた。フロイスたちはそのうち三つの僧院をざつと見物しただけであつたが、どの一つを取つても數日間見るに値するほどのものを持つてゐた。建築は美しく、精巧で、清潔である。庭も非常に凝つてゐる。

室内の裝飾は實に華麗であつた。フロイスたちもそれには驚嘆せざるを得なかつたのである。その翌日は東山見物で、祇園から知恩院に廻り、そこで日本の説教師の説教の模様を視察した。その説教師は高貴な生れの四十五歳位の人で、容貌が非常に美しく、聲の質や、優雅な態度・動作など、確かに注目すべきものであつた。その説教の技倆も嘆賞に値した。これを見てピレラもフロイスも、日本の信者に對する説教の方法を改善しようと考へたほどである。

かういふ印象を記したあとでフロイスは力説する。シャビエルが云つたやうに、日本人は、文化や風俗習慣に關しては、多くの點において、スペイン人よりも遙かに勝つてゐる。日本に來るポルトガル人があまり日本を尊重しないのは、九州の僻地の商人や民衆にのみ接してゐるからである。さういふ民衆と都の人々とは實に甚だしく異なる。シャビエルが日本に眼をつけたのは確かに聖靈のうながしによるのである、と。

さう云ふ考のフロイスであるから、日本人が洗禮を受ける前にさまざまの難問を提出する所をも理解することが出来た。ヨーロッパ人は物の道理などを考へる前にすでにキリスト教徒となつてゐるのであるが、日本人は異教のなかで育つて來た後にキリスト教の眞なることを認めて改宗するのであるから、豫め教義についての理解に徹しなくては、洗禮を受けることが出来ない。

従つて宣教師は、日本の八宗を學習研究し、その立場に立つてこれを反駁し得なくてはならない。またさういふ異教の影響から脱し得た人々に對しても、キリスト教の教義がひき起す疑問に對して十分に答へ得なくてはならない。フロイスはさういふ疑問として、次のやうな問題を列記してゐる。(一) 悪魔は神の恩寵を失つたものである。しかるにその悪魔が、人よりも大きい自由を持ち、人を欺くことも出来れば、正しい者を滅亡の危険に導くことも出来る。それは何故であるか。(二) 神がもし愛の神であるならば、人が罪を犯さないやうに作つて置く筈である。さうでないのは何故であるか。(三) 神が人間に自由を與へたのであるならば、最初に悪魔が蛇の形をして誘惑を試みた時、何故に天使をしてそれが悪魔であることを知らせなかつたのであるか。

(四) 人の精神的本質が清淨であるならば、何故に肉體にある原罪によつて汚されるのであるか。(五) 善行をなすものが現世において報いられず、悪人の繁榮が許されてゐるのは何故であるか。等々である。ビレラはそれに對して問者の満足するやうな答を與へた、といふのであるが、その答は記されてゐない。それはさう容易ではなかつた筈である。なほその他にも、もしキリスト教の説く如き全能の神があるならば、何故今日までその愛を日本人に隠して知らしめなかつたのであるか、といふ問が掲げられてゐる。これも簡單には答へられなかつたであらう。フロイスもそ

の困難ははつきりと認めてゐる。しかし日本にある多數の宗派が互に相反した意見を持つて對立してゐることは、キリスト教を説くに非常に都合がよかつた。もしこれらが悉く一致して唯一の宗教となつてゐたならば、右の困難は切り抜けられなかつたかも知れない。

フロイスが日本の文化に丹念な注意の眼を向けた態度は、ダルメイダにも影響を與へたらしい。堺の日比屋の茶會記を書いたことなどもその結果と思はれるが、奈良地方の見物記などにもその趣が現はれてゐる。

京都で寝込んだダルメイダは、復活祭の頃には回復して教會の行事に参加し、そのあとでビレラやフロイスと共に京都見物をもやつた。さうして、多分ロレンソをつれて、大和地方をも巡回したのである。奈良につくとすぐ翌日には松永久秀の信貴山城を訪れた。少し前二月の末頃にはビレラが奈良に松永を訪ねてゐるが、この時にも先づ松永の居城に行つたといふことは、恐らく當時の政情とか、はりがあるであらう。ダルメイダはその記事のなかに、三好殿や將軍の臣下である松永彈正が、逆に將軍や三好殿を己れの意志に従はせてゐる、とはつきり書いてゐるのである。がこの訪問の時には、松永の家臣の信者たちに款待され、松永の城内を見物しただけで、久

秀自身には會つてゐない。城は着手以來もう五年になるので、城内には重臣たちの二階建や三階建の白壁の邸宅が美しく建ち揃つてゐた。それは「世界にもあまり比類のないやうな美しい別荘地」に見えた。松永の館は總檜造りで、一間廊下は一枚板で張られて居り、障壁は悉く金地に繪をかいたものであつた。京都で立派な建築を見て來たばかりのダルメイダの眼にも、これは一層立ちまさつて見えた。「世界中でこの城のやうに善美なものはないと思ふ」とダルメイダは極言してゐるのである。

翌日ダルメイダは、日本人が遠國から苦心して見物に來る奈良の寺々を見て廻つた。先づ行つたのは興福寺であるが、これは應永修築の、七堂伽藍の完備したものであつて、その結構の壯大なことが彼の眼を驚かせた。柱が太くて高いことだけでも、さういふ大きい樹木をあまり見たことのないダルメイダには驚異であつた。そこから、杉並木の壯麗なのに感嘆しながら春日神社に行き、手向山八幡宮を通つて大佛殿へ出たのであるが、これも壽永修築の大佛殿で、今のとは形も大きさも違ふものである。ダルメイダは日本の建築が一目して寸法の解るものであることを説いたあとで、大佛殿を間口四十四ブラサ(約二九〇尺)、奥行三十ブラサ(約二一八尺)と記してゐる。しかしこの堂は天平尺で間口二九〇尺奥行一七〇尺であつたのであるから、間口の方はかな

り精確であるが、奥行の方が合はない。恐らく十一間七面の柱間を各四ブラサと見つもり、正面の柱間を十としたのに對し、側面の柱間を七と數へ誤まつたのもあらうか。いづれにしてもこの堂は、唐招提寺の金堂を重層にして擴大したやうな、壯大なものであつた筈である。ダルメイダはこの堂を取り巻く廻廊と、それに取り巻かれた庭との美しさを特筆してゐるが、この美しさの印象に大佛殿の印象が籠つてゐない筈はないであらう。大佛の大きさはさほど彼を驚かさなかつたが、立ち並ぶ九十八本の太い柱は彼に強い刺戟を與へた。日本人のやうに開けた、思慮のある國民が、こんな壯大な殿堂を築くほどまでに悪魔に欺かれてゐるとは、實に驚くのはかはない、と彼は感じたのである。

ダルメイダは奈良見物のあとで、ロレンソの教化した十市城の信者たちや澤城の領主ドン・フランシスコなどを訪ねた。これらは當時松永久秀の手についてゐた武士たちである。特にドン・フランシスコは、ダルメイダが見た日本人のうちで最も偉大な人物であつた。體格が大きい上にあらゆる美質を備へ、優雅快活で愛と謙遜に富み、勇敢であると共に深慮のある人であつた。ダルメイダの滞在中にこのドン・フランシスコは、四五里離れた他の城主を訪ね、松永久秀から叛かうとする意圖を喰ひ止めたといふ。

ダルメイダはドン・フランシスコの手の者に送られて堺に出、五月中旬に船に乗った。ロレンソのほかにも、堺の高名な醫者で、「この世を捨ててヤソ會に入つた」學者が、一緒であつた。

三 將軍暗殺と宣教師追放

京都で將軍暗殺といふ變事が起つたのはそれから間もなくである。

前年三好長慶が死んだにもかゝらずその喪を祕してゐたことは、いろいろ不安を反映したものであらう。先づ第一に三好や松永はその把握した權力を敵から守る必要があつた。第二に三好の權力は家臣の松永の手に移りつゝあつた。この情勢を察したビレラは、二月から三月へかけて、河内の飯盛城や奈良の松永の城を訪ねて行つたのである。しかし松永久秀への働きかけはうまく行かなかつたであらう。ビレラの留守の間に書いたフロイスの書簡によると、畿内において武士たちの改宗の先驅けとなつた結城山城守は、その主君たる松永久秀の京都統治が専横殘虐であるのを見て、郷里の尾張へ歸りたい意志を洩らしたといふ。その頃からもう何かが萌してゐたのである。しかし事が起つたのは、三好と松永の軍隊一萬二千が五月末(永祿八年五月一日)に京都に來てからであつた。

フロイスはこの時のことを記して、三好殿が將軍から榮譽を與へられた機會に、その謝意を表するため、己れの子、松永彈正、及びもう一人の大身をつれて京都に來たと云つてゐる。當時京都の町の人もさう思つてゐたかも知れぬ。しかしこの時來たのは三好長慶の子重存(義重)、松永彈正の子久通(義久)である。重存はまだ十五歳、久通も若かつた。初めての任官で、兩人とも將軍義輝の「義」の字をもらつた。兩人はその御禮に將軍を饗應したいと申し出たが、將軍は彼らの軍隊の物々しさに怖れて、その受諾を躊躇し、或は京都からの脱走を計つたとさへ云はれてゐる。結局饗宴の豫定の日の二日前、一五六五年六月十七日(永祿八年五月十九日)早朝、清水詣を装つた七十騎ほどの三好の隊が突如方向を變へて將軍の宮殿に赴き、訴狀を出した。それは將軍の夫人、侍女、その他の侍臣が彼らを讒したといふ理由を以て、その引渡しを要求したものであつた。この訴狀に關して將軍ととやかく折衝してゐる間に、三好、松永の軍隊は宮殿を圍み、銃隊はすでに庭にゐた。やがて射撃が始まり、宮殿には火が放たれた。將軍義輝も母堂慶壽院も殺された。(夫人のみは幸ひに脱れたが、二三日後、見出されて頸を切られた。)これがこの年の正月の參賀にフロイスの見た貴人たちの最後であつた。

かういふ思ひ切つたやり方が、十五歳の義重や義久の頭から出たのでなく、奈良の多聞城で采

配を振つてゐた松永久秀の計畫であつたことはいふまでもあるまい。下剋上の大勢を代表する久秀は、傳統的なものの權威に終止符を打ちたかつたのであらう。久秀の重臣であつた結城山城守は、その日の夜、キリシタンの老人を使に寄越して、自分は主人の心を知つてゐる筈のものであるが、しかし今度のことは全然知らなかつた、將軍を殺すほどであるから何をするか解らない、宣教師たちは信者らと談合して自ら救ふ方法を講じなくてはならぬ、といはせた。老人の説明によると、松永久秀は法華宗徒である。法華宗の僧侶はキリスト教を憎むこと甚しいのであるから、久秀を説いて宣教師殺戮をやらせるかも知れない、といふのであつた。翌日ビレラは數人の信者と談合して次のやうに決心を語つた。松永彈正、或はその子が、宣教師たちを殺さうと決心したならば、宣教師たちには脱れる道はないのである。だから逃げては仕方がない。京都の會堂は異教徒に占領されればもはや回復は出来ないのであらう。だからあくまでも會堂を守り、祭壇の前に跪いて喜んで死なう、と。信者たちは同意見であつた。三好の部下のキリシタン武士たちも、百人位しか來てゐなかつたが、皆同意見であつた。彼らは松永彈正を呪ひ、その宣教師に對する計畫を探知して知らせると約したが、しかし將軍の場合と同じく奇襲をやられては自分たちは間に合はないだらう、と云つた。で祭具などはこつそり堺や飯盛に移すことにした。さうしてじつと

形勢を觀望してゐた。

將軍家の次にはキリスト教の宣教師である、とフロイスたちは感じてゐたが、しかし將軍の家臣や親近者が續々として捕へられ殺されて行く間に、キリスト教會堂に對する襲撃は全然なかつた。それは三好の部下のキリシタン武士たちのお蔭であつたのか、或は松永彈正自身が宣教師問題に重きを置かなかつたのか、よくは解らない。が丁度この頃に、右に言及した結城山城守の長子で三好の部下となつてゐたアンタン左衛門が、毒殺されるといふ事件も起つた。法華宗の僧侶がこの機會を捉へてキリスト教排撃運動を強化したといふことも事實であらう。松永彈正は結局宣教師の追放、布教の禁止の策を取つた。しかし最初布教を許可したのは將軍や三好長慶のみではない。京都の統治の責任者としての彼自身の名において、宣教師たちは京都居住を許されてゐたのである。だから彼は、おのれの名においてではなく、將軍よりも一層無力でありながら將軍よりも一層尊貴である「日本全國の君主」の名において、追放令を出した。即ち禁裏に申し出て女房奉書をもらひ受け、「大うす逐ひ拂ひ」をやつたのである。それは一五六五年七月三十一日（永祿八年七月五日）三好、松永の軍隊が京都を引き拂つた日の日附で、その翌日市内に布告された。布告の出た時には宣教師たちはもう京都に居なかつた。

このやうに宣教師の京都脱出がうまく行つたのは、三好の部下のキリシタン武士たちの働らきのためであつた。宣教師たちが殺されるであらうといふ噂を聞いたキリシタン武士たちは、所々の城から神父のもとに使を寄越したが、特に飯盛の城からは、信者のうちの重立つた武士がビレラを連れに來た。ビレラを自分たちが擁してゐれば、萬一危険が迫つた際に緩和策を講ずることができると考へたからである。ビレラは、フロイスがまだ日本語を十分に話し得ないので、自ら留まつて事を處する必要があると云つて、中々承知しなかつたが、武士たちの熱心なすゝめにより、遂に出發することにした。フロイスに對しては、「日本全國の君主」或は松永彈正の命令を受けるまでは、會堂及び住館を捨ててはならないと命じた。ビレラの出發は七月二十七日金曜日であつた。それから三日目、二十九日の午後になると、いよいよ追放令が出たらしい情報を信者たちが持つて來た。松永彈正のすゝめによつて日本全國の王が追放の書附を出したことは事實である、彈正の子の義久も同じ命令を出した、即刻會堂を捨てて退去するがよい、といふのであつた。フロイスは三人の少年に祭具の類を託して出發させたが、自分は動かなかつた。追放の命令を自分が受けるまでは、會堂を捨てることは出來ない。ビレラの命令の方が自分の命よりも重い。これがフロイスの態度であつた。しかし翌三十日の朝になると、三好三人衆の一人である三好日向守

が、その家臣のキリシタンを使に寄越して、實情を傳へた。日向守は宣教師の追放といふ如きことを極力阻止しようと努めたのであつたが、松永彈正が背後から指圖してゐるために、遂に成功しなかつた。三好、松永の軍隊は翌日朝京都を引き拂ふことになつてゐる。神父たちがその後まで京都に滞在することは危険である。出来るだけ早く堺もしくはビレラの滞在地に向つて出發して貰ひたい。途中は兵士を以て護衛する、といふのであつた。船二艘がすでに準備してあり、所持品の保護や關稅の免除の手筈も整へてあつた。なほ日向守のほかにもう一人、三好義重の後見の如き職にある人も、同じやうな手配をしてくれた。それでもフロイスはその日に出發はしなかつた。翌三十一日には命令の傳達があるであらうと待ち構へたのである。その命令の傳達は「われらの大敵なる二人の異教の武士」によつて行はれる筈であつた。その豫定の通りに行けば、フロイスやダミヤンは侮辱と苦痛とを受けて文字通りに追放せられたであらう。しかし三十一日の朝には、三好義重の祕書官役をつとめてゐたキリシタンの武士が、主君と共に出發せず、部下を率ゐてあとに残つた。さうして部下をして會堂を護らせたのみならず、追放命令を實施しようとしてゐた武士たちと懇談し、同日中に宣教師を連れ出すから追放令は翌日まで市内に布告しないで置いて貰ふこと、彼らが追放令を持つて會堂に赴かずとも彼がそれを宣教師に取次ぐべきこと、

などの諒解を遂げた。そこでフロイスはゆつくりと信者たちに別れを告げた。信者たちも會堂を異教徒によつて破壊せられる前に、自分たちの手で戸障子疊などを外して運び出してしまつた。フロイスたちは午後三時頃、キリシタンの武士たちに護られ、大勢の信者たちに取り巻かれて、京都の地を離れた。町から一里半ほど来た野の中で、ダミヤンが見送りの信者たちに信仰の堅持を説き、教會回復の期待を語り合つて別れた。熱心な信者三人は別れずに飯盛までついて来た。その一人は小西行長の父、小西隆佐であつた。

かうして京都の教會は、建設以來六年、漸く盛大になりかけた途端に、覆滅させられたのである。その隆盛の機運を作つたのは、三好氏に屬する武士たちであつたが、今や同じ三好氏の配下にゐた松永久秀が、はつきりと反對の態度を見せはじめた。松永方と三好三人衆との對峙は、この頃から激成されて来たのである。キリスト教が武士の政治的権力と結びつくと共に、同じ武士階級のなかから反キリスト教的な運動が擡頭してくるといふ現象は、九州の大村の場合と同じやうに、こゝにも見られる。尤もこゝでは、キリシタンの武士が佛像佛寺の破壊を敢行するといふところまで行つたわけではないが、松永久秀はその獨裁的権力の掌握のためにキリスト教排撃を有利としたのである。奈良を根據地とする久秀にとつては、佛寺の勢力は無視し難いものであつ

たに相違ない。この關係を考へると、佛寺及び宗教一揆に對して思ひ切つた彈壓の態度をとつた織田信長の出現が、日本におけるキリシタン全盛時代を作り出した所以は、理解せられ易くなるであらう。

四 京都回復の努力

京都を立つたフロイスたちは、鳥羽から船に乗り、夕方枚方で飯盛の武士たちに迎へられ、夜半に飯盛山下砂すなの、結城左衛門の建てた小庵に着いた。そこにはビレラや信者たちが集まつてゐた。キリシタンの武士たちは宣教師の京都追放を憤り、おのれの所領や妻子を捨てて死の覺悟を以てそれに抗議しようといきり立つてゐたので、ビレラはそれを鎮めるのに苦心してゐた。フロイスは更に一里ほど先の三箇島に行つて泊つた。

一週間ほど後に、ビレラとフロイスとは送られて堺の町に移つた。こゝは當時としては最も安全な場所であつた。二人は日本人のイルマン二人と共に布教に従事し、訪ねてくる飯盛の武士たちを力づけると共に、この富裕な町の教養ある人たちの間に教をひろめた。その間にも京都の教會の復興の努力は絶えず續けてゐた。一方では飯盛の武士たちが、他方では京都の信者たちが、

それに呼應した。追放令は松永彈正の名においてではなく、「日本全国の王で絶対君主でありながら何人も服従せず、偶像のやうに宮殿の中において外に出ることのない内裏」の名において發せられたのであるから、京都へ歸る免許状もこの内裏から得なくてはならない。京都の信者たちは、將軍、三好長慶、松永久秀等から得た免許状を提出して、諒解を求めた。一年後の一五六六年六月頃には内裏の意向が解つた。免許状は與へてもよい、しかし「神父たちは、人肉を食ひはしない」といふことを、信者一同が佛前に誓はなくてはならぬ、といふのであつた。偶像による宣誓といふ條件は問題の解決を困難にした。もう一つの望みは阿波公方足利義榮を擁してゐる三好長治の家の實權者篠原長房であつた。この人は人物も立派であり、キリスト教に同情を持つてゐる。その勢力が京都に及び、義榮を將軍とすることが出来れば、そこにも教會回復の道は開けるであらう、とフロイスたちは考へてゐた。しかしこの道も容易に開けなかつた。

一五六六年四月の末に、ビレラはトルレスの命によつて豊後に移つた。平戸を追放された直後、京都布教を命ぜられて初めて堺に着いてから、もう八年目であつた。その間のさまじい艱難が、この四十代の神父を白髮の老人にしてしまつた。今また京都を追放され、彼の建てた聖母の會堂を再興する見込も立たないまゝで、堺を立つて行つたのであつた。

あとに残つたフロイスは、日本に着くと間もなく横瀬浦の没落を見、京都に入ると間もなく京都の教會の没落を経験した人であつた。といふことは彼が最初の開拓者たちのあとを受け、その仕事の再興といふ立場に立つてゐたことを意味する。そのためには何よりも先づ、ビレラやロレンソが數年間の苦心で作上げた信者たちを、保持して行かなくてはならなかつた。堺には信者の數が少なく、會堂らしいものもなかつたが、一五六六年のクリスマスには堺の町の會議所を借り、町の外で對峙してゐた軍隊のなかのキリシタンの武士たち七十人ほどをも參加せしめて、告解・聖餐・ミサなどにつとめた。戰場では敵對してゐる武士たちが、こゝでは一人の主君の家來でもあるかのやうに睦まじかつた。飯盛からはサンチョが部下をひきゐて參加した。一五六七年の一月にはサンチョに招かれて三箇に行き、八日ほどの間毎日二回のミサを行つた。四旬節には三箇から灰をもらひに來たが、復活祭の週は堺と京都との信者たちが三箇に集まつて一緒に祝ふことになつた。そのためのサンチョの盡力は非常なものであつた。交通のための船や馬の用意、宿の割りあて、會堂の應急擴張など、費用を惜しまずに努めた。三年來告解の機會を持たなかつた京都の信者たちは、泣いて喜んだ。がかうして信者たちが集まつて來た丁度その時期に、三好義重が兵を起したとの知らせが堺から來た。一同は騒ぎ立つて復活祭の行事も滅茶々々になるか

と見えたが、サンチョは平然として、この地は安全である、十五日や二十日の間に戦争の起ることはない、歸途の安全も引きうける、神の光榮のために集まつたものは神が守つて下さると云つた。それで一同は安心して豫定通り復活祭を終つた。

この時信者たちを脅かした戦争の噂は、三好義重が三好三人衆の手を離れて松永久秀と合し、久秀がその黨を集め始めたことにかゝるであらう。サンチョの豫言の如く半月や一月で戦争にはならなかつたが、半年後には、奈良の大佛殿を焼いたあの戦争になつたのである。

このやうに三好の當主義重が三好三人衆と離れたのは、阿波より迎へられた足利義榮が三好三人衆を重んじて義重を省みなかつたからである。足利義榮は前年の夏篠原長房に擁せられて兵庫に上陸し、攝津越水城に據つてゐた。三好三人衆は篠原長房と力を合はせ、義榮を足利將軍たらしめようと企ててゐたのであるが、その長房の寵臣に一人のキリシタンがあり、その縁でフロイスも二三度長房に會ひ款待を受けた。長房はフロイスの請に委せ、公家の一人に書簡を送つて宣教師の追放解除を説いたこともある。飯盛のキリシタン武士たちもこの點において長房に結びつた。二十五人ほどの重立つた武士が尼ヶ崎で會合し、篠原長房と三好三人衆との前へ出て、代表者三箇のサンチョをしてその主張を述べしめた。自分が三好の居城飯盛を預かつた時には、神

父を京都へ歸らしめるといふことのほかに希望はなかつた。しかるに三好三人衆はそのことを實現しないのみか寧ろそれを妨害して來た。しかし神父を京都に歸還せしめることは我々の面目の問題である。今や三好の當主は松永と合體し、三好の家臣たる我々はそれに従はなくてはならぬのであるが、しかしもし篠原長房及び三好三人衆が神父の京都復歸を決定せられるならば、我は篠原殿の手について力限り働くであらう。我々の求めるのは祿でもなく名譽でもなく、たゞ神父の京都歸還である、といふのであつた。長房はこれに同意し、三好三人衆をもほと同意せしめた。しかるに丁度その頃、三人衆の親戚の青年で、三箇でキリシタンとなつた武士が、越水城の青年武士と共に遊山に行つた際、些細な言葉争ひから佛像に不敬を加へるといふ事件が起つた。三好三人衆はまた硬化しさうに見えた。篠原長房もこの事件を喜ばなかつた。しかしそれは神父の責任ではないといふので、半月ほど後に、長房は公家宛の書簡を書き、三好三人衆にも濫々と同様の書簡を書かせた。かうして篠原長房の壓力が漸く内裏に加はり始めた途端に堺附近にゐた三好義重が松永久秀に擁せられて信貴山城に入つたのである。それは一五六七年の五月の初めであつた。公家は形勢を觀望して容易に返答を與へなかつた。松永久秀と篠原長房とのいづれが勝つかは、—— 況んやこの二人のいづれもが制覇に成功しないであらうなどは、當時何人にも解

らなかつたのである。

一五六七年の夏、奈良まで攻め寄つた三好三人衆の軍隊は、大佛殿に陣して多聞城の松永の軍に對したが、攻圍半年の後、夜襲によつて大佛殿を焼かれ、敗退した。しかし京都制壓の勢力を失つたわけではなかつた。篠原長房らは足利義榮の將軍宣下に努力し、年内には成功しなかつたが、翌年の三月の初めには遂に成功してゐる。堺のフロイスの状況はあまり變らなかつた。一五六八年の復活祭は前年のやうに三箇で行はれた。サンチヨの計畫した會堂はすでに出来上りつゝあつた。前年に異なるところは、フロイスが尼ヶ崎その他攝津の地において身分ある武士たちを教化したことである。京都の會堂は篠原長房の盡力によつて信者たちの手に歸り、聖靈降臨祭の後には日本人のイルマンが行つて四十日ほど働いた。神父の京都歸還については、長房は遂に、最後通牒を發した。神父を追放しなくてはならないといふ理由は、何にもない。だから神父の京都歸還を許可せられないならば、自分は權力を以て彼らを復歸せしめるであらう、といふのであつた。

しかるにそれがどうなるか解らない内に、織田信長が、將軍たるべき足利義昭を擁して上京して來たのである。

第七章 九州北西沿岸地方における布教の成功

一 福田の開港

一五六五年、京都で將軍暗殺の變事が起つた時よりも一ヶ月ほど前に堺を出發したダルメイダは、豊後を経て島原でトルレスと落ち合ひ、おのれの開拓した葡萄園の果實を靜かに味ふことが出来た。そこから信者たちの二艘の大船に送られてトルレスと共に口の津に歸つたが、こゝも彼の開拓した土地であつた。しかし彼は、席の暖まる暇もなく、半月の後にロレンソを伴つて福田の港に派遣されたのである。

長崎の直ぐ西の、外向きの海岸にある福田が、横瀬浦に代つて大村領の開港地に選ばれたのは、この年からである。やがて一五七〇年に長崎が開かれるに至るまでの四五五年の間、(口の津が用ゐられた唯一年のほかは)福田がポルトガル船の寄港地になつた。しかし平戸の地位を福田が奪ふについては、相當に面倒なことが起らなかつたのではない。前の年には、トルレスの平戸忌

避の方針にもかゝらず、ポルトガル船が平戸へ入つた。ポルトガル王から任命された司令官の乗船サンタ・クルスさへもさうであつた。司令官ドン・ペドロ・ダルメイダがトルレスの方針に従はうとしても、商人たちはそれをきかなかつたのである。そこで當時度島にゐたフロイスは司令官と相談して、平戸の領主松浦侯に交渉し、宣教師追放の取消しや會堂再建の許可を取りつけることに成功した。平戸の領主にとつては、さういふ犠牲を拂つてでもポルトガル人との貿易を續けたかつたのである。かうして前の年の十一月には、日本で最も大きく美しいといはれた會堂が出来上り、日本に馴れたフェルナンデスのほかに新來の神父ダ・コスタ、カブラル、少し前に來たイルマンのゴンサルベスなどが滞在して、盛んに布教を始めた。松浦侯に對しても、會堂へ招待したりなどして、いろ／＼と働らきかけた。附近の島々では著しく教勢を擴めることが出来た。さういふ形勢から考へて、平戸の領主は、一五六五年度のポルトガル船も勿論平戸へ入港すると考へてゐたに相違ない。しかるにその一五六五年の七月ごろ、司令官ドン・ジョアン・ペレイラの乗つた商船が横瀬浦について平戸へ連絡したとき、平戸にゐた神父コスタは、ペレイラの平戸入港を止め、新しい港福田に回航させたのである。その理由は、松浦侯の嗣子がキリシタンの少年の持つてゐた錫のキリスト像を瀆したことに對し、松浦侯が謝罪の約束をしながら、それ

を履行しなかつた、といふことである。キリシタンが佛像の破壊を大仕掛けにやつてゐることに比べれば、この少年の仕業は、松浦侯の眼には一小事に映つたであらう。従つてこの事を口實としてポルトガル船が平戸入港をやめるとは豫期してゐなかつたであらう。しかし神父たちは既にキリシタンとなつた大村純忠を支持するために、たゞ貿易のたのめの方便として濫々布教を許してゐるやうな平戸の領主から、貿易の利を取上げるといふ方針を確定してゐたのである。司令官ペレイラはこの方針を是認し大村領の福田港で貿易を開始した。これを知つた平戸の領主は、ポルトガル船の「生意氣」な振舞ひを憤り、遂に五十餘艘の軍船を派してこれを襲撃せしめたのである。ドン・アントニオ籠手田は勿論この企てには反對であつた。だから松浦侯は彼に知られないやうに、たゞ反キリシタンの武士たちだけを集めてこの企てに参加せしめた。倭寇と關係がないでもない彼らは、ポルトガルの「商人」に何程のことが出来ようと見くびつてゐたものでもあらうが、しかし襲撃は全然失敗であつた。大砲の威力は大きかつた。軍船隊は分散破壊せられ、死者六十餘、負傷者二百餘を乗せて歸つて來た。目ぼしいキリスト教の敵が大勢死んだ。これでポルトガルの商船と平戸港との關係はきつぱりと絶えたのである。

福田の港へ來たポルトガル人の告解を聽きミサを行ふためには、豊後から神父フィゲイレドが

呼ばれ、ダルメイダに一足おかれて来た。丁度その頃に領主の大村純忠が、七歳位の長女の病氣をなほしに來てくれと頼んで寄越したので、ダルメイダは、畿内で多數の武士を教化したロレンソをつれて大村に赴いた。純忠は内亂勃發の一寸前にトルレスに會つて以來、二年の間、宣教師の誰にも會ふ機會がなかつた。その間彼は、キリスト教信者なるが故に、多くの攻撃を受け、それに堪へなくてはならなかつたのである。従つて彼の周圍において最も必要であつたのは、佛敎との對決においてキリスト敎の信仰を確立することであつた。この仕事はロレンソの最も得意とするところであつた。ダルメイダが純忠の女を治療してゐる間に、ロレンソは數回説教を行ひ、武士たちを感動せしめた。

ダルメイダは福田の港に引き返すと直ぐトルレスの命によつて口の津に歸り、そこから豊後へ派遣された。途中島原に寄つて「日本中での最も熱心なクリシタンたち」の面倒を見、豊後では府内のバウテイスタを助けて働き、臼杵の町に宣教師館を建てる世話をしたが、十月にはまた福田の港へ來た。

その間に純忠は福田の港へ神父フィゲイレドや船長ドン・ジョアン・ペレイラなどに會ひに來た。會堂で祈禱した後、船に行つて盛大な饗應を受けたが、ポルトガル人たちは非常に喜んで、

この領主のためにはどんな事でもしようと思し出た。キリスト敎のために戦ふ領主といふことで、彼は、ポルトガル人の同情と、さうして貿易とを、一手に集めたのである。

二 キリシタン武士たちの努力

一五六五年の十月にドン・ジョアン・ペレイラの船は福田港を去つた。そのあとでトルレスは、病氣療養のため平戸から福田へ呼び寄せてゐたカブラルをイルマンのバスと共に豊後に移し、クリスマス後にはフィゲイレドを島原に派遣した。フィゲイレドはまだ日本語が話せないので、堺の人パウロが彼を助けて一五六六年の四旬節・復活祭などを營むことになつた。告解をきくためには、口の津からトルレスが出向いて行つた。ダルメイダが基礎をつくり、フロイスが口を極めて賞讃した島原の教會は、かうして一時非常に隆盛になりかけたのである。(そのため翌一五六七年には烈しい反動を呼び起したのではあるが。)

有馬領の口の津や島原がかうしてキリスト敎化して行くのを見た大村純忠は、頻りに宣教師の大村派遣を懇請して來たが、トルレスはそれに應じなかつた。今はもう「手が足りない」からではない。敵地の平戸や、大村よりも新しい島原にさへ、神父を駐在せしめてゐる。しかも日本で

最初のキリシタン大名たる大村純忠の許へ宣教師を送らないのは、純忠の敵に謀叛の機会を與へないためだ、と説明された。従つてトルレスは、純忠が針尾地方を占領するまでは宣教師を送らない、と明白に答へた。針尾は横瀬浦の對岸の島で、平戸領に接し、トルレス暗殺の計畫を立てた勢力の根據地であつた。トルレスのこの態度を見た純忠は、さしづめの必要として家臣を三四人づつ次々に口の津へ洗禮を受けに寄越したが、問題の根本的解決をはかるためには、一五六六年の五月頃に、いよいよ針尾地方、従つて平戸の勢力に對して、戦端を開く決心をしたらしい。温厚なトルレスにも十字軍的な氣持はあつたのである。

平戸の領主やその配下の反キリスト教的な武士たちが、この形勢を察知してゐなかつた筈はない。しかし彼らの教會に對する態度は、上べに愛情を現はしつゝ、行ふ所において敵たることであつた。福田の港から教會に送られる食糧や器具の類はしばしば掠奪をうけ、掠奪された聖母像が潰されるといふやうな事件も起つた。それにつれてキリシタンの武士と反キリスト教的な武士との間の軋轢も起つた。もし宣教師が抑止しなかつたならば、ドン・アントニオ籠手田やその兄弟ドン・ジョアン一部などは、聖母への侮辱に報復するために、武器を取つて立つたであらう。しかし宣教師は、異教徒が數においてキリスト教徒に三倍すること、報復の行爲は異教徒に教會

破壊の口實を與へることを説いて、堅く手出しを止めた。反キリスト教側の武士たちも、會堂破壊、ドン・アントニオ襲撃などの計畫を立てたことがあつたが、キリシタンたちの決死の防衛態勢を見た領主たちは、同じやうに手出しを禁じた。さういふ仕方では漸く平戸の教會は、「平和のうち」に存立することが出来たのである。

一五六四年の秋、平戸の教會が回復される機會に渡來した神父のコスタは、日本語を學ぶ上に驚くべき進歩を示し、翌一五六五年のクリスマスの一月ほど前には、自分で告解をきゝうるほどになつた。告解の際の勤めは、トルレスよりもよく解るほどだとさへも云はれた。これは平戸や附近の島々の信者たちにとつては大きい出来事であつた。この地方で告解をきいたのはトルレスだけで、そのトルレスが口の津にゐるために、もう四年來告解が出来なかつた。あとの神父たちは、フロイスもカブラルも、告解をきくほどに日本語が出来なかつたのである。だからコスタが告解をきゝ始めると共に、島々の信者は沸き立つた。一五六六年の一月からは、生月島、度島、平戸西岸の村々を廻つて、告解をうけた。この地方の古馴染のフェルナンデスも一緒であつた。この巡回は島々の信仰を新しく活氣づけたが、その後四旬節から復活祭までの營みを平戸の會堂で行ふ際にも、これまでに見られなかつたやうな活氣が現はれた。教會回復以來、毎年の復活祭

は、敵のゐない度島へ行つて營んだのであるが、この年には異教徒の妨害に備へて武装警戒のもとに平戸で盛大に行つたのである。かうして平戸諸島には、この後のどんな迫害も根絶せしめ得なかつたやうな根強い信仰が育てられたのであつた。

三 ダルメイダの五島、天草及び長崎の開拓

この同じ年にトルレスは、ダルメイダをして二つの新しい土地を開拓せしめた。五島と天草とである。

一五六六年の初め、フィゲイレドが島原へ派遣されたと同じ時に、ダルメイダは五島へ派遣された。元琵琶法師のロレンソが同行した。この五島の開拓についてはダルメイダが詳細な報告(一五六六年十月二十日附志岐發)を書いてゐる。一人も信者のゐなかつたこの島で、彼は半年餘の間に、多くの信者と數ヶ所の會堂とを造り出したのである。

最初彼が島に着いたのは太陰曆の正月の前であつたが、やがて新年になり、島の重立つた武士たちが領主の許へ集まつて來た。(ダルメイダは領主の居所をオチカとしてゐる。しかし小値賀島ではなさうである。普通には今の福江港だとされてゐる。) それらは皆相當の教養を持つて

ゐた。そこで正月の十五日過ぎに、これらの武士たちに對して七日間説教をしたいといふことを申し出た。領主は、今空いてゐる舊邸を提供し、自分や夫人も聽聞する旨を告げた。翌日夕方その邸に行くと、大廣間に燈火を多く掲げ、四百の男子が列んでゐた。婦人たちは接續した他の室に控へてゐた。領主は上段の間にゐたが、そこへダルメイダやロレンソを請じた。座が靜まつたときダルメイダは、自分は日本語が十分でないから、ロレンソをして自分の考を述べさせる、と挨拶し、ロレンソに説教を始めさせた。その内容は宣教師が日本の各地で説いてゐることと變りはなかつたが、しかしその説き方が實に放膽・輕妙・明快で、聽衆を承服させずにはゐない力を持つてゐた。特に異教の立場との討論を一人でやつて見せたのが鮮やかであつた。かうしてロレンソは三時間の間聽衆を魅了した。その手際はダルメイダをも驚嘆させるほどのものであつた。領主も武士たちも非常な感銘を受け、續いて説教を聽かうといふ氣持で歸つて行つた。

このやうにすべり出しは好かつたのであるが、突然その翌日、領主は烈しい熱病にかゝつた。命も危ふいやうに見えた。佛僧たちはそれを佛罰だと云つた。武士たちの心に萌えた芽は直ぐ枯れさうになつた。しかし佛僧たちが病氣平癒のために大わらはになつてやつた大般若經の轉讀も効果はなかつた。三日目には病氣は一層重くなつた。この時ダルメイダは、領主は恢復する、こ

のまゝ、ほつて置けば大般若がきいたことになる、と考へた。そこで宿の主人である武士を介して、自分は薬を持つてゐるし醫療の経験もある。領主が脈をとり尿を驗することを許されるならば、病氣は癒せるであらう、と申し入れた。領主は喜んでダルメイダを招いた。翌日ダルメイダは領主を鄭重に診察し、解熱劑を與へた。薬はその日からき、始め、次の日にはよほど熱が下りた。ダルメイダはその心理的な効果に一層力を入れた。あとにはひどい頭痛が残り、夜間の往診を必要とするほどであつたが、この時には鎮痛劑催眠劑を與へた。領主は久しぶりで熟睡した。その心理的な効果もまた大きかつた。次の日往診したダルメイダは、領主の病の快癒したことを告げ、彼を救つたのが天地の造主であつて大般若經でないことを説いた。ダルメイダの宿には、領主から贈つた猪一頭、雉二羽、家鴨二羽、大きい鮮魚五尾、酒二樽、米一俵、その他領主夫人、庶子などの贈物が充滿した。ダルメイダはそれで以て領主の家臣數人を招き、領主の病氣平癒の祝宴を開いた。ダルメイダは勝つたのである。

しかし半月ほどの後、四旬節の初めに再び説教をはじめると、その二日目にまた突然火災が起り、同時に領主の指が腫れて痛み出した。指はダルメイダの薬で癒つたが、説教をきゝにくるものは殆んどなくなつた。たゞこの島に來てゐた博多の商人が二人、教をきいてキリシタンになつ

たことが、この地の人々の注意を引いた位のものであつた。

他方、醫者としてのダルメイダの信用は大したものであつた。領主はその伯母の病氣の治療をダルメイダに頼んだ。領主の娘・庶子・甥・弟なども彼の治療を受けた。これらの病人が簡単な薬で癒つたことは、ダルメイダ自身にも不思議に思はれるほどであつた。がそのお蔭で彼は領主やその家族親戚と非常に親しくなつた。領主は説教場に使つた邸宅を彼に與へると云ひ出した。

この現象は貿易のために熱心な平戸の領主がキリスト教を喜ばなかつたのと似たものである。だからダルメイダもまた、布教がうまく行かないならばこの地を去るほかはない、といふ態度を取ることになつた。島に來てから三ヶ月以上を経たとき、彼はトルレスからの使者が携へて來た大友宗麟の招きの書簡を見せて、領主たちに島を去る旨を告げた。領主は涙を流して引きとめたが、ダルメイダは長老の命令であるからと云つてきかなかつた。止むを得ず領主は家臣一同を招いて盛大な別宴を催した。が出發の前夜になつて領主は、二十歳になる一子と共にダルメイダを訪ねて來て、再び熱心に引きとめた。領主がダルメイダを招いて以來もう百日を超えてゐる。しかるに領内にはまだ一人のキリシタンも出來てゐない。かく無收穫でダルメイダが去ることになると、家臣たちは何と批評するであらう、と領主は云つた。これはダルメイダが云ひたかつたこ

となのである。それを領主から云はせて、ダルメイダは留まることに同意した。トルレスからの使者にその旨を復命して貰ひ、再度の指令の来るまで取り敢へず留まらうといふのであつた。

領主は非常に喜んで、ダルメイダの望む布教活動の支持に乗り出した。會堂の敷地を與へ、その建築を補助する。キリシタンとならうとする者には許可を與へる。異教の祭は強制しない。會堂に領地を附け、その収入を慈善事業に使はせる、などである。またトルレスに多くの贈物を届け、ダルメイダの五島滞在を懇請する手紙を書いた。領主の家族や町の人の喜びも非常なものであつた。やがて領主は五十人ほどの武士と共に説教をき、はじめた。ロレンソがまたその雄辯をふるつた。十四日の間説教は續いた。重臣など二十五人の武士が改宗を決意した。そこで更に二十日間の準備教育をして洗禮を授けることになつた。その途中で佛僧の妨害や平戸人との紛争が起つたが、それは二十五人の武士の決意を揺がしはしなかつた。そこでダルメイダは、最後に一夫一婦の條件を持ち出した。武士たちは大抵三四人の妻妾を有してゐたからである。武士たちはその條件をも容れて、妻一人を定めた。この事は領主の夫人を初め婦人連に非常に好評であつた。キリシタンとなつた者の妻は幸福である、と領主の夫人は云つた。かういふ準備のあとで、二十五人の武士は、出来る限り莊嚴な仕方洗禮を授けられたのである。

これを皮切りとして急激に布教の仕事は進んだ。領主の居所から一里半ほどの所(大津)では、寺を會堂に改造した。その近くの奥浦では、景色の好い岬の上に會堂の敷地を作り、ダルメイダの二十日間の滞在の間に百二十三人の受洗者を出した。やがてこの敷地には領主が美しい會堂を建ててくれたのである。それほどであるから、領主の居所オチカの町では、受洗希望者は續々として現はれて來た。領主は、ロレンソが最初説教した大きい邸をダルメイダに與へたが、ダルメイダがそれを利用しないのを見て、ダルメイダに希望の設計圖を引かせて會堂の建築にとりかゝつた。婦人や子供の教化はこの會堂の落成後に延ばさざるを得なかつた。

かうして五島の布教が順調に進み出したのは六七月の頃であつたが、間もなく平戸の領主の姻戚である武士が、五島の領主に叛いて兵を擧げた。キリシタン武士たちは勇敢に戦つて謀叛人たちを敗走させたが、平戸の領主はその姻戚を助けるために二百隻の軍船を派遣することになつた。沿岸の住民は食糧を携へて山城に籠つた。奥浦で病氣になつてゐたダルメイダも、命からかゝ峻険な山にのぼらざるを得なかつた。しかし幸にもドン・アントニオ籠手田の率ゐた平戸の大艦隊は、五島の端の島の海岸數ヶ村を焼いただけで、約一ヶ月の後にひき上げてしまつた。五島の領主は百隻の艦隊を派して平戸領の島に復讐した。

口の津のトルレスは、ダルメイダの病氣のことを聞き、恢復期を大事にするために歸還を命じた。あとにはロレンソが残ることになった。領主は非常に悲しんだが、やがてダルメイダが引き返してくるか、或は他の神父が来るといふ約束で承知し、色々の物資を携へてクリシタン一同と共に奥浦の港まで見送りに来た。

ダルメイダが暴風雨になやみながら福田の港につくと、そこにはポルトガル船が一隻着いて居り、近畿地方から久しぶりにひき上げて来たビレラが滞在してゐた。豊後から来たジョアン・カブラル——血を吐く病氣のために遂にこの秋日本を去らざるを得なかつたカブラル——も一緒にあつた。

ダルメイダはトルレスの許に二十日ほど留まつただけで、益過ぎにはまた天草島北端の志岐に派遣された。志岐の領主志岐鎮経は、有馬の領主と親しく、有馬義貞や大村純忠の弟に當る諸経を養子にしてゐたのである。諸経は上品なよい青年で、すでにダルメイダたちの注意をひいてゐた。ダルメイダは日本人イルマン・ベルショールをつれて志岐に行き、領主や諸経から非常に款待を受けた。直ぐ説教を所望されたが、大廣間は身分ある武士たちで一杯であつた。領主の前に

出ることの出来ない人々のためには、旅宿で説教を始めた。かうして説教を續けてゐるうちに、やがて領主はクリシタンにならうと考へ始めたが、大村領におけるやうな内亂を慮つて、祕密に洗禮を授けてくれないかと云つた。これはダルメイダが斷わつた。しかしこの懸念は家臣たちが續々クリシタンになつて行けばおのづから取り除かれるのであるから、家臣たちの改宗を促進することが雙方の關心事になつた。十月の中頃には洗禮を受けようと決心したものが五百人以上に達した。すべては順調であつた。十月の末には、遂に領主が、多くの身分ある武士たちと共に、洗禮を受けるに至つた。會堂の工事もほとんど出来上つた。

ダルメイダは福田の港に行く必要があつたので、代りにイルマンのサンチェズがやつて来た。やがて福田の港のポルトガル船がジョアン・カブラルを乗せて去つて了ふと、神父ビレラもまたダルメイダの開拓したこの土地へ收穫にやつて来た。彼の手で洗禮を受けた武士たちは非常に多かつた。やがてビレラは去つたが、サンチェズは一五六七年を通じてこの地に残り、附近のフロヤ樺島に布教すると共に、志岐の會堂の増築や信者の固めに盡力した。

かうして天草の志岐は、初めの内非常に調子が好かつた。で、一五六八年の初めに、老年のトルレスが口の津から志岐に赴いた。イルマン・バスを先發させて準備した上、志岐の有力な武士

たちの迎への船で、盛大な歓迎のうちに志岐に乗り込んだのである。さうしてこゝで四旬節や復活祭を營んで夏になると、シナからの船が神父アレキサンドロ・バラレッジョを福田の港へ運んで来た。トルレスはこの新來の神父を志岐で迎へた。その時にはダルメイダも來てゐたが、トルレスがイルマンたちや童男童女の合唱隊を率ゐ、ラテン語の讚美歌を唱ひながら出迎へたときは、バラレッジョは歡喜のあまり茫然としてしまつたといふ。會堂について信者たち一同と祈禱した時にも、このやうな遠隔の地で、イタリアにおいてさへ見られないものを見るといふ氣持がした。志岐の教會が短時日の間に急速に發達したことは、このバラレッジョの印象によつても察することが出来るであらう。

そこでトルレスは、この機會に、諸地方の神父やイルマンたちを志岐に招集し、日本におけるヤソ會の方針を協議することにした。口の津にはトルレスの去つたあとへビレラが來てゐた。五島にはダルメイダの去つたあとへバウティスタが行つてゐた。豊後にはフィゲイレドがゐた。平戸には引きつゞきコスタが滞在してゐたが、シャビエルに同伴して來た老年のフェルナンデスは前の年に靜かにこの地で世を去つた。それらの神父たちは一五六八年の八月に志岐に集合して會議を開いた。この時、一時的にもしろ、天草の志岐は日本布教の中心地となつたのである。日本

他の地方には、領主がキリシタンであつて、しかもそれを理由とする内亂が起つてゐない、といふ所は、どこにもなかつた。トルレスがこの事態をいかに重要視してゐたかが、この志岐會議に示されてゐるといつてよいであらう。

ダルメイダはいつも開拓者であつた。一五六七年には長崎を開拓した。長崎の領主は大村純忠の臣下で、既にキリシタンとなつてゐたが、ダルメイダはその領地に行つて多數の信者を作つたのである。勿論日本人のイルマンを伴つて行つたであらうし、その訪問も幾度か回を重ねた。一五六八年秋の報告によると、身分あるものは悉く信者になり、平民の間にも五百人の信者が出來た。附近の村々からも信者が長崎の會堂に集まつて來た。志岐會議の後、福田の港に行つてゐたビレラは、船が去つてから長崎に移つてその冬を過し、その間に三百人の信者を作つた。恐らくその頃にもう長崎の地が福田よりも良い港であることは知られてゐたであらう。ポルトガルの船はこの後もなほ二年ほど福田の港に來てゐるが、しかしビレラはこの冬即ち一五六八年の末以來ずつと長崎に住み込み、トドス・サントスを建てて、長崎繁榮の基礎を築いたのである。

四 トルレスの最後の活動——大村の會堂と北九州の政治的情勢

ビレラが長崎に住み込んだと同じ頃に、大村純忠の多年の望みが達せられ、大村にも會堂が出来た。日本最初のキリシタン大名は、改宗後五年半にして漸く自分の城下でミサを聴きクリスマスをお祝いすることができるようになつたのである。

純忠が二年前に熱心に宣教師の派遣を懇請したときには、トルレスは内亂の危険を口實として宣教師を送らなかつた。純忠はその領内の福田の港にポルトガル船が着き神父が來住する機會を捕へて、そこを訪れ、僅かにその渴望を癒すはかなかつた。しかし純忠は絶えずトルレスと聯絡をとり、その懇請をも續けてゐる。志岐會議に先だつこと三ヶ月の頃にも、彼はその子に洗禮を授けるためトルレスに大村へ來ることを懇請した。トルレスは大村の領内が平和に歸したことを認め、迎ひの船を送つて貰ひたいと答へたのである。しかしこの時には、志岐の領主が熱心に引きとめ、トルレスの提出した要求を承諾したりしたために、出發することができなかつた。やがて志岐會議が催されたが、その濟んだあとの九月に、口の津で腫物を病んでゐたダルメイダを見舞ふといふ口實のもとに、トルレスは志岐を出發した。口の津で半月餘を送つた後に、更に、

ポルトガル人の間の不和の調停のためといふ口實をもつて、彼は福田の港に赴いた。こゝでは帆船その他の船が祝砲を打つて迎へた。十日経たない内に純忠が福田へトルレスを訪ねて來た。着くと先づ會堂へ行つてミサを聴き、そのあとでトルレスに挨拶し、それからやつと宿へ入つた。その日の午後トルレスは七十人ほどのポルトガル人を連れて純忠を訪ねた。それから二日の間協議を重ね、トルレスは巡察のために大村へ行くといふことになつた。出發の準備をしてゐる間に近隣の領主たちや純忠の家臣らが盛んにトルレスを訪ねて來た。やがて十月五日にトルレスは五人のポルトガル人と日本人イルマンのダミヤン及びパウロを連れて大村に行つた。翌日一行は純忠の館で晚餐の饗應をうけ、そのあとでダミヤンが夫人たちに説教をした。やがて純忠は評議會を招集し、トルレスにこのまゝ大村滞在を懇請すること、會堂の敷地をトルレスに與へることなどを附議した。キリシタンであるものもないものも皆これに賛成し、彼らの意志としてトルレスに懇請して來た。トルレスが多年切望してゐたことは、今や向ふから轉げこんで來たのである。純忠はかなり広い地所を與へた。會堂の建築は早速始められた。それが出來上るまでトルレスは、その滞在中に家々でミサや説教を行つた。受洗者は續々と出で、三回で二百四十人ほどになつた。純忠もその子の洗禮を希望したが、トルレスは純忠夫人の歸教を重視してゐたので、母

親と共に授洗しようと云つて先へのばした。

會堂は一五六八年十二月の初めに出來上つた。そこで大村での最初のクリスマスが盛大に祝はれた。純忠はこの祭を盛大にするために、會堂の隣りの地に大きい舞臺を造り、周圍に多數の棧敷を設けて、二千人の公衆の前に宗教劇を演せしめた。純忠夫人も侍女たちを連れて大きい棧敷に來て居り、トルレスも二人の日本人イルマンやポルトガル人と共に他の棧敷にゐた。この時のトルレスの満足はほと推測することができる。彼が純忠をめぐって豊後から移つて來て以來、六年を経て、漸く、キリシタンを領主とする國の首府に、領主を信者の筆頭とする教會を作り上げたのである。

トルレスは、一五六九年から一五七〇年の復活祭の後まで大村に留まり、こゝで日本諸地方の布教の指揮をした。彼が二十年來目ざしてゐたことは、漸く緒についたと云つてよい。政治的權力を教會の下に置くといふ彼の企ては、大村では非常に成績がよかつた。武士たちが神父の命令を尙び服従したことは、一ポルトガル人をして世界中にその比がないと云はせたほどであるが(一五六九年八月十五日發、無名ポルトガル人書簡)、トルレスはその服従を異教との對立の克服に利用した。大村でポルトガル人の從僕が數人の佛僧に殺されたことがある。それを見た純忠の家臣たちは、猛然として殺さ

れたキリシタンのために復讐しようとした。トルレスは純忠に復讐をとめた。純忠は、自分の家臣たちが最早自分の命令を聞き得ない段階に達してゐることを述べ、トルレスに直接の命令を乞うた。トルレスは寺院の焼き討ち、僧侶殺戮に乗り出して行つた武士たちに、途中から引き返すを命じた。領主の命令に従はなかつた武士たちも、トルレスの命令には躊躇することなく従つた。世界中で最も復讐を重んずる武士たち、復讐をしないのは最大の恥辱であると考へてゐる武士たちに對して、トルレスは、復讐を抑止することが出來たのである。そのために大村では、新しい紛争を防止することが出來た。このことは未だ改宗してゐない有力な武士たちを非常に感動せしめた。争ひを挑發してゐるのは佛僧たちであつて、神父たちではない。神父は信頼するに足りる。かういふ印象の下に、キリスト教は反つて地歩を占めることが出來たのである。

トルレスは一五七〇年六月、新しく着いた神父フランシスコ・カブラルに長老の職を譲り、間もなく十月二日に志岐で歿した。七十一歳位であつた。だから大村での一年半はその最後の活動期なのであるが、丁度その時日本は政治的に新しい時期に入りつゝあつたのである。東の方では信長が京都に現はれた。九州では大友宗麟の勢力が非常にのび、北九州から毛利の勢力を追ひ拂つたのみならず肥前の龍造寺を壓迫して來た。それに應じてトルレスも、ダルメイダを使つて、

いろ／＼な手を打つてゐるのである。

天草島東側の本渡の城主天草氏は、志岐氏の三倍ほどの領地を支配してゐた。前から宣教師に關心を持ち、トルレスが初めて志岐に赴いた頃にはダルメイダを名指してその派遣を懇請して来たほどであつたが、大村に落ちついたトルレスは、一五六九年の初めにダルメイダをこの天草氏の許へ派遣した。ダルメイダはそこで開拓者としての辣腕をふるつた。領主の方でキリスト教への熱心を示して来なければ、彼は直ぐ立ち去らうとする態度を示すのである。領主はそれに釣られてあわてて布教の許可を與へたが、政治の實権が家臣の手に移つてゐることを見て取つたダルメイダは、先づ五ヶ條の條件を提出した。一、領内の布教を喜ぶ旨の城主等署名の文書、二、領主も家臣と共に八日間説教をきくこと、三、キリスト教をよしと認めた場合には子の一人をキリシタンとし、キリシタン武士の首領たらしめること、四、會堂の敷地を與へること、五、志岐との間の沿岸七里の住民にキリシタンとなる許可を與へること、などである。領主はこれを承認した。そこで、それまで靜かに形勢を觀望してゐたダルメイダは、二人の日本人イルマンと共に目ざましい活動をはじめた。先づ、全領の行政を握つてゐた家老のドン・レアンが家人ら約五十人と共に洗禮を受ける。次でその外舅が同じく五十人ほどと共に洗禮をうける。他にも重臣數人が

それに續く。更にダルメイダはドン・レアンの援助をうけて村々を巡り、そこにも四百人ほどの信者を作つた。かうして僅か二ヶ月ほどの間に全領内が動き出したやうに見えた。

その形勢は直ぐに政治的な分裂をひき起した。佛僧たちの働きかけて、領主の兄弟が先頭に立ち、有力な武士たちを集めて、ドン・レアンの排斥運動を企てたのである。一夜、一味の武士たち七百人が寺院に集合し、ドン・レアンの家を襲撃しようとした。出發に先立ち領主にこの擧の承認を求めたが、領主は承認を拒んだ。レアンを殺すのは領主を殺すも同様であると答へた。さうしてレアンの許に急を傳へた。キリシタンの武士たちは續々レアンの家に集まり、その手につくものは六百人に達した。一人の重立つた佛僧が、領主やレアンに説いて廻つた。レアンに對しては、キリスト教を捨てよ、然らずばこの地を立ち去れと要求した。レアンは、たゞ領主の命令にのみ従ふ旨を答へた。領主は遂に口説き落されて、平和のため暫らくこの地を去れ、とレアンに命じた。レアンは止むを得ず妻子及び家臣約五十人と共に船に乗つて口の津に赴いた。

この出來事は五月に起つたが、ダルメイダは八月まで天草に留まつて教勢の回復に努めた。先づ第一に彼は大友宗麟に依頼して、キリスト教の弘布を希望する書簡を天草の領主に送つて貰つた。當時肥前の龍造寺を壓迫してゐた宗麟の睨みは、天草へは十分に利いたのである。領主はこ

の書簡を家臣たちに示し、ダルメイダの布教活動を繼續させた。すると反動側は三人の有力な領主を動かし、天草の領主に對してキリスト教排斥を申し入れさせた。領主は一時それに屈せざるを得ない所以をダルメイダに説明し、暫らく隱忍することを求めた。そこでダルメイダは、領主と協約を結び、大村のトルレスの許へ歸つて行つた。その協約は、ダルメイダが再び天草領へ來た時、領主の長子と二人の重臣とをキリシタンにすること、ダルメイダの選んだ十六ヶ村をキリシタン村としてダルメイダに託することなどであつた。

ダルメイダの去つた後、天草領内の内亂は激化した。領主は一時一つの城に籠つて僅かに生命を全うし得たほどであつたが、やがてもり返し、謀叛した兄弟を他の城で包圍するに至つた。その間にダルメイダの斡旋によつて得た大友宗麟の助力が相當に利いたらしい。翌一五七〇年の二月には、ダルメイダはトルレスの命によつて宗麟を筑紫國境の日田に訪ね、九通の書簡を認めて貰つたのであるが、その内の三通は天草の領主に關するものであつた。一は島津氏宛の書簡で天草の叛亂軍を後援しないやうに頼んだもの、二は宗麟配下の一領主に宛てた書簡で、天草の領主を助け内亂鎮定に努めるやう依頼したもの、三は天草の領主宛の書簡で、領地を悉く回復するまで援助を約したものである。かういふ助力によつて遂にキリスト教排斥派を鎮定し得た天草の領

主は、やがて新來のカブラルの手によつて受洗するに至つた。かうして有名なキリシタン地方天草領は、トルレスの最後の仕事のひとつとして、ダルメイダによつて開拓されたのである。

しかしトルレスが大友宗麟の勢力を利用したのは、天草領についてのみではなかつた。宗麟の北九州制覇が都合よく進み、毛利の軍勢を北九州から追ひ拂つたのは、一五六九年の夏から秋にかけて半年に亘る大仕事であつたが、この際逸早く山口の教會の回復を思つたのはトルレスであつた。彼は一五六九年の十一月にダルメイダをして日田の陣營に大友宗麟を訪ねしめ、天草布教に對する援助を謝すると共に、また「山口の正統の領主たるチロヒロ」との聯絡のことを相談せしめてゐる。ダルメイダはその足でチロヒロの陣營を訪ねた。チロヒロは毛利勢が筑紫に進撃してゐる隙をねらつて山口領を襲撃しようとして企ててゐたし、その部下には山口のキリシタン武士がゐたのである。彼はダルメイダの要求に應じ、山口を回復したならば領民をキリスト教徒たらしめるであらう、といふトルレス宛の返書を認めた。このチロヒロの山口領襲撃は、大友宗麟が大内、四郎左衛門輝弘をして軍勢空虚の長府あたりを奇襲せしめた事件を指すのであらう。博多東方の立花山に陣してゐた毛利の大軍は、この奇襲に驚いて北九州を引き上げたのである。

毛利勢が立ち去つたあと、大友宗麟の壓力が西方へ加はつてくるのを見て、大村純忠は幾分の

危険を感じ、トルレスに頼んで大友氏との親交を斡旋して貰った。宗麟はトルレスの申し出に對しては何事によらず拒絶したことがないので、この時にも大村氏や有馬氏が毛利氏に好意を寄せてゐた過去のことを不問に附し、トルレスの意に従つた。今やトルレスは大名の運命を左右する地位に立つこととなつたのである。

しかし一五七〇年五月頃、宗麟の軍隊が肥前の龍造寺の領地に迫つたときには、大村純忠は落ちついてはゐられなかつた。大村は飛ばつちりを受けるかも知れないといふので、純忠はトルレスに長崎の會堂へ移ることを請うた。大村にはダルメイダが残つた。が半月の後にはトルレスはダルメイダを呼んで、宗麟及びその部將の陣營へ派遣した。戦争の際に會堂や信者を保護するやう頼むためであつた。

ダルメイダは、多分久留米附近にゐたと思はれる宗麟を訪ねて來意をのべたが、宗麟は心配するに及ばぬといふ親切な返書をトルレス宛に書いた。さうして彼の部將たちを訪ねるといふダルメイダにいろ／＼の保護を與へた。ダルメイダは陣營で主將に會つて款待をうけ、大村純忠のため大いに辯じた。會堂の保護はどの部將もひきうけてくれた。

さういふ形勢のため中へ、フランシスコ・カブラルが、日本のヤソ會士たちの長老として赴任

して來たのである。カブラルは六月に志岐で第二回の會議を召集した。京都のフロイスを除いてすべての神父が集まつた。日本における布教活動の指揮はこの時からカブラルの手に移つたのである。

第八章 ルイス・フロイス―和田惟政―織田信長

一 フロイス信長に會ふ

天草の島でトルレスが志岐會議を催してから間もなく、一五六八年の秋に、織田信長は足利義輝の弟義昭を擁して上京して來た。松永久秀は立ちどころに彼に降つた。三好黨や篠原長房の擁立した將軍足利義榮は、阿波に逃れて死んだ。京都をめぐる覇權競争は、こゝで急激に面目を改めたのである。

足利義昭は、三好松永のクーデターの當時、奈良興福寺の一乘院主であつた。三好黨は早速彼を幽閉した。それを祕かに救ひ出し、還俗せしめ、結局信長と結ぶに至らしめたのは、長岡藤孝（細川幽齋）、和田秀盛、明智光秀などの働きである。これらの人々は室町時代の高貴な傳統を守らうとしたのであつて、成り上り者である信長に奉仕しようとしたのではなかつたが、結果においては、彼らの利用した新興の勢力に逆に利用せられることとなつたのである。

フロイスが信長に渡りをつけたのは、この義昭側近の勢力を通じてである。その中で長岡藤孝や明智光秀が當時どういふ態度を取つてゐたかは明かでないが、後に有名となつた細川ガラシャ夫人が明智光秀の娘、長岡藤孝の嫁であることを考へると、滿更無關心であつたとも思へない。特に關係の深いのは和田秀盛の一族和田惟政である。惟政は藤孝などと共に義昭に従つて將軍守り立ての努力をした一人であるが、その親しくしてゐた（或は兄弟であつたともいはれてゐる）高山圖書頭ダリヨが畿内キリシタン武士の先驅者であつた關係から、かねてキリシタンに深い同情を持つてゐた。信長の上京後は攝津大和の平定に功を立て、京都の南の押へとして高槻の側の芥川城、ついで高槻城の城主となつた。フロイスはこの惟政に働きかけたのであるが、キリシタンでない領主のうちでこの惟政ほど衷心の愛情を以てキリスト教の保護に盡してくれた人はほかにないといふ彼は云つてゐる。

この惟政の盡力で、信長の二度目の上京の時に、フロイスの歸京が許された。一五六九年三月末、惟政の命により、高山ダリヨが堺まで迎への人馬を寄越したのである。フロイスの一行は途中高槻近くで高山ダリヨに迎へられ、高山の守つてゐる芥川城にも一泊して、三月二十八日に、信者たちの盛大な出迎へを受けつゝ、五年ぶりで京都に入つた。この期間に九州へ行つて活躍し

て来た元琵琶法師のロレンソも、ベルシヨール、アントニオ、コスモなどの日本人イルマンと共にフロイスに従つてゐた。

京都では、このフロイスの入京の二週間前(永祿十二年二月廿七日)に、信長が二條城築造の鍬初めをやり、その後恐ろしい勢でその大土木工事が進行しつゝあつた。何故信長が急激にこの工事を始めたかといふと、前年の末に信長が岐阜に引き上げて行つたその留守をねらつて、正月早々三好三人衆が京都を奇襲し、一時新將軍を危地に陥れたからである。この時には將軍側近の長岡藤孝らの守備や和田惟政らの來援で、辛うじて三好黨を潰走させることが出来たが、しかし京都の防備の弱いことは露骨に曝露された。信長は即座に上京して来て、これまで永い間どの武將も企てなかつた京都築城のことを考へ出したのである。しかもその城は、當時盛んに行はれてゐた山城やましろとは異なり、平地の京都市中に、深い壕や堅固な城壁を以て、山城やましろ以上に防備嚴重に築いたものであつた。フロイスの言葉でいふと、それは「日本において曾て見たことのない石造」であつた。信長はこの大土木工事のために近畿十四ヶ國の諸將を動員し、彼らをして部下の武士たちや人足を率ゐて勞役せしめた。總指揮者は信長自身で、日々工事場に臨んだ。通例は二萬五千人、少ない日でも一萬五千人の人々が彼の指揮の下に動いた。鐘の合圖で、諸方の領主や武士たちが、各々そ

の部下を率ゐ、鍬を携へ手車を押して集まつてくる。さうして堀を掘り土を運ぶ。石垣の工事のためには多量な石が必要であるから、或は近郊の山から運び、或は市中から集めてくる。或る領主は部下を率ゐて寺々を廻り、毎日一定數の石をそこから運び出した。石の佛像や臺座の石などもばら／＼にして車に積まれた。時には石像の頸に繩をつけて工事場に引いて行くといふやうなことも行はれた。さういふ石で積み上げられたのが、高さ七八間、厚さもまた七八間、時には十間に及ぶやうな、巨大な城壁である。フロイスはこの光景を見て、ソロモン王の「エルサレムの殿堂」の建築や「デイドのカルタゴ都市建築工事」などを連想してゐる。

普通ならば四五年はかゝるであらうと思はれるこの大工事を、信長は七十日間に仕上げた。それはフロイスにとつては非常な驚きであつた。彼がこゝに何か新しい時期の開始を豫感したことは、彼の信長に對する熱心な働きかけによつても察することができる。この豫感はやがて信長の猛烈な佛教破壊によつて充たされるのである。

しかし信長への接近は初めは容易ではなかつた。フロイスの入京を聞くと、松永久秀はフロイスに先んじて信長を訪ね、キリシタンの神父のゐる所には必ず擾亂や破壊が起るといふことを理由にして、その追放を懇願した。それに對して信長は、かういふ大きな町でたゞ一人の人が擾亂

の原因になるなどは、お前の膽は小さい、と答へた、といはれる。しかし入京の翌々日、フロイスが城へ信長を訪ねて行つた時には、信長は會はなかつた。その理由は、數千里の遠方から来た外國人にどういふ禮儀で接してよいか解らぬといふことと、密かに面會すれば神父が信長に洗禮を授けに來たなどと心配するものがあるだらうといふこととであつた。つまり彼はキリスト教排斥運動を顧慮してゐたのである。内裏から出た宣教師追放令はまだ取り消されてはゐなかつた。排斥派はそれを據り所にした。フロイスが信長を訪問すると、すぐその夜には、内裏から將軍に對して宣教師追放を信長に命令せよといふ交渉があつた、といふ噂がひろまつた。翌々日の早朝には、内裏の使がフロイスのゐる信者の家を壊しにくると注進する人があつた。フロイスは早速ロレンソを和田、佐久間、高山などの許に使にやり、自分は他の信者の家に逃れて一日中潜伏してゐた。信長が宣教師に會はなかつたといふことだけで、これだけの不安があつたのである。

この不安は和田や佐久間の保證で取り除かれ、フロイスは初めの信者の家へ歸つて復活祭の週のさまじい祭儀を行つた。さうして復活祭の一週間後、入京してから二十日目に、初めて足利將軍を六條の本國寺に訪ねた。この訪問は和田惟政の斡旋で信長の指圖により行はれたものであつたが、將軍は面會しなかつた。このやうに信長も義昭も神父を引見しないといふことはキリシ

タンにとつては相當の打撃であつたので、惟政はその面目にかけて信長を動かさうと努めた。その結果、將軍訪問の數日後に、惟政は信長の承諾を取りつけ、突然騎馬の士二三十人を率ゐてフロイスを迎ひに來た。信長は平生通り工事の指揮をしてゐたのであつて、遠來の客を迎へる態勢を取つてはゐなかつた。フロイスが乗物で工事場に着いた時には、信長は堀の橋の上に立ち、附近で六七千の人が働いてゐた。工事はすでに半ばは出來てゐたのである。フロイスたちが遠くから敬禮すると、信長は自分の側へ招き寄せた。かうして信長とフロイスとの最初の會見は、この未曾有の大工事の見渡せる橋の上で、衆人環視の中（まじ）に行はれたのである。

信長が最初に知らうとしたのは、この珍らしい外國人の身の上であつた。それはフロイスにとつては重要でない前置（まえ）に過ぎなかつたが、信長にとつてはさうでなかつたらしい。非常に遠い國から、親を離れ、艱難を冒して、布教のためにこの國に來てゐる心境、――そこにいはばヨーロッパ文化の尖端があつたのであるが、それを彼は捕へようとした。フロイスにとつて本論である布教の問題も、信長はこの視點から見てゐた。キリスト教が擴がらなければインドへ歸る氣か、といふ問もそこから出たのである。フロイスはそれに對して、信者がたゞ一人になつても、神父一人は生涯この地に留まるであらうと答へた。次で信長は、キリスト教が京都で榮えないのは何

故であるか、ときいた。それに對してロレンソは、稻を育てるには田の草取りをしなくてはなりません、といふ風に答へ、佛僧たちの迫害を示唆した。信長はそれに和して僧侶の墮落を長々と語り、坊主らは欲と色に目がくれてゐると云つた。その機會に、フロイスは、ロレンソをして次のやうな意見を述べさせた。宣教師たちの目ざすところは、名・富・好評、その他いかなる世俗的なものでもなく、たゞキリスト教を擴めることだけである。就てはこの教と日本の宗旨とを比較するために、佛敎各派の最も優れた學僧を集め、信長の前でキリスト教との討論をやらせて頂きたい。もし負けたらば、追放されてよい。もし勝つたならば、佛僧たちにもキリスト教を聽かせることにしてほしい。さうでないといつても陰謀が絶えないであらう、といふのであつた。信長はこれ聞いて愉快さうに笑ひ、なるほど大國には大膽な學者が出ると云つた。さうしてフロイスに向ひ、日本の學者が承知するかどうか解らぬが、或はさういふ催しをするかも知れぬ、と答へた。フロイスの最大の用件、信長の布敎免許狀については、明答は得られなかつたらしい。フロイスはこの免許狀が宣教師に對する最大の恩惠であること、この恩惠によつて彼の美名がキリスト敎國民の間に知れ渡つて行くであらうことを説いた。それに對して信長は愉快さうな顔をしたが、何も云はなかつた。

この會談は一時間半乃至二時間位かゝつた。そのあとで信長は和田惟政に工事場の案内を命じた。この工事が彼の心を占領してゐたことはこの時の彼のそぶりにあり／＼と現はれてゐた。

信長がフロイスに會つたので、將軍も二日後に彼を引見した。しかし布敎免許狀の方はさうすらすらとは運ばなかつた。それを心配した信者たちは、信長への獻金の必要があるのではないかと考へた。何故なら堺の町、大坂の町をはじめ、諸方の寺院などは、信長の簡単な免許狀を得るために巨額の金を獻じてゐたからである。そこで信者たちは銀三本を和田惟政の所へ持つて行つた。惟政はそれに銀七本を加へ、信長の機嫌の好い折をねらつて、貧しい神父からの贈物として獻じた。信長は笑つてそれを斥けた。神父から金銀などを受ける必要はない。神父は外國人だから、免許狀のためにそんなものを受けたとあつては聞えが悪い。そんなことをしなくとも免許狀は與へる。汝が文案を作り、神父にこれでよいかと念を押した上、持つて來るがよい。署名してやらう。さう信長は云つた。工事に氣を取られてゐた信長は、文案が面倒なのでついほつて置いたのである。

さう解ると和田惟政は迅速に事を處理した。信長の朱印狀は、神父の京都居住許可、會堂に對する徵發や公課の免除、領内における保護などを表明したものであつた。日附は永祿十二年四月

八日(一五六九年四月二十四日)である。惟政はこの免許状を高山ダリヨに持たせて寄越し、翌日御禮言上のためフロイスを同伴して信長の許に行つた。信長は相變らず工事場にゐて上機嫌であつた。さうしてまた惟政に命じて工事を見物させた。惟政は城内を案内して歩きながら、フロイスに信長の扱ひ方を教へた。この建築の壯麗なことをお讃めなさい、また免許状の譯文をインドやポルトガルへ送つて信長の恩寵を知らせるとお云ひなさい、といふのであつた。フロイスは惟政の親切を感謝し、キリシタンになることを勧めた。惟政は笑ひながら、心中はキリシタンである、信長が岐阜へ歸つたら教を聴く暇が出来るであらうと云つた。

將軍義昭の免許状は一週間遅れて手に入つた。それも惟政の盡力であつた。惟政はまた目覺時計を信長に見せるためにフロイスを連れて行つた。この三回目の會見は室内においてであつた。信長は時計を見て驚いたが、構造が複雑で、自分が持つてゐても使へない、と云つて受けなかつた。さうしてフロイスに茶を振舞ひ、美濃の干柿を與へた。この時も二時間ほど話したが、信長は頻りに「ヨ、ロ、ツ、バ、ヤ、イ、ン、ド」のことを知らうとした。さうして別れ際に、近々尾張へ歸るから出發前にもう一度來るがよい、その時は將軍訪問の時に着てゐたポルトガル風の衣服を着けて來て貰ひたいと云つた。それはオルムズの緞子で作つた短い大型の雨外套に金襴の裝飾を附けたもの

及び黒頭布なのであつた。

二 フロイスと朝山日乗との衝突

その出發の前日、一五六九年五月六日(永祿十二年四月二十日)フロイスは、ロレンソたちを伴ひ、シナの大型紅紙一束、蠟燭一包を携へて、別れの挨拶に信長を訪ねた。時は夕方、面會を求め人々が大勢待つてゐたが、彼の來たことをきくと信長は直ちに引見し、彼の差出した蠟燭みづかに自ら火を點じて手に持ちながら、例のポルトガル服はどうしたとたづねた。フロイスはかういふ待遇を豫期せず、その服を着てはゐなかつたが、念のために持參してはゐた。信長は自分の面前でそれをフロイスに着させ、頻りに眺め入つてその形を讚めた。さうして、出發前の多用なるを顧慮して辭去しようとするフロイスを、強ひて引き留めた。

この席でフロイスは、朝山日乗と衝突したのである。この日乗といふ人物は、法華宗の日乗上人といふふうふうに傳へられてゐるが、法華宗の僧であつたかどうかは明かでない。しかし非常な山師で、珍らしい雄辯家であつたことは、確からしい。もと出雲の豪族で備後に領地を持つてゐたが、戦亂の間に領地を失ひ諸國を流浪して歩いた。フロイスによると、尼子に叛いて山口の毛利

に頼つた時には、彼は、釋迦の示現により佛教改革・皇室復興の使徒として活動してゐた。八九年前京都で買つた金襴の布を、内裏から拜領の衣と稱し、小片に切つて、多額の寄附をなしたものに與へる、などといふこともやつてゐた。それによつて彼は山口に寺院を建築し得たほどである。その後毛利氏と松永彈正との間の聯絡を計らうとして東上したが、三好三人衆の手に捕へられ、篠原長房の裁斷で西の宮の獄に投せられた。しかるに彼は巧みに内裏との聯絡をとり、内裏から彼の赦免を求めるといふことになつた。日乗上人の號は後奈良天皇の勅によると傳へられてゐるし、彼が皇室復興を標榜したことなどを考へ合はせると、朝廷との關係は相當深かつたらしい。丁度そこへ信長が上京して、最初に企てたのが内裏の修造や供御の復興であつた。日乗のためには機が熟して來たのである。彼は信長と朝廷との間の仲介者として立つた。この地位と、さうしてそのした、かな才能とが、信長をして彼を重んぜしめたのであつた。

その日乗は、前の日に信長を訪ね、出發前に宣教師を追放せよと頻りに口説いた。宣教師追放令は五年前に朝廷から出たのであるから、日乗がかく主張する根據はあつたのである。しかし日乗はさういふ法律論を持ち出したわけではなく、たゞ當時の極まり文句として、宣教師の到る處擾亂と破壊ありといふことを理由とした。信長はその心の狭さを笑ひ、既に免許狀を與へたのだ

から追放は出來ない、ときつぱり答へた。これは實質的には五年前の女房奉書の效力などは認めないといふ態度の表明でもあつたのである。このいきさつは和田惟政からロレンソを通じてフロイスに知らせてあつた。そこで、信長に引き留められたフロイスは、日乗が直ぐそばにゐるとも知らずに、信長に向つて、坊主らの反對意見をそのまま、信じないで貰ひたいこと、信長出發後は和田惟政に神父保護を託してほしいことなどを頼んだ。信長は、坊主らは何故キリスト教を嫌ふのかときいた。それに對してはロレンソが、兩者は熱と寒、徳と不徳とのやうに相違すると答へた。信長は再び、汝らは神佛を尊ぶかときいた。その答は、神とか佛とかと云はれてゐるのは皆我々と同じ人である、人類を救ひ得るものではない、従つて尊崇することはできぬ、といふのであつた。この時に信長は、日乗上人の名を呼んで、この答には何か意見があるだらう、何か質問するがよいと云つた。それで初めてフロイスやロレンソは日乗がそばにゐることを知つたのである。日乗は氣取つた態度で、それでは汝らの崇拜するのは何であるかときいた。答は、三位一體のデウス、天地の造り主、であつた。「ではそれを見せて貰はう。」「見ることは出來ない。」「釋迦や阿彌陀よりも前にあつたのか。」「勿論前である。始めなく終りなく永遠のものである。」「さういふ問答のあとでロレンソがその意味を詳しく述べ始めたが、日乗は一向に理解が出來ないらし

く、これは亂暴だ、民衆を瞞すものだ、早速彼らを追放すべきであると云つた。信長は笑つて、気が弱いではないか、解らない所をもつと質問するがよい、と云つたが、日乗はもう言葉が出せなかつた。でロレンソが逆に、生命を作つたのは誰であるか、御存じかとたづねた。日乗は知らないと答へた。次々にロレンソが色々な問をかけたが、答はいつも、知らない、であつた。そんな問題はそつちで説明して見ろ、と云つて威壓するやうな態度を取つた。ロレンソは平然として詳しい説明を展開した。日乗は、そのデウスは禪宗の本分と同じだな、と云つた。その言葉を捉へてロレンソはまた兩者の相違を明晰に論じ立てた。さういふ風にして議論はもう二時間位に互つてゐた。日乗はよほどむか／＼して來たらしく、もう遅い、彼らは追放すべきである、彼らが京都にゐたために前の將軍は殺されたのだが、その彼らがまた京都に來てゐるのだ、と云つた。しかし、「信長は元來神も佛も尊敬しないのであるから、さういふことは氣にかけず、日乗に對して厳しい顔を向けた。」フロイスがこの報告を書いたのは一五六九年六月一日(永祿十二年五月十七日)であるから、信長はまだ佛教に對する強硬政策を始めてはゐなかつたのであるが、しかしフロイスの眼にはもうはつきりとその態度が映つてゐたのである。

が日乗はそれだけで凹んではゐなかつた。一層大きい衝突は、靈魂不滅の問題に關して起つた。

そのきつかけとなつたのは、デウスは善を賞し惡を罰するか、といふ信長の問である。それに對してロレンソが、勿論である、しかし賞罰には現世におけるものと來世における永遠のものがある、と答へると、日乗は、來世において賞罰を受ける當體、即ち不滅なるものの存在といふ考を、大聲をあげて笑つた。そこで、病中のため疲れて來たロレンソに代つて、フロイス自身が日乗との間に靈魂不滅の議論を始めたのである。來世の信仰や靈魂不滅の思想が當時の佛教徒の間になかつたといふことは甚だ理解し難いことであるが、しかし佛教哲學の空の原理から云へばそれらを否定する方が正しいであらう。その否定の主張に對してフロイスは、肉體と獨立な靈魂の存在をいろ／＼な點から證明しようとした。この落ちついた議論をきいてゐるうちに、日乗は、色を變じ、齒を鳴らし、不思議な狂暴さを現はして、よし、それでは汝の弟子(ロレンソ)の首を斬るから、靈魂の存在することを示せ、と云ひながら、室の一隅に立ててあつた信長の長刀に走り寄つて、それを抜かうとした。信長は急ぎ起つてうしろから抑へ、和田、佐久間その他大身たちが他方から抑へて、長刀をもぎ取つた。信長は笑ひながら、予の面前において甚だ無禮ではないか、もとへ坐れ、と云つた。他の大身たちも彼の無禮を責めた。和田惟政の如きは、信長の前でなければ斬り捨てる所だと云つた。やがて座が鎮まつたとき、フロイスは信長に向つて、

日乗上人の亂暴は予の挑發したものである、予はたゞ眞理を説いただけである、と云つた。日乗はまたかつとしてフロイスを突き飛ばした。信長はまた厳しく彼をたしなめたが、彼はひるまず、キリスト教を罵つて、宣教師追放を主張し續けた。

以上はフロイスの記述によつたものであるから、朝山日乗の態度には同情すべき餘地がない。がそれにもかゝらず、信長は日乗の亂暴を大目に見てゐるのである。當時フロイスの聞いたところでは、信長のこの態度は「内裏のため」であつた。彼は前日内裏の工事のための獻金を日乗に託した。が何のためであるにしろ、彼はキリスト教排斥の主張を禁壓しようとはしなかつた。即ちキリスト教にも反キリスト教にも同じやうに自由を與へようとしたのである。だから彼は日乗の亂暴を寛恕すると共に、フロイスには親切な態度で別辭を述べ、またゆつくり聞かせて貰はうと云つた。さうして翌日、途中まで見送つた和田惟政に、安心してゐるがよい、といふフロイスへの傳言を託したのであつた。

三 追放綸旨の效力問題——日乗と惟政との對立

しかし信長が京都にゐなくなると、日乗のキリスト教排斥は急激に力を得て來た。フロイスの報告によると、信長出發後五日目の五月十二日に、古いキリシタンの結城山城守がロレンソを通じて最初の情報を傳へたといはれる。日乗が宣教師追放の新しい綸旨を得て將軍にその實行を迫らうとしてゐる、神父は急いでその備へをしなくてはならない、といふのである。この情報と殆んど同時に、ベルシヨールもまた別口の噂をもたらし外から歸つて來た。それによると、日乗は内裏の庇護の下に武装兵を率ゐて神父を襲ひ、キリシタンを皆殺しにしようとしてゐる、といふのであつた。この五月十二日(永祿十二年四月二十五日)に、何か綸旨が出たことは事實であるらしい。御湯殿上記に「四月二十五日はてれん、けふりんしいたされて、むろまちとのへ申され候」とあるのがその證據である。しかしこれだけでは綸旨の内容が明かでなく、従つて學者によつては布教許可の沙汰であつたと解する人もある。信長の布教許可の十七日後、將軍のその十日後に、それと全然反對の追放の綸旨が出たとは考へにくいのである。しかしフロイスに傳はつて來たところはまさに右の通りであつた。

フロイスは和田惟政の所へロレンソを急派してこの情報を傳へた。惟政の答は、實否を質しては見るが、自分の保護を信賴してゐてよい、といふのであつた。そこで惟政が聞き合はせて見ると、その日日乗は一人の公家と共に將軍を訪ね、「内裏が京都より追放した神父は、京都へ歸つて

來てゐる。彼は日本の諸々の敵の敵であるから、その追放を命ずべきである」と申入れた。それに對して將軍は、「朝廷は人の入市とか追放とかに關與せらるべきでない。それは自分の行ふべきことである。自分はすでに宣教師に免許狀を與へた。信長もそれを與へた。今更追放すべき理由はない」といふ旨を答へた、といふことであつた。して見ると日乗が奉じたといふ綸旨は、五年前の追放綸旨が守られないことに對する抗議であつたのかも知れない。

翌日、城の工事を巡視してゐた惟政の所へロレンソが様子を見、に行く、惟政は將軍の態度を傳へた後、午後フロイスが將軍と信長の免許狀を持つて城へ來るやうにと頼んだ。その午後日乗はまた公家と共に將軍を訪ね、信長に對して免許取消しを求める急使を出して貰ひたいと交渉したが、將軍は應じなかつた。その公家が、フロイスの着いたときにまだ残つてゐた。惟政はフロイスの面前で、その公家に對し、次のやうなことを云ひ切つた。自分は今日まで内裏のためいろいろ盡して來た。將軍や信長と交渉して御爲を計つたことも少くない。その報償として自分は神父への免許狀のほか何事も望まなかつた。しかるにその免許狀を與へないのみか、神父の追放を命ずるといふのは、自分の名譽を奪ひ、不正を行ふものである。もしさういふことを決定せられるならば、自分は内裏に仕へることをやめる。公家を庇護することもやめる。神父に對す

る將軍や信長の態度は、この免許狀の通りである。かう云つて惟政は、フロイスの持つて行つた免許狀を、眼の前で寫させて公家に渡した。このいきさつもまた、決定的な追放命令が新しく朝廷から出たのでないことを示すものであらう。

この日將軍はフロイスを引見しようとせず、たゞ人をして、自分が庇護してゐるから内裏のことは心配しなくてよいと云はせた。しかし惟政は、この際將軍が會はないのは拙いと考へ、目覺時計を種に使つて、フロイスを將軍の前へひき出した。將軍は時計を見て非常に喜び、ヨーロッパ人の工夫と才智とを讚めた。

以上によつて察すると、日乗がふりがざしてゐたのは五年前の追放の綸旨であり、また綸旨の方が武將たちの免許狀よりも重いといふ主張であつたらしい。だからこの後も、日乗が綸旨を奉じて宣教師を追放或は誅殺するといふ噂は世間に絶えなかつた。で惟政は多數の兵士を會堂に派遣し、日乗の策動を武力で押へるといふ態勢を示して、噂を消さうとした。半月位は平靜になり教會もその平常の活動を始めた。

日乗の方では、皇居修復の仕事や京都の經濟復興などに辣腕をふるひ、信長の信用を深めたのに乘じて、執拗に宣教師問題を信長に交渉し、遂に宣教師の追放に關しては内裏に一任するとい

ふ返書を書かしめるに至つた。これは日乗の方からいへば五年前の追放綸旨を有効に実施させるといふ意味になるであらうが、信長の方ではこれから決定する問題だと考へてゐたのであらう。この交渉の顛末を知つた惟政は、公家たちの書類を受理しないと云ふ態度で對抗した。さうして三日の間公家たちと折衝した結果、彼は云つた、「日乗の所行は公家たちの所爲であると認められる。もし内裏が宣教師追放を決定するならば、山城攝津の守護の地位を捨てても神父の保護を續けるであらう」と。

かうして日乗と惟政との對立が尖鋭化して來た五月の末に、惟政は攝津の諸城の巡視に出かけた。日乗はこの惟政の不在に乗じて事を起すであらう、といふ噂が立ち、キリシタンたちは危険の身に迫るのを感じた。フロイスはロレンソをして惟政のあとを追はせた。ロレンソは高槻の城で惟政に會つて、二通の書簡を書いて貰つた。一は將軍側近の三人の重臣にあてて神父の保護を依頼したもの、他は日乗にあてて妄動を封じたものである。後者には、「神父は將軍と信長との免許狀を得て京都に居住してゐる。その神父を追放しようとする動きがあると聞き、公家をして内裏の意向を伺はせたところ、内裏の方では何事もないとの返事であつた。内裏以外の方面の動きであるならば、これは意に介するに及ばないことである。もし神父について何か云ひ分を持たれ

るならば自分に通知せられたい。その辯明は自分がする」といふ意味のことが認めてあつた。

この書簡は六月一日に日乗に届けられたが、日乗は激怒して即夜惟政宛に次のやうな趣旨の返書を送つた。「内裏の宣教師追放令が出たのは五年程も前のことである。綸言汗の如し。追放令は撤回され得ない。しかるに貴下はこの追放令に反して行動してゐる。これは未曾有の不正事といはなくてはならぬ。この道理を悟つた信長や將軍は、今や追放に關しては内裏の意向に一切を委ねた。貴下は内裏・將軍・信長などに背反してもキリスト教を庇護せんとするのであるか。元來、キリスト教は悪魔の教であるが故に、内裏及び公家たちは、宣教師の誅殺、會堂の破壊を命じたのであつた。この内裏の命に反對するものは天下になからうと思はれる。山城攝津の守護たる貴下がそれを守らず支持庇護の態度に出るならば、信長はこれを心外とするであらう。貴下は靜かに反省して庇護をやめるべきである。」

この返書によつて見ても、日乗が新しい追放綸旨を受けたとは考へられぬ。彼は五年前の綸旨の有効を主張してゐるのであつて、フロイスたちが怖れてゐたやうに、新しく宣教師追放誅殺の綸旨を受けたのではない。しかしフロイスたちがさう感じたとするれば、日乗の威嚇は成功してゐたのである。フロイスはこの返書を惟政に届ける前に讀み、直ちに重立つた信者を集めて對應策

を協議した。信者らの意見は岐阜の信長に頼ることに一致した。そこでフロイスは翌日未明に京都を立ち、坂本でロレンソを待ち受ける、ロレンソは日乗の返書を携へて和田惟政を訪ね、信長側近の大身への紹介状を得てくる、といふことになった。

翌日未明には小西隆佐とその一子がフロイスに伴つて出發し、坂本で知人の家を宿に世話した。その子はロレンソの來るまで附添つてゐた。ロレンソは越水城で惟政に會ひ、日乗の返書を見せた。惟政は微笑しながら、この法螺吹きを首を斬つてやる、と云つた。フロイスの岐阜行きについては、自分が案内したのであるが急には間に合はない、と残念がりながら、二通の紹介状を與へた。一は秀吉にあてて神父のとりなしを依頼したもの、他は岐阜の宿屋の主人に宛ててフロイス一行の世話を頼み、費用萬端は自分が引受けると云ひ送つたものであつた。他に丁度美濃へ行かうとしてゐた柴田勝家にも庇護を依頼した。ロレンソは右の紹介状を携へて小西隆佐と共に六月三日に坂本についた。そこでフロイスの一行は夜の三時に船で坂本を出發した。

四 フロイス岐阜に信長を訪ふ

岐阜は當時人口一萬位に過ぎなかつたが、新興の城下町として、「バビロンの雑沓」を思はせるほどに、商人や商品で混雜してゐた。フロイスの着いた時には、秀吉は尾張に行つて居らず、佐久間信盛、柴田勝家もまだ着いてゐなかつたので、二日ほど空しく待つてゐた。その内に先づ着いたのは佐久間、柴田の兩人で、フロイスはそれらの人たちに會つた。二人が信長にフロイスの來たことを告げると、信長は、「内裏の宣教師追放誅殺の繪旨は困つたものだ。神父のある所、破壊が起るなどは迷信に過ぎない。神父は外國人だから自分は同情し庇護する。京都から追放させてはいけない」と云つたといふ。そのあとで、新築の宮殿の方へ出掛けて行く時に、フロイスは途上で信長に出逢つた。信長は機嫌よくフロイスを迎へ、こんなに遠くまで來る必要もなかつたのにと云つた。さうして柴田、佐久間、その他七八人の人と共にフロイスを新築の宮殿に案内した。この宮殿は岐阜城のある稻葉山の麓の斜面に四段に互つて建てられてゐた宏壯なものであつたらしいが、信長はフロイスに向つて、「ヨーロッパやインドのものに比べると小さいではあらうが、しかし貴下は遠來の客であるから、自分で案内してお見せする」と云つたといふ。その宮殿を敘述するに當つて、フロイスは、「ポルトガル、インド、日本に互つて自分がこれまで見た宮殿建築中、これほど精巧で美しく清らかなものは一つもなかつた」と云つてゐる。

その後二三日経つて秀吉が尾張からやつて來た。フロイスはロレンソと共に惟政の紹介状を持

つて訪ねて行つた。秀吉は彼らを款待し午餐を供した上、フロイスの宿の主人宛にフロイスを優遇するやうにとの書簡を作らせ、依頼の件は満足の行くやうに計らふから、ゆつくり休んでゐるがよいと云つた。この時フロイスはロレンソと相談して作つた四五行の覺書を秀吉に渡したのであるが、秀吉はそれを信長の所へ持つて行つて指令を仰いだ。すると信長は、それは簡單過ぎると云つて、内裏及び將軍に宣教師の庇護を請ふ一層長い書簡を書かせ、それに署名して秀吉に渡した。秀吉はこの信長の書簡に、惟政及び日乗に宛てた自分の書簡二通を加へて、フロイスに渡し、さつさと戰場へ歸つて行つた。フロイスが信長に禮を言ひに行くためには、また柴田勝家の手引きを頼まなくてはならないやうな始末であつた。

フロイスが勝家に伴はれて信長の前へ出たとき、信長は多數の京都の武士の面前でフロイスに云つた。内裏や將軍を意に介するには及ばぬ。すべては信長の權内にあるのであるから、信長の言に従つて行動し、居たい所に居てよい、と。さうしてフロイスが翌朝出發しようとするのを更に二日延期させ、翌日は京都の武士七八人と共にフロイスを饗應し、食後城を見せるといふ手筈をした。この信長の優遇は、前例のないものとして、人々に強い印象を與へた。

翌日、饗宴の後に、柴田勝家がフロイスとロレンソを案内して城の山に登つた。信長は城の中

に住んでゐたので、表の方には大身たちの子息である少年武士が百人ほど詰めて居り、奥の方は侍女のみが用を辨じて何人も入ることが出来なかつた。フロイスたちが信長の室に招き入れられると、信長の子息、十三歳の信忠や十一歳の信雄（實際は十二歳であつた）も接待に出た。信長が信雄に茶を命ずると、信雄は最初にフロイスの前へ、次に信長の前へ、第三にロレンソの前へ茶碗を運んで來た。そこで茶を飲みながら、美濃尾張の平野を遠くまで見晴らした。信長は、インドにもかういふ城のある山があるか、と尋ねた。それから二時間半か三時間ほどの間、次々に日月星辰のこと、寒地と暖地との相違、諸國の風俗などのことを質問した。その間に信雄を呼んで夕食の支度を云ひつけさせたりなどもした。このことは信長としてはよほど異例であつたらしい。やがて立つて行つたが、自分でフロイスの膳を捧げ、信雄にロレンソの膳を持たせて出て來た。さうして、急のことで何もありませんが、といふ挨拶をした。食事のあとで信長はフロイスとロレンソに美しい衣服を與へ、直ぐに着させて、よく似合ふ、また訪ねてくるがよい、と云つて彼らを歸らせた。

このやうに信長訪問は非常な成功であつた。それを記述してゐるフロイスは、現世のことを蔑視すべきヤソ會士が何故にかくも異教の權力者の款待を重視するかについて、長々と辯解してゐる

る。この國においては、権力者の意志を捉へ、なくては、布教は出来ないのである。がこの時にはまだ信長は、新しい時代の形成者としての姿をはつきりと現はしてはゐなかつた。競争者は東にも北にも西にもなほ健在であつた。信長がこれらの競争者に打ち克つといふ時代、即ち元龜天正の時代は、まさにこれから始まらうとしてゐる時であつた。この時に逸早く信長に眼をつけ、その意志を捉へることに全力を傾注したフロイスの炯眼は、感服のほかはないのである。

五 日乗の惟政排斥運動、日乗の失脚

しかしフロイスの見當がすぐに實現したわけではなかつた。日乗が失脚してキリスト教排斥運動をやめるまでにでも、一年餘は經つてゐる。

フロイスが信長や秀吉の書簡を得て京都に歸り、惟政と協議して日乗のキリスト教排斥運動を封じようとした後にも、日乗はその態度を改めなかつた。惟政が日乗に送つた書簡には、信長が宣教師庇護の態度を取つてゐること、内裏にも將軍にも宣教師排斥の意志はないことを力説し、おのれの宣教師庇護の理由は遠來の外國人であるが故であつて他意はないといふ風に穩やかに出たのであつたが、日乗は前の主張を引込めないのみか、一層露骨に狂信者のな信仰闘争の態度を

示して來た。信長や秀吉の書簡はほとんど眼中に置かないかのやうであつた。のみならずこの折衝の五六日後には、みづから信長に會ふために岐阜に向つて出發した。その用件は主として内裏の修復、公家の所領の處置に關するものであつたと思はれるが、フロイスたちは宣教師追放問題のためであらうと推測し、惟政に頼んでそれに對抗する措置をとつたのであつた。日乗は勿論岐阜においても信長の宣教師に對する態度を變更させることは出来なかつたが、惟政に對する敵對心はそれによつて一層高まり、キリスト教排斥の運動を惟政排斥の運動に轉じたやうに見える。

異教徒である惟政は、フロイス庇護の運動を續けるうちに、漸次その信仰にも親しんで行つた。フロイスが岐阜から歸つて來た頃には、高槻に會堂を建築し、宣教師を自由に宿泊せしめようと考へてゐた。萬一内裏が宣教師追放を決定したならば、その宣教師を高槻にひき取り、自分が京都に出る度毎に同伴して行つて一月でも二月でも滞在させる、さういふことを考へてゐた。しかしさういふ風に惟政が宣教師庇護に力を入れることに對しては、山城攝津の武士のなかに不平を抱くものも決して少くはなかつた。日乗が眼をつけたのはその點である。彼は信長の信用しきうな有力な武士で惟政を快く思はないものを煽動し、惟政の行政を非難させた。またさういふ證言を集めて、巧みに信長に吹き込んだ。さうして遂に惟政に對する信長の信賴の念を突き崩すこ

とに成功したのである。

かうして一五六九年の秋惟政が岐阜に信長を訪ねて行つたとき、信長は惟政を岐阜に入れず、追ひ返した。さうして高槻のそばの要害芥川城を破壊させた。領地の一部も没収された。惟政は部下二百人と共に剃髪して謹慎の意を表した。日乗たちはこの惟政の失脚を宣教師庇護の罰としてはやし立てたが、惟政の宣教師に對する態度は少しも變らなかつた。自分の不幸な運命などは意に介するに足らぬ。宣教師が無事に京都にゐることの出来るのが何よりである。もし宣教師が追放されれば、自分はインドまでもついで行く。さう彼は云つた。

一五七〇年は信長を中心とする争覇戦がいよゝ／＼始まつた年である。この年の三四月頃には信長と家康とが揃つて入京し、夏には北方の勢力朝倉淺井との衝突が始まつた。その信長の入京の際に、和田惟政は高槻の城から信長に會ひに來た。日乗らの仲間は、信長が惟政の首を斬らせるであらうと待ち構へてゐた。しかるに信長は、突然惟政を招き、多數の諸侯の面前で非常に情ある言葉をかけた。さうして美しい衣服を與へ、領地を増してやつた。これは日乗らにとつては案外のことであつたが、その五六日後に、日乗は、他の人々から重罪の訴へを受け、信長の激怒に觸れた。信長は多數の大身たちの面前で日乗を罵り、彼奴を足蹴にして追ひ出せと云つた。その

後も日乗は内裏修復の仕事にかじりついてはゐたが、もはや信長の愛顧を得ることは出来なかつた。日乗を中心とするキリスト教排斥運動はこれでほと終りを告げたらしい。

六 戦亂に對するフロイスの方針と惟政に對する讚美

日乗のキリスト教排斥運動は以上のやうにして片づいたが、しかしすぐ引き續いて慌しい戦争騒ぎが起つた。淺井朝倉に對する夏の戦争は、姉川で信長方が綺麗に勝つたのであるが、それがきつかけとなつて秋には一層大きい戦争が巻き起つて來たのである。三好三黨は再び攝津に盛り返して信長に反抗した。石山の本願寺がこれに應じて立つた。信長はその討伐のために西下して來た。惟政も信長の部下の有力な將として攝津に轉戦したが、信長方は相當の苦戦であつた。北方の淺井朝倉は三好三黨に呼應して再び立ち、近江の坂本城を攻陥して京都の郊外に侵入し、信長を背後から脅かした。この時信長は、柴田勝家と和田惟政とを殿軍として三好の軍に當らせながら、實に急速に京都に引き返し、咄嗟に坂本に出て淺井朝倉の軍の退路を絶つたのである。淺井朝倉の軍は叡山へ逃げ上るほかはなかつた。信長は叡山の衆徒を味方につけて淺井朝倉の軍を降らせようとしたが、衆徒はこれに應じなかつた。そこで彼は東と西とから叡山を包圍し、山

上の軍隊を自滅せしめようと計つたのであつた。包圍の開始は寒さの近づき始めた十月の末であつた。

フロイスが包圍開始後一ヶ月の頃に書いた書簡(一五七〇年十二月一日、京都發)によると、この時の市内の混乱と不安とは實に甚だしく、最後の審判の光景を見るやうであつたといふ。何故なら、勝利はまだいづれに歸するとも解らず、信長が負ければ京都の町は焼かれ蹂躪されるからである。そこで市民は山上に穴を掘り、街路に逆茂木を設け、家財を隠し、妻子を市外に避難させた。しかもその市外には強盗や殺人が横行してゐた。市内でも、夜警・叫喚・警鐘・突撃などともじめなことがかりであつた。フロイスも、大切な祭具は愛宕山に送り、他の家財は數人の信者の家に預けて、會堂には古い祭具だけを残して置いたのであるが、しかしそれを使つてミサを行ひ、説教を續けてゐた。包圍のために食糧は著しく缺乏してゐたが、それでも信者の好意で米と乾大根乾蕪などの貯藏があり、包圍の繼續中持ちこたへ得る見込みがついてゐた。かうして混乱のなかで會堂を維持し布教を續け得たところを見ると、市民大衆のなかに積極的なキリスト教排撃運動などなかつたことは明かだといはねばならぬ。

ところでこの年、一五七〇年の夏には、布教長フランシスコ・カブラルが志岐に着き、日本のヤソ會士の指揮をとつた。信長が三好黨の討伐を始めた十月初めには、トルレスがその志岐で死んだ。その同じ頃に、カブラルに従つて來たオルガンチノが堺に着き、出迎へたロレンソと共にそのまゝ堺に留まつてゐた。戦争で京都へ來ることは出来なかつたのである。そのロレンソからフロイスの許へ三好三黨の反キリスト教的な傾向を知らせて來た。宣教師を庇護する領主や大身は必ず没落するから、今度勝利を得たならば、直ちに宣教師を京都から追放しようといふのである。この報を受けて、萬一信長や惟政が敗れた場合には篠原長房に頼らうと考へてゐたフロイスは、すつかり腹を据ゑて、信長にのみ頼らうといふ覺悟をきめた。信長が敗れても、彼が生きてゐる限りは、その領内へ行つて布教をしよう。やがてまた彼が勝利を得た時には、京都へ歸つてくることも出来る。かうフロイスは、勝負のまだきまらぬ内に考へてゐたのである。

その後包圍はなほ一ヶ月半ぐらゐ續いた。山上の軍隊も疲勞困憊して來たが、一層參つたのは物資の供給を絶たれた京都の市民であつた。そこで將軍が調停にのり出し、正親町天皇も勅使を派遣されるといふことになつて、遂に妥協が成立し、包圍は解かれた。この間に三好三黨の南からの壓迫をはね返したのは、和田惟政と木下秀吉との働きであつた。

フロイスがオルガンチノを京都へ迎へ入れたのは一五七一年の一月一日(元龜元年十一月十六日)で、信長

が包圍を解いた日より八日前であつた。このオルガンチノはフロイスの到達した決意と方針とをそのまま受け入れた人で、信長時代のキリスト教の隆盛と深く關係してゐるのである。

フロイスの功績は、新しい信者を數多く獲得するといふことではなかつた。信者の數はむしろ死亡によつて減少して行つた。彼の努力はむしろ信仰を深め、その退轉を防ぐことであつた。殊にこの戦亂の期節においてはさうであつた。長期に亙つて布植せられた佛教の勢力は中々抜き難く、また京都には諸宗派の精銳が集まつてゐるのであるから、京都で一人の日本人を改宗せしめることは他の國々で二百人を改宗せしめるよりも難しいことであつた。しかしフロイスは、その中で教會を維持しつゞけ、親族の強硬な反對にもかゝらず信仰を貫き通した少年、コスモや、清淨の理想を追うて結婚することなく死んで行つた愛らしい少女、パウラのやうな、感嘆すべき信者をも出したのである。がそれよりも著しいフロイスの功績は、京都における教會の存在の權利のために戦ひつゞけ、和田惟政や織田信長の意志を捉へることによつて、政治的に、或は公共的に教會の地位を確立したことであつた。

この仕事のために異教徒和田惟政がフロイスを助けた態度には、實際驚くべき一貫性や強靱さ

があつた。彼は高山ダリヨと親しく、キリスト教徒に同情を持つてゐたには相違ないが、しかし狂信者らしいところは少しもなく、従つて右の態度も信仰の情熱から出たのではない。フロイスによると、惟政は非常に愛情深く、一度人の保護をひき受ければ、そのため領地を失ふやうなことがあつても決して保護をやめなかつた。心變りといふことを非常に憎んだといふ。また家臣との間も非常に親密で、外から見ると君臣の差別が附かなかつたといふ。これは、生命を賭して信賴に答へるといふ、鎌倉武士の獻身的な態度にはかならない。惟政はこの古風な武士氣質の人であつたと思はれる。しかしフロイスを保護し通した態度には、因襲に縛られた保守主義的な傾向と正反對なものがある。外國人を受け容れ、愛情をもつてこれを庇ひ、その説くところには虚心坦懐に耳を傾ける。従つてもし戦争が彼を妨げなかつたならば彼はキリスト教に歸依したかも知れない。高槻城にフロイスとロレンソを迎へた時、彼は妻子と共にロレンソの二時間に亙る説教を聞き、非常に興味を覺えた。でロレンソをひきとめて四日間續けて説教をきき、靈魂不滅の教に深く感動した。しかしこの時は戦争騒ぎで聽聞を中斷され、その後再びそれを續ける機會が來なかつた。惟政としては、教義を根本的に理解した上で、また自分がキリシタンとなつても差支へのないやうに一切を處理した上で、受洗するつもりであつたが、その暇を得ないうちに戦死し

てしまつたのである。この惟政の新舊いづれにも囚はれない自由な態度は、當時の武士の一つの類型を示すものとして、十分重視せらるべきであらう。

一五七一年九月、惟政の戦死後間もなく、フロイスはインド地方區長に宛てて、惟政に関する愛情のこもつた長い書簡を送つてゐる。それによつてフロイスは、この異教の領主の、護教の功績を永遠に記念したのである。惟政の戦死は、惟政に似合はない油斷の結果であつた。この時の敵は、曾て惟政の味方であつた攝津池田の城主の家臣たちであつた。彼らは遠くを達觀することの出来ない勇猛一途の連中で、城主を逐ひ出し池田の實權を握つて新興の信長の勢力に反抗しようとしたのであるが、惟政はこの下剋上の現象の故に彼らを蔑視し、警戒を怠つて奇襲にひつかつたのであつた。

フロイスはこの日、河内の三箇にあつて悲報を聞いた。京都へ歸るために護衛兵を惟政に頼んでやつた使が、この悲報を持つて歸つて來たのである。京都の會堂ではオルガンチノとロレンソとが、この庇護者の戦死のあとに起るべき迫害について協議を始め、急いでフロイスを京都へ迎へ取る方法を講じた。教會の人々の感じた不安と悲痛とは非常なものであつた。ロレンソは、近江の國まで來てゐる信長にすぎるために、一五七一年九月二十八日に京都を出發した。

ところがその翌日、實に意外な事件が突發し、教會の人々の不安などはどこかへ吹き飛んでしまつた。

それは信長の叡山燒討である。こんな思ひ切つた傳統破壊は、戰國時代の亂暴極まる武士たちでも、否、佛敎打倒を心から望んでゐた宣教師たちさへも、全く思ひがけぬことであつた。

第九章 信長の傳統破壊

一 本願寺との敵對、叡山燒討

織田信長が佛教に對してはつきりと彈壓の態度を取り出したのは、一五七一年からである。その直接の機縁となつたのは、前年の秋の畿内における苦戰であつた。攝津では大坂、石山の本願寺が三好三黨にくみして立ち、彼の攝津制壓を妨げたのみならず、伊勢尾張の門徒をして木曾川下流右岸の長島に據つて信長を背後から脅かさしめた。京都では叡山の衆徒が淺井朝倉の軍を助けて信長の京都把握を危殆に陥れた。結局彼は、本願寺に痛棒を與へることも出來ず、淺井朝倉を制壓することも出來ず、淺井朝倉と一時和を講じて岐阜にひき上げたが、本願寺や叡山を打倒しなくてはならないといふ考は、この時に萌したのであらう。

彼が先づ手をつけたのは本願寺の勢力の打倒であつた。一五七一年の初夏には、信長はみづから諸將をひきゐて伊勢の長島に迫つて行つた。しかし一向一揆の力は彼の豫想を裏切るほどに強

力であつた。だからこの時には信長は、兵を損することを恐れて、いゝ加減にしてひき上げたのである。長島征伐はこの後三年の間懸案として残り、一五七四年の夏に至つて、三ヶ月間の強攻の後に、遂に二萬人皆殺しといふ威脅的手段に出たが、しかし石山の本願寺はひるまなかつた。次の年には越前の本願寺一揆を討伐したが、本願寺の反抗は一層高まつた。いよいよ石山の攻圍にかゝつて見ても、五年間に亘つて遂にこれをくだすことは出來なかつた。結局一五八〇年に至つて、信長は皇室の仲介を請うて和を講じ、本願寺を石山から紀州の雜賀に斥けることが出來たのである。この經過によつて見れば、信長の霸權時代の大部分は本願寺との敵對のうちに過されたと云つてよい。信長の反佛敎的な態度が根強かつたのは、その故であるとも見られよう。

本願寺との長期に亘る關係に比べると、叡山との關係は極めて單純であつた。叡山が信長に反抗して淺井朝倉の軍を立て籠らしめた年の翌年の、正月の賀に、細川藤孝が信長を岐阜に訪ねたとき、信長は叡山燒討の意圖を洩らしたが、藤孝は聞かぬ振りをして歸つて來たといふ。王朝文藝に通達した學者でもあつた藤孝にとつては、たとひ衆徒の墮落が眼にあまるほどであつたとしても、この傳統の聖地を破壊するなどは思ひも及ばぬことであつたに相違ない。従つてこの言葉を聞いても、まさか實行するつもりだとは思はなかつたであらう。しかし信長は、「日本で不可

能なことを考へられてゐた」ことを敢て實行するやうな偶像破壊者であつた。一五七一年夏に、淺井の兵が近江に進出したのをきつかけとして、その秋信長はまた近江に大軍を入れ、淺井の軍を北に壓迫しつゝ、三井寺から東坂本まで達したが、その時、信長は突如として叡山攻撃の命令を發したのである。部下のものも驚愕して諫止しようとしたが、信長の決意は動かなくつた。叡山の衆徒だけでは到底信長の軍を防ぎ得るものではない。叡山の力は八百年の傳統を背負つた教權や、それを象徴する山王の神輿などにあつたのであつて、それを恐れないものにとつては物の數ではなかつた。信長は平氣で山王二十一社やその神輿を焼き拂つた。また根本中堂をはじめ山上の堂塔四百餘をも餘すところなく焼き拂つた。僧侶千五百、それに附隨するほゞ同數の俗人（その中には多數の美しい稚兒や、稚兒に仕立てた美女があつたといはれるが）、それらをも一人残らず殺戮させた。

このやうな未曾有の傳統破壊を執行しながら、信長は平然として即日京都に入り、將軍に會つて政務を見た。京都市民に米を貸し、その利子で公家の生活を救ふといふ風な手を打つたのもこの時である。内裏の修復をも促進して、その秋に工事を完成させるやうにした。フロイスやオルガンチノも、叡山全滅をキリスト教弘布のよい機會として喜びつゝ、信長を訪ねて款待を受け、

長い間話し合つた。その後この二人を一層喜ばせたのは、キリスト教排撃の原動力となつてゐた竹内三位が、將軍の前で信長の没落を豫言したといふやうなことから信長の忌避にふれ、信長退京の途中で斬首されたことであつた。

かういふ情勢になつては、宣教師たちを脅かしてゐた追放の問題などは、何時の間にか消えてしまつたのである。

叡山焼討で永い傳統を背負つた佛教の教權が崩れ、キリスト教弘布の道が開かれたかのやうに感ぜられてから間もなく、布教長フランシスコ・カブラルの巡視が行はれた。

カブラルは一五七〇年の夏天草島の志岐に着いてトルレスに代り日本におけるヤソ會の指揮をとり始めたのであるが、志岐で第二回の宣教師會議を開いた後、先づ九州諸地方の巡視にとりかかり、それを終へて堺まで來たのは一五七一年の末であつたらしい。一五七二年の初めには、フロイスやロレンソを連れて岐阜に信長を訪ねた。その時の饗應の席で、信長が宣教師の肉食のことを尋ね、カブラルが大つぴらに肉食する旨を答へると、信長はその態度をほめ、「坊主は内證でやつてゐる」と云つたといふ。佛僧に對する信長の反感は事毎に現はれたのであらう。京都では

オルガンチノも一緒に將軍に謁し、非常に厚遇せられた。その後カブラルはフロイスと共に河内や攝津の信者群を訪ねた。これらはビレラの開拓した地方で、そのキリシタン武士たちの信仰を堅固に維持させて行くことが、當時の京都の教會の最大の仕事であった。でカブラルは復活祭を三箇で營んだ。さうして一五七二年の夏の間に九州に歸つたのであるが、この巡視旅行の全期間を通じて、人々の怖れてゐたやうな危険は少しもなく、將軍、信長、その他大身たちから、周圍の人々の驚くほどの優遇を受けた、とカブラルは特筆してゐる。反キリスト教的な氣運はとにかく鎮まつたのである。

二 信長の危機、京都の攻圍戰

しかし時勢は平和な傳道などには不向きであつた。元龜天正の兵亂は漸く白熱點に達して來たのである。信長を東と北と西とから壓迫してくる諸勢力は、丁度この頃に、相結んで信長を打倒しようとした。一五七二・三年の頃は信長にとつて最も大きい危機ではなかつたかと思はれる。その中心的な勢力は東から迫ってくる武田、信玄であつた。彼は將軍義昭が信長の權力に對して不平を抱くのを利用し、これを味方につけた。さうして西の方は石山の本願寺をはじめ、松永久秀、

叡山の殘黨等とも聯絡をとり、北の方は淺井朝倉と協力を約した。この形勢に氣づいた信長は、一五七二年晩秋、義昭に對して十七ヶ條の問責書を發したが、同じ頃にもう信玄は數萬の兵を率ゐて甲府を出發したのである。信長と義昭との間の交渉は、もうこれまでのやうに簡単に解決しなかつた。幾度も使者が往復し、義昭が信長の急襲に備へて二條城の防備を堅くするといふやうな態度を取つても、信長は宥和政策を續けて動かうとしなかつた。一五七三年の初めには信玄の軍が三方ヶ原で家康の軍を破つたが、信長はなほ信玄に對して和親の努力を續け、義昭に對しても溫和な使者を送つておのれの娘を人質に出さうとさへもした。この際強硬であつたのはむしろ信玄と義昭とである。信玄は義昭にあてて信長の罪五ヶ條を數へた意見書を送つたが、叡山撲滅はその罪の大きいものであり、従つて叡山復興が信玄の主たる目的とされてゐた。フロイスによると、信玄は信長に宛てた書簡に「天台の座主沙門信玄」と署名し、信長はその返書に「第六天の魔王信長」と署名したといはれる。これは二人の英雄の間に取り交はされた諧謔の應答に過ぎぬが、しかしその背後には兩者の佛教に對する態度が示されてゐる。フロイスはその點を敏感に感じて、信長が容易に上京し得ないやうな窮境に陥つてゐることを憂慮し、信玄が上京して叡山を復興した場合の迫害についてさへも心構へをしようとしてゐた。

がさういふ不安はフロイスに限つたことではない。京都の市民全體が非常な不安に陥り、避難の準備で騒いでゐた。家財の荷造り、市外への運搬、それに對する兵士たちの掠奪、さういふ騒ぎが毎日續いた。フロイスも祭具や書籍を醍醐、八幡などに送つた。やがて女子供たちの避難も始められた。當時オルガンチノとロレンソは三箇に滞在してゐたが、その三箇の領主はフロイスに避難をすゝめて來た。攝津の高山ダリヨも、丹波の内藤ジョアンも、度々その居城へ來るやうにとすゝめて來た。京都の信者たちも同意見であつた。いよゝ京都の町が兵火に焼かれる時は、フロイスを救ふことが困難になるからである。

しかしフロイスは動かなかつた。自分の任務はキリスト教の信仰を日本人にすゝめることである。信長は自分たちの親友であり、キリスト教を庇護してゐるのであるから、その軍隊が京都へ侵入しても、信者や會堂に對して害を加へることはあるまい。信長の軍隊が近づいてくれば、自分分は市外に出迎へて、カブラルからの贈物の楯や書簡を渡すつもりである。かう彼は云ひ切つた。市内の騷擾が主として心理的な不安に基くことを、彼は見抜いてゐたらしい。或る日一群の盜賊たちが、掠奪の機會を作るために、信長來襲、二條城炎上といふ虚傳を飛ばした。すると京都の市内は、俄然、「最後の審判の日」のやうな混亂に陥つた。さういふ市民の心理状態を彼は觀察してゐたのである。

義昭は春の彼岸の頃に遂に兵をあげた。それに對して即座に信長が打つた手は、柴田明智等の部將を派遣して石山や今堅田の城を陥し、京都への通路を確保することだけであつた。信長が大軍を率ゐて京都に來たのはそれよりも一ヶ月ほど後のことであるが、その當時京都では、信長の上京は到底不可能であらうと信せられてゐた。東からの信玄の壓迫、北からの淺井朝倉の攻撃が、信長を危地に陥れてゐるからである。京都の義昭は、攝津の三好黨や本願寺の勢力を味方として、今や確乎たる地歩を占めてゐるかのやうに見えた。

この頃にフロイスの前に大きく現はれて來たキリシタン武士は、丹波の八木の城主内藤ジョアンであつた。ジョアンは前年京都でカブラルに會つたときには、「憐れむべき窮乏の状態」にあつたといはれるが、僅か一年後のこの時には、二千の兵を率ゐ、十字架の旗印を掲げ、兜にゼズスの金文字を輝やかせながら、將軍義昭の味方に馳せ參じて來たのである。義昭は非常に喜んでこれを迎へた。ジョアンはその日の午後、キリシタンの兵士たちをつれて會堂にフロイスを訪ね、告解のための準備を熱心にはじめた。その熱心、謙遜、從順な態度は、フロイスに非常によい印象を與へた。このジョアンがこの時以來會堂や信者に手厚い保護を加へたのである。その後彼は、

高山右近などと共に、最後までキリシタン武士としての操守を貫いた。

その高山右近も丁度この頃に表へ浮び上つて来た。彼は父の高山ダリヨと共に和田惟政の部下として高槻城を守つてゐたのであるが、惟政の戦死後、後を繼いで城主となつた惟長の統率力の不足から、遂に悲劇的な異變をひき起すことになつたのである。事の起りは、惟長の家臣のうち、高山父子の聲望と勢力とを妬んでこれを除かうとする連中があつたことである。惟長はそれと同じたわけでもなささうであるが、またそれを抑へることも出来なかつた。で惟長が高山父子を誅しようとしてゐる、といふことが、高山父子に傳はつた。高山父子は、和田惟政に代つて權力を握つてゐる荒木村重の諒解のもとに、遂に惟長の不意を襲つた。當時十九歳の青年であつた右近が同じやうに若い惟長と渡り合つて共に傷ついた。この争を調停したのは、桂川の西の地方を領してゐた細川藤孝である。その結果、惟長は高槻城を出て伊賀に歸り、高山ダリヨは高槻城主として留まることになつた。が間もなく惟長は、右の負傷のため伏見の城で死んだ。キリスト教を外護した和田惟政のあとはかうして絶えたが、その代りキリシタン武士高山右近の活躍がこれから始まるのである。

ところが、その惟長の歿後十日ほどを経て、上京不可能であらうと思はれてゐた信長が、突如

近江の國に姿を現はした。一五七三年の四月末であつた。その報が達すると共に、義昭は急いで味方の兵を二條城に籠らせ、濠の橋を引いた。内藤ジョアンも部下の兵と共に城に入つた。市民はまた大混亂に陥つた。フロイスもまた家財の荷造りや發送をはじめた。内藤ジョアンは護衛兵、馬、人夫などを出して、その荷物を丹波へ送らせた。さうして熱心にフロイスに丹波へ避難することをすすめた。しかしフロイスはなほ會堂と信者とを見捨てなかつた。丁度その頃に細川藤孝と荒木村重とは、信長の軍を逢坂まで出迎へたのである。もし内藤ジョアンが信長方であつたらば、フロイスも信長を出迎へることが出来たかも知れない。

信長は四月三十日(天正元年三月二十九日)午前、京都の東の郊外に入り、智恵院から祇園へかけて陣を取つた。フロイスはその午後、カブラルの信長への書簡や贈物の楯などを携へて小西隆佐の家を訪ねた。多分信長への接近の手だてを隆佐に相談しに行つたのであらう。隆佐の家では家族は皆避難し、隆佐と子の行長だけが武器を持つて残つてゐた。隆佐の智慧を以てしてもフロイスの計畫は實行し難かつたのであらう。フロイスは書簡と楯とを隆佐に託し、機會を見て信長に届けるやうに頼んだ。さうしてフロイス自身は、十人ほどの信者のゐる九條村に避難することになつた。十數人の信者が同伴した。丁度麥が穂を出しかけた時分で、掠奪者が麥畑にひそんでゐたが、ま

たこちらにも麥畑に隠れることが出来た。九條村では信者の親戚や知己の家を轉々して隠れてゐたが、掠奪に來た荒木の兵士やそれに内應した村人たちに對し、危険を顧みず敢然としてフロイスを庇つたのは、その父がキリシタンであつたといふ一人の異教徒であつた。その騒ぎのあとで信者たちはフロイスの避難先を相談し、夜の闇にまぎれて東寺の村へ連れ込んだが、迫害者の内通で、東寺の坊主らはすでにフロイスの隠匿を禁ずる觸れを出してゐた。この時にも、死を賭してフロイスを隠まつてくれたのは、老信者メオサンの親戚の異教徒であつた。その家にフロイスは八日間隠れてゐたのである。

その八日間に信長は一應京都のことを處理して、急速に京都をひき上げてしまつた。だからフロイスは信長には會へなかつた。しかし最初東山に陣取つた信長は、部下の兵士に京都市内へ入ることを禁じ、義昭に對して依然宥和政策を續けたので、フロイスが九條村へ逃げさへしなければ、翌日あたりには會ふことも出来たのである。カブラルの書簡と楯とを託された小西隆佐は、翌日即ち五月一日には信長を訪ねてその託されたものを手渡すことが出来た。信長は非常に喜んでフロイスやオルガンチノの消息をたづね、ポルトガルの楯をほめた。このことはすぐフロイスの方へ聯絡されたと見え、二三日後には隆佐に金米糖入りの瓶を持たせて再び信長を訪ねさせて

ゐる。

このやうに信長は、最初四日間、軍隊を動かさずに義昭に和睦をすゝめた。將軍は將軍として立てる。たゞ戦争と政治のことは讓歩して貰ひたいといふのであつた。義昭が承知しなければ實力を以て強行することも出来るが、しかしそのためには京都の市民や郊外の農民が非常な災厄を受ける。それは何とかして避けたい。さう信長は考へた。しかし義昭を取り巻く「若衆」の鼻息は頗る荒く、信長の足許を見透かしたやうな氣持になつてゐた。だから義昭は和睦に應じなかつた。そこで信長は止むを得ず五月三日に京都の周圍、二里から四里位の間の町村九十餘を焼き拂はせたのである。それは京都の市民がその家財や妻子を避難させた場所であつた。従つてそこで行はれた掠奪や暴行は實質上京都の町に加へられたのと同じであつた。フロイスが最初避難した九條村もこの日焼かれた。

この大破壊のあとで信長は再び義昭に働らきかけたが、義昭は依然として應じなかつた。上京や下京の市民は、市内へ手をつけないうやうにと熱心に信長に請願し、信長も下京に對しては焼かないといふ書付を與へたが、上京に對しては答へなかつた。しかし五月三日夜に上京に起つた火は、信長がつけさせたのではない。三十人ほどの掠奪隊が勝手にやつたことである。信長は部下

の兵士が京都の町に火を放つたのでないことを示すために、その夜軍隊を全然動かさなかつた。かうして五月四日の朝には上京の三分の一以上は焼けてゐた。そこへ信長は軍隊を入れて、二條城包圍に都合のよいやうに、残存の部分をも焼き拂つたのである。この上京の焼き拂ひでは多數の寺院の焼失が目立つた。信長が上京を容赦しなかつたのは、寺院が多い故であらうとも云はれてゐる。

信長は自分の築城したこの堅固な二條城、三つの堀と數ヶ所の稜堡を以て取巻かれたこの要害を、攻撃によつて陥さうなどとはしなかつた。周圍に四つの城を設け、通路を塞ぎ、糧道を絶つて、包圍の態勢を整へたのである。地元の細川藤孝などがその押へを命ぜられた。この形勢を見て義昭は和睦に應ずる態度をとるに至つた。五月八日(天正元年四月七日) 勅使が義昭と信長とを訪れ、信長は即日京都を去つてその日は近江守山に陣取つた。

この時の和睦が一時的なものに過ぎなかつたことは、事件の二十日後に書かれたフロイスの書簡にも明記せられてゐる。義昭は淺井朝倉や三好三黨の救援をあてにして一時免れの策を取つたのである。信長もそれを知つてゐた。だから彼は義昭の再舉を豫想して、琵琶湖に百挺櫓の大船十數艘を急造させ、京都急襲の用に備へた。

ところでこれらの信長の進退を東から牽制してゐた武田信玄は、三河野田の陣中で病み、信濃まで引き返して五月十三日に歿した。それは直ぐには發表されなかつたが、しかし東からの強い壓迫はこゝで止んだ。この信玄の死が恐らく信長にとつては實質上の運命の轉回點であつたであらう。従つて形の上では、信長のこの時の九日間の在京が、彼の地位を決定したのである。この時信長は、「その心が寛大であつて思慮があり、時に臨んでよくおのれの情を撓めることが出来る」といふ印象を京都市民に與へたといふ(フロイス、一五七三年五月二十七日都發書簡)。將軍の存在はもう宙に浮いてしまつた。

三 將軍の没落、淺井朝倉の滅亡、傳統破壊者の勝利

高山ダリヨはこの戦亂に際しフロイスの身の上を心配して數人の家臣に村々を搜索させたが、八日の後にやつと東寺にゐるのを見つけた。それは信長の退京の日であつた。その日京都からも信者が迎ひに来て、フロイスは會堂へ歸つた。翌日在京の信者たちが集まつて來たが、フロイスを見ると皆涙を流して泣いた。

内藤ジョアンは城を出てほとんど毎日會堂を訪ねて來た。兄の玄蕃も、家老の内藤土佐も、他